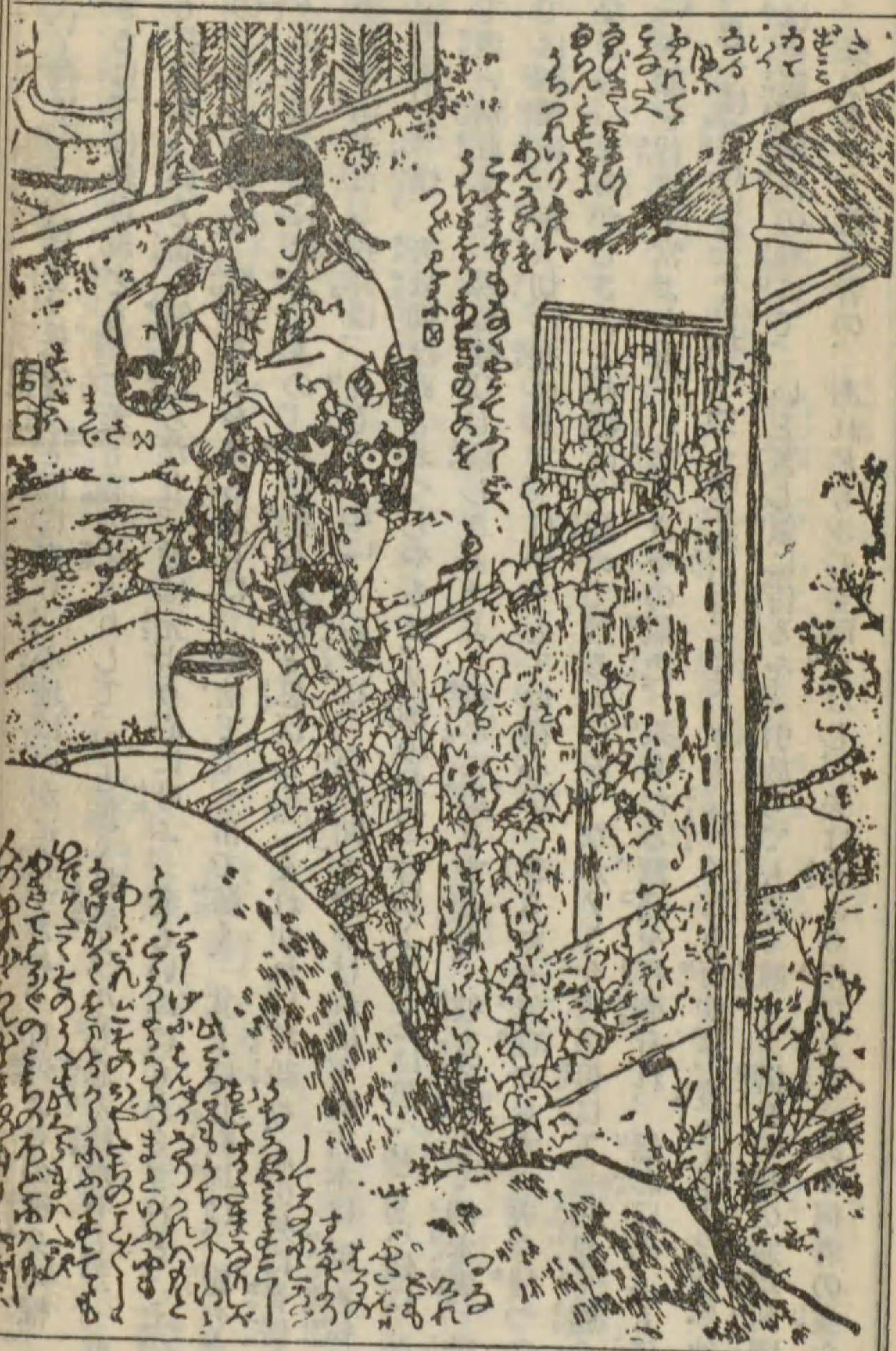
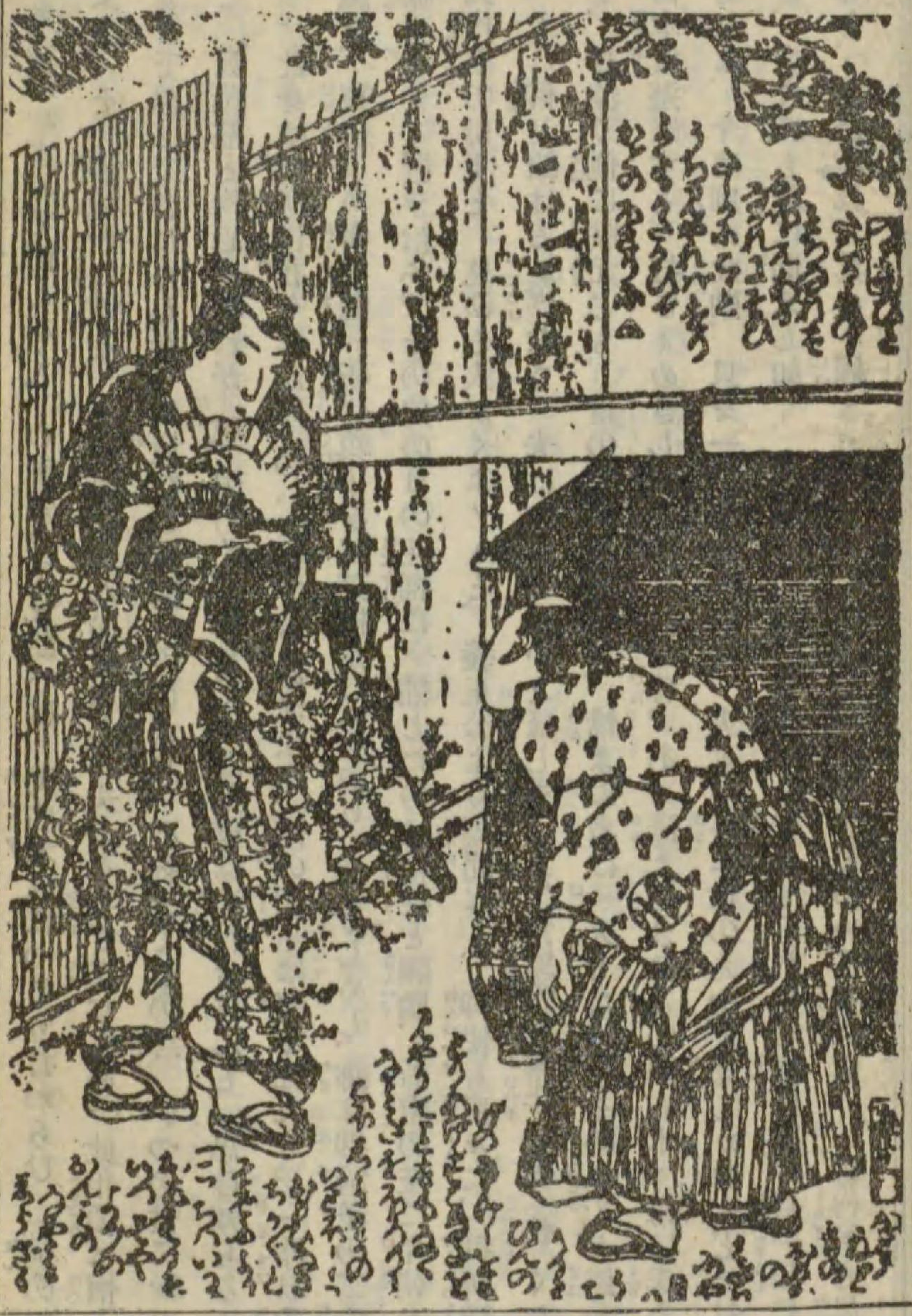
いつまで残りて在すべき、彼方は夜毎に變る枕、夫程深き執念の、遊女にあらん道理はなし」ト思ひも寄らぬ有樣にて、物語を外へ移し、「先程其方が持參した、虫籠、御菓子、秋の花、くさ〲を差上げしに、御紛になつて能いと、殊の外なるお喜び。今すや〳〵と御まどろみ御目が覺めたら御樣子を、御前へ出てうかゞや」ト引連れ奥へ入りにけり。

阿古木も心地常ならずと、引籠り居たりけるが、久しく廓にときめきて、主人も彼ゆゑ年々に、多くの金を得たる上、年期の程も僅なれば、心の儘に遊ばせて、客を迎へる事を勸めず、靜なる所へ移らば、氣の保養にもなるべしとて、鞍馬の野中の別莊へ、此頃送り遣りたる由、光氏仄に傳へ聞き、かの篠濤が小毬に、言ひつる事は知らざれど、二葉の上の煩は、もしや彼が怨かと、光氏も心の中に、豫て疑ひ居たりしかば、惟吉ばかりを供に連れ、思起して野中の里へ、至りし頃は秋の日の、はや西山に入果てて、いと闇うなりたれど、一度通ひし道なれば、覺ある流に添ひ、確に此所と内を見やれば、折よくも片貝が、門の邊に彳み居て、「いかなる風に吹かれてか、此方へ靡き給ひしならん」ト直に打連れ入りければ、案内を乞ふまでもなく、頓て臥床へ打通り、阿古木の體をつく〲見るに、さまで姿は衰へねど、物思ひの亂れにや、目は打潤み鬢の毛の、そゝけしをも取揚げず、此方を見遣りて言葉もなく、涙をはろりと翻しゝ樣の、いとほしう思ひなされ、近々と側に寄り、「心地はいかに在するぞ。日外よりの御身の惱、知らざるにては無けれども、二葉も春の末よりして、何と無く打患み、少し怠る樣なりしが、此頃又も打返し、いと苦し氣に侍るなり。彼は元より心に叶ふ、妻といふにもあらざれど、その親達のこと〲しく、歎かるゝを見るからに、振捨てても出で難く、其上に此鞍馬は、旅めきて遙々の、道の程には若し人の、目に懸らんかと忍ばしく、それかれに打紛れ、心の外に音信も、爲ずして過ぎたる我罪は、免してよや」ト懇に、語ひ聞え給ひければ、阿古木は涙押拭ひ、「二葉樣のお煩、夫故問はぬとおつしやるは、又例のかつこけぐさ。とは思へども六條に、かはりて遠い別莊まで、尋ね給ひし嬉しさよ。よし御心に染まずとも、彼方は正しく御本妻、殊に今では御懷妊、御大切に遊ばして、ほかへとては御心の、移らぬも無理ならず。夫を待つのは我ながら、おろかしさよと此頃は、諦めて居るものを、なか〱今宵の仰にて、物思や勝らんか」ト顏を背けて常よりも、心苦しきその氣色、乘りたる駕籠を打破られ、無念に思ふも道理と、思へば哀れに見なされて、「二葉が病の日にそひて、快くなり行かば、度々も來らんが、彼が患は生靈、物怪の類にて、いと苦し氣に侍るを、引放ちても出で難く、御身の父の寂寞阿闍梨の、靈なんどと言ふ者の、あれどもさして印もなし、夫は元より根なし事。あゝ何者の業なる





か」トまづ打かすめて何となく、心を引きて見給へば、阿古木はにつこり打わらひ、「何の怨もなき父上、その靈魂が内君を、苦しめ給はん謂はなし、夫こそ妾が業ならめ。此年頃は憎しとも、さまで思はで居たりしが、果敢なき駕籠の爭ひより、心動きてこの怨、いつの世にかは晴さんと、只茫然と物思ふ、わが魂のあくがれ出で、二葉樣に添行きけんと、思ひ知らるゝ事のあり。此身は此所に在りながら、ついぞ見もせぬ赤松の、館の樣子は能く知れり。一昨日昨日と打續き、東山より御見舞、折の菓子を二葉樣が、三ツ取りてきこしめし、跡は御厨子の二重目の、棚へ載せて置き給ふ。その前の日の花桶に、插したのは桔梗と龍膽、お床の左に今朝もあり。又内君の母上と、見ゆる人がくよ〳〵と、義正公より絶間なく、御使も度々に、御祈禱の事さへも、仰せ給はる忝なさ、夫につけてもいとほしき、身なれば隨分養生して、快くなりてよと、打泣く側に腰元ども、世の中に二葉樣を、惜まぬ者は一人もない、その思でも遠からず、御本復遊ばすと、打ざゝめきしは、昨日の夕暮。あゝ淺ましきはこの阿古木、母は氏ある人にもせよ、今は廓に此勤、只身一ツの憂き歎き、夫より外に世の人を、惡しかれなどとは思はねど、さきにも既に聞えし如く、駕籠の簾を引ちぎり、恥見せられたる祭の後、只一節に世を憂しと、思ひ浮れし其心、鎭まり難き故にやあらん、打まどろめば其夢に、かの内君と思しき人の、いと淸らにて在する所へ、行くかと思へば常々に、變りて心猛々しく、かの内君を引寄せて、打かなぐる事度々なり。この曉に見し夢も、彼所へ行きて内君の、顏つれ〴〵と眺むれば、頻りに嫉く又例の、ひたふる心起り來て、襟髮取つて膝に押付け、ひきまさぐると思ひしが、妾が袖に内君の、插し給ひし簪の、引かゝりて傍へ、からりと落つる音に驚き、目覺めて見れば夢なれど、その簪はこれ此所の、枕のもとに現にあり。是にて侍る」と取出すを、光氏手に取り打見れば、二葉が好みのかざし草、疑ひもなく夫なれば、身の毛よだつて物をも言はず。阿古木は又も涙に暮れ、「思ひより外なる物は心にて、此身を捨てて我魂の、彼所に浮れ行きつるか、現ともなき折々の、あるを怪しく思ひしなり。さまで無き事をさへ言立つるは人の口、まして此事世に洩れなば、さがなき名をや立てられん。死しての後に怨を殘し、人を苦しめなんどするは、物語にも見えたれど、夫をだにも罪深き、あら怖ろしの心やと、笑ひし者が淺ましや、其身は此世に在りながら、さる疎ましき事をして、人に嘲り譏らるゝは、過世の業にや侍らん。とは言ひながら夢に行き、夢にて人をさいなむは、思ひ止る樣もなし。つれなき君に露ほども、心を懸けじと愼まば、自らに止みもせん。あゝ夫とてもうたてやな、是より絶えて思はじと、思ふも物を思ふなり。父を亡ひ母にも別れ、便にすべき者もなく、子

はありながら只一言、母と呼ばせし事もなく、年頃萬憂きといふ、憂きは此身に積みたれど、斯くまでつらく悲しき事は、今まで覺え侍らず」ト、涙に其身も浮くばかり、歎けば聞き居る光氏は、あはれとも怖しとも、心地惑ひて默然と、差俯いてありけるが、兎にも角にも言宥め、阿古木が心の和ぐ時は、二葉の上の煩は、自然と平癒なすべしと、言葉を盡し理を盡し、さまぐ〵に言諭し、思ひの外に秋の夜も、明くるに近き鐘の聲、さらばとて別を告げ、立出で給ふ朝ぼらけに、此所は人目もあらざれば、阿古木は髪をも取上げず、亂れし姿の儘ながら、片貝に手を引かれ、枝折の戸口へ立出づつ、駕籠をつらせて徒路より、歸らせ給ふ御有樣、つれづれと打見送り、なほ振離れて伊勢の國へ、下らん事は思ひ返し、只うつかりと彳みけり。

十三編　下

二葉の上の日毎の苦しみ、阿古木の怨といふ事を、館の者は知らざれども、生靈の業なりとは、その樣著く顯れければ、世に知られたる驗者を多く、赤松政則招き寄せ、しかぐ〵の由を告げ、祈禱の事ども賴みければ、驗者はおの〳〵口を揃へ、「さばかり執ねき生靈は、容易くは退かず、あなたを調じて命を取り、此方を助け參らするが、是法の習慣なり」とて、頓て護摩の壇を構へ、北に向けて本尊を懸け、荊棘のある華を供じ、男木女木の燃立つ中に、けわんのけしを打燻れば、その薫一間に滿ち、火は飛散り煙は闇く、振立つる鈴の音、凛々と響き渡り、いかなる天魔の所爲なりとも、降伏すべくぞ見えたりける。光氏一人は阿古木の思と、確に知りてはありながら、夢に浮れて通ふと言ひし、かの魂の此所にやあらんと、物語るのも怖しく、今又護摩の法力にて、命を絶たば執念の、いよ〳〵まさりて忽ちに、二葉を冥途へ誘ひやせんと、心の中には思へども、止むるにも止め難く、紫野の野の宮へ、阿古木を早く移し遣り、空衣を附置きて、磯菜を厚く勞りなば、彼が心の解けもやせんと、喜代之助を密に招き、

其事を打囁き、野中の里へ空衣を、遣して見せ給ふに、阿古木は重き病にあらねど、そこはかとなく煩ひて、只しどもなく怪しき事を、一人つぶやきほけ〳〵と、心浮れて定まらず、打悩みてある由を、仁木より告越しければ、光氏もせん術なく、思はず月日を過しけり。

二葉の上の御産には、まだ程もあらんとて、御物怪の事をのみ、館の者は打案じ、油断してありけるが、俄にその氣色ありて、打悩み給ひければ、政則夫婦はいふも更なり、人々もあわて惑ひ、かの御祈禱の法師ばらは、今こそ殊に御大事と、護摩壇に上るもあり、經巻を披くもあり、おの〳〵法のあらん限り、丹精を盡しに盡して、責懸け〳〵祈りけれど、例の執念き物怪ひとつ、更に動く氣色なきは、世に珍らしき靈なるかなと、名高き驗者も持悩みぬ。されど斯くまで調ぜられ、少しは御身を退きしか、今まで心苦し氣に、打臥し居たる二葉の上、面を上げて目を開き、「あら姦しの般若聲、光氏君に申したき事の數々侍るなり。久しく悩みて聲も嗄れ、騒がしうては言ふ事も、御聞取れ遊ばすまい、暫し祈禱を止めさせて」ト宣へば政則小毬、打心得て立廻らす、屏風の内へ光氏を、頓て誘ひ参らすれば、二葉の上ははら〳〵と、落つる涙を掻拭ひ、さも懐し氣におん顔を、見遣りながらに物をも言はず、息も絶ゆ氣に俯伏し倒れ、今を限りの有様を、見るに目も暮れ心も消え、流石の政則氣も亂れ、さてこそ二葉は覺悟して、わが亡き跡の事どもを、聞え置くにやあらんずらめ。親には包む事をさへ、語りかはすは夫婦の情、此所に在りては氣も置かれんと、心に思ひて小毬に、目配しつゝ諸共に、次の間に立出づれば、祈禱の法師も皆退き、聲を鎭めて法華經を、讀み居る様はなほ尊し。光氏は近く寄り、「邊に憚る人もなし、何事にもあれ宣へ」ト、言ひつゝつく〴〵打見るに、いと長くふさやかなる、髪をひとつに束ねて引結ひ、白き單衣に白き帶、姿にひかれて夫さへも、色ある衣より華やかにて、腹はいと高う脹み、打悩みて臥したる様、ゆかりなき人だにも、此體を打見なば、あはれと思ひて心も亂れん、ましてや若き時よりして、親の結びし妹脊中、悲しさ喩へん方もなく、心地惑ひて蹲居たる、光氏の袖をとらへ、「あな苦し。心憂き目を見せ給ふ、怨めしさよ」トばかりにて、物もえ言はず泣き給ふ。常には行儀正しくし、恥かし氣にもてなして、我袖を引寄する、事なんどは爲ざりしが、あら訝しと光氏は、心に思ひて摺寄る顔、いとたよ〳〵と打見上げ、涙はら〳〵飜るゝ様を、見るにいよ〳〵胸塞り、あまりに痛く泣きければ、所詮亡き身と覺悟して、跡へ殘れる親達の、歎を思ひ且は又、我に名殘を惜むかと、思へば胸も張裂くる、涙呑込み光氏が、「何事にもせよ深く案じ、氣を痛むるは病の障、御身はさまでの煩ならず、頓て本復し給はん。假令いかなる事ありとも、必ず心に懸け給ふな、あ

の世に長く添逢けん。親となり子となるは、殊更深き契ぞや、これぎり對面なきにはあらず、廻り〳〵て逢見る事も、ありなんものと心安く、思ひなし給へや」ト言慰むれば顔打振り、「いよ〳〵妾は死にはせじ、今はや息も絶々の、有様にもてなして、君を此所へ招きしは、あまりに強く祈られて、いと苦しきを暫時が程、休めんとての詐事。これ見給へ」トつと立つて、更に疲れし體もなく、髪をあつめ姿を繕ひ、轉びし脇息引起し、肱付もたせてにつこと笑ひ、「この所まで夜毎日毎、來らん心は無けれども、起きても寐ても物思ふ、誠に人の魂は、あくがれ出づる物になん」ト、さも懐し氣に言ひながら、邊見廻し息を吐き、

歎きわび空に亂るゝ我魂を結びとゞめよしたがひのつま

と、吟ずる聲なら姿なら、二葉の上とは思はれず、變りし樣のいと怪しと、能く〳〵思ひ廻らせば、只かの阿古木に紛れなし。あら淺ましや先つ頃、彼が我に言ひたるは、此所に仕ふる女の中に、阿古木が親しき者ありて、樣子を尋ね印とすべき、簪を奪はせて、さもあり氣に某を、驚かするにやあらんかと、一度は疑ひしが、今眼前にあり〳〵と、かゝる不思議を見るものかな、あな疎ましと思ひながら、猶もそしらぬ風情にて、「さ言ふは二葉に附添ひし、物怪と覺えたり、抑御身は誰なるぞ、確に言ひて聞かせよ」ト問はれて片頬に笑を含み、「名乘るも流石面伏、これ見給へ」ト懐より、取出したる錦の袋、光氏手に取り押開けば、阿古木が肌身を離さゞる、かの勅筆の短冊なり。さてはといよ〳〵怖け立ち、見れば妾も蓮葉にて、膝も崩れ衣紋も亂れ、屛風へ背中を打持たせ、背引上げ此方を見遣り、「此内君の御惱は、受けて生れし天の命數、弱目に乘りては來れども、我が苦しめるばかりにあらず。夫に驗者を呼集め、妾が命を絶たんとは、道にあらねば驗はなし、疾く〳〵思ひ止り給へ。まだ末久しき壽を、己が怨に縮めなば、祈らせ給ふまでもなく、天の咎地の罰にて、此身も安穩なるべきや。妾が命のあるをもて、妾が業にあらざる事は、知召し給へや」ト怒の面色あらはれて、いと高らかに言ひければ、只淺ましとは世の常なり、人や近う來らんかと、光氏心も心ならず。かの祈禱の僧どもは、此騷がしさを洩聞きけん、また同音に讀經しつ、護摩の壇には鈴の響。「あな姦しや」ト兩手にて、耳を塞いで、二葉の上、夜著にもたれて俯伏し倒れ、少し聲もしづまれば、物怪の退きたるやと、小毬手づから藥を持寄り、かき起して介抱すれば、いよ〳〵その氣著るく、程なく安々産み給ひぬ。嬉しと覺す事限りなく、總て館は搖るばかり、皆々喜びざゞめきけり。されども久しく打惱み、病に疲れし上なれば、後座の事心元なく、政則夫婦はあるとあらゆる、神に佛に願を懸け、光氏は玉兎の鏡に、かの勅筆の短冊を、取添へて臺に据置き、心に

祈念なしけるが、それかれの加護にやよりけん、後の物も平かに、事なり果てて思ひしより、悩ましき氣色もなく、生れし御子は殊更に、健かに見えければ、丹精凝し祈りたる、驗者は護摩の壇を下り、經巻を巻納め、したり顔に汗押拭ひ、急ぎ其所を退きつ。今まで心を盡したる、多くの人も安堵なし、二葉の上の御心地は、是より爽ぎ侍らんと、打擧りてぞ壽きける。兎角なす間に日は暮れぬ、五つの時計の響く頃、腰元使のひとりの女、光氏の前に手を突き、「只今糺の御館より、名を早百合とかいふ女中、若君樣へ直々に、申上げたき事ありとて、あれに控へて居ります」ト聞いて、小首を打傾け、「何用有りて來りしか、心得難き事にぞある。此方へ呼べ」ト靜なる、一間へ招き見給へば、早百合にあらぬ空衣なり。思ひがけずと言はんとせしが、深き樣子のある事ならんと、思返して打笑ひ、「稲舟よりの使なるか、近う〳〵」ト傍の、女どもを遠ざくれば、空衣はしとやかに、「先以まして内君には、安々と御喜び、御血心もあらせられず、男御子にて在すれば、殊更の御滿悦」ト言ふにいよ〳〵不審晴れず、「二葉が安産せし事だに、御身の知らん筈はなし、殊に男子といふ事は、何者か告げたりけん」ト宣へば聲を潛め、「阿古木を何卒言宥め、少しも早く野の宮の、下屋敷へ連行かんと、今日もまた野中の里の、別莊へ音づれしが、阿古木は窓に打凭れ、前後も知らで臥してあり、暫くあつて目を覺し、私に申す樣、今赤松の館にて、二葉の上の御産あり、しかも男の御子なりと、人々の喜び騒ぎ、儀式作法のいかめしく、賑しきその樣子、豫てはいとも危しと、言聞えしを平かにと、思へば心も只ならず、覺れば此所に在りながら、眠れば彼所へ往通ひ、我にもあらぬわが心地を、つく〴〵思ひ續くるに、これ見給へや此樣に、寐巻は護摩の煙に色付き、けしの匂の身に染みて、怪しき事のみ多ければ、髮を洗ひ寐巻を著換へ、試み侍れどまどろめば、猶幾度もその如し。我身ながらも疎ましきを、ましてや人の口の端に、掛らん事の恥かしやと、人には言はでくよ〳〵と、心ひとつに打歎けば、現か夢か定めかね、いとゞ亂れし妾が心、思遣りて給はれと、言掛けて打驚き、今若君との問はず語、名乘り出でんも恥かしさ、勅筆の短冊を、御目に掛けしが其中に、祈禱の僧ども姦しく、讀經なしゝに驚かれ、そのまゝ歸りし口惜さよ、年もふけて色香なき、此身を折々光氏君、是まで訪はせ給ひしは、眞を見せてかの短冊、取戻さんとのお心とは、知つて居ながら浮々と、夫を渡し參らせては、いよ〳〵逢瀬は絶果てんと、猶狂はしき樣なるを、私が押鎭め、憚りながらお心の、夫は僻に侍らん、あなた大事と思へばこそ、磯菜樣の事までも、くれ〴〵との御頼、まづ御言葉に隨はれ、喜代之助の下屋敷、かの野の宮と押竝び、紫野の中なれば、寂しき所に侍れど、世を忍ぶには人目も

なし、まづ是へ移られてと、言慰めしにやう〳〵と、阿古木の心打解けて、九月にならば磯菜を連れ、參らう程にあの子の事、よしなに賴むと言ひながら、膝の邊の團扇を取り、我魂の浮れ出で、いつとても赤松の、館へ行く其時は、此團扇を手に持ちて、此身に懸る護摩の煙を、打拂ひなどしたりしが、けしを焚くその薫の、是へも止りて燻りたり、あまりに苦しめ給ふなと、君の御目にかくる樣、言づかりては歸りたれど、妾が伊豫より歸りしは、人に知らさぬ事なれば、仁木の妻とは名乘り難く、此頃途にて昔の腰元、夏野に逢ひしが今程は、稻舟樣に仕へ參らせ、早百合といふ由聞置きしを、思出して赤松の、此お館には妾の顏、知る者なきをさいはひに、糺よりのお使と、似つこらし氣な詐事。これ御覽遊ばせ」ト、阿古木が手馴れしかの團扇を、取出せば光氏は、燈火を近付け能く視るに、實に空衣が言ひしに違はず、驗者が彼を調ぜんとて、焚いたるけしの香染透り、ところ〴〵焦げたるに、

　袖濡るゝとは知りながら早苗かな

と、書きたる手蹟の美しさは、多くの人に勝れたれど、黃昏が投節の、をかしかりしに引換へて、此團扇は手に觸るゝもうたてく、彼所へ打捨て吐息をつき、「是より阿古木を訪はざる時は、かの勅筆の短冊を、渡しゝ故と却つて恨み、二葉の爲にも惡しからん、とあつて最前我を引付け、空に亂るゝ我魂を、結び止めよと打怨みし、其顏ばせはまだ目にありて、對面せんも怖しし。御身明けなば阿古木の許へ、わが文を持行きて、猶も心を宥めてくれ」ト頓て料紙硯を取寄せ、二葉の產後の惱み烈しく、例の赤松夫婦の者、傍を離れねば、我もさすがに振捨てて、立出で難き事なんど、細々と書いたる末に、

　我は戀路に身もそぼつを
袖濡るゝそれはあざみの早苗かな

卷收めて渡し給へば、空衣は心得つ、隱家へこそ歸りけれ。
二葉の上は衰へし、姿を恥ぢて光氏に、夫より對面し給はず。頃しも秋の半にて、若君生れ給ひしは、霧深く立籠めたる、夕暮にてありければ、夕霧丸とぞ名附けける。御顏ばせの美しさ、光氏君の御誕生の、其折につゆ違はず。我ほど好き婿を取り、我ほど好き孫を舉けし、武士は都にあらじとて、政則の喜びは、更に喩へん樣もなし。されども未だ二葉の上、全快なしといふにもあらねば、是のみ心に掛りけれど、いと甚う惱みたる、その疲にあるべき間、頓て爽ぎ給ふべしと、さのみは深く案じわびず、產の穢に憚るべき　日數も早く過ぎにしかば、光氏は今日初めて、室町へ赴かんと、中垣を近く呼び、しか〴〵の由を語り、「二葉に對面爲させよ」ト、

宣へば打心得、直に産屋へ誘ひ參らせ、二葉の上に打對ひ、「御顏ばせの窶れしを、恥かしと思召す、夫はあまりに若々し、御子までお舉けなされし御中、さア御逢ひ遊ばせ」ト、中垣が屏風を開け、光氏を押入るれば、此程絶えし物語、いろ〳〵聞え給ふにぞ、二葉の上も時々に、打答へなどする聲の、いと弱氣には聞ゆれど、はや亡人と見えたる姿を、思へば夢の心地して、「去頃御身が某に、言ふ事ありと此所へ招き、言葉もなくて打臥したる、其時はつと胸塞り、心亂れて後の世の、契の事さへ聞えしが、今更思へばいみ〳〵し」ト宣ひながらかの息も、絶々にありけるが、引返して脇息引寄せ、につこり打笑み惡さげに、物言懸けし事どもを、思ひ出して心憂く、「まだ物語はさま〴〵あれど、何をいうても久しき惱、疲に殘りてたゆげなれば、夫は重ねてゆる〳〵聞えん。藥の絶間なき樣に、怠らずまゐられよ」ト、心をつけて勞りつ、立出でんとしたりしが、振返つてつく〴〵見るに、人に勝りて嬋妍なる、姿の甚う弱り果て、有るか無きかの氣色にて、打臥し給へる其樣の、何とやらん苦し氣にて、亂れたる筋もなく、髮はら〳〵と枕の上に、飜れかゝるも淸らかなれば、何に足らざる事ありて、年頃さまで睦ましく、語はざりし我心の、怪しきまでに打まもられ、「東山の御機嫌を、伺ひて疾く歸らん。斯樣に朝夕御身の側に、附添ひ居らば我心の、安からんとは思へども、小毬は只幼き、子の如く其方を思ひ、此所を片時離れねば、心無しとや思はんかと、其前を憚りて、隔てて住むはいと苦し。はや安らかに子は生みぬ、心強く思ひなし、本復ありて褥を竝べ、常の居間に住まふ樣、早くなりて給はれ」ト、懇に聞え置き、いと淸げに衣服を整へ、立出て給ふを二葉の上、常よりも目をとゞめ、見送りて臥し給へり。其日左衞門政則も、引續きて室町の、御所へ出仕したりしが、九月にならば九日に、菊合や催さん、十三日にはそれ〴〵にて、月見の遊やなさんなど、とり〴〵の評議にて、政則も歸り難く、光氏ととも〴〵に、その夜は御所にぞ止りける。

赤松の館には、人少にてしめやかなる、夜半ばかりの事なりけん、二葉の上は顏色變り、俄に例の胸を堰上げ、いと甚う苦しむにぞ、室町へ人を馳する、其程もなく絶入り給ひぬ。足を空に誰々も、駈戻りしが事敗れし、その後なれは途方を失ひ、素より祈禱の僧どもを、請ずべき暇もなく、只館の内の者、騷ぎあわてて柱に當り、疊に躓き駈廻り、ところ〴〵の御見舞と、使者は大勢立籠めども、誰取次ぐ者もあらず。その詮もなき魂招ひ、女の泣く聲みち〳〵て、怖しきまでに見ゆ。不具なる子をさへも、親は惡しと思はぬが、すべて浮世の慣なり、まして斯くまで顏形、打揃ひたる子を先立て、小毬更に正體なく、袖の上にて愛でたりし、玉の櫛笥

の夫よりも、猶淺まし氣に泣まどひ、姉もなく、妹もなく、娘は一人なるをすら、年頃淋しく思ひしが、是よりいかに爲すべきと、沈み入りて起きも上がらず。政則も日に增して、二葉の上の惱も薄く、なり行き給ふを見るからに、斯くては本腹遠からじと、心に賴みし上なれば、殊更にあわてながら、老少不定は是非なしと、小毬を叱り勵し、香を盛り華を手向け、定まる佛事の用意なんど、せさせんとしたりしが、小毬初め女ども、只管に押止め、「是まで度々物怪の、業にて息も絶々に、見えさせ給ひし事もあり、夫だにも退かば、蘇生り給はんか」ト、人のいふに隨ひて、いかめしき祈禱ども、殘る事なく仕盡して、枕なども二三日は、其儘に爲し置きけるが、次第々々に面影の、變り行き給ひければ、今は更にせん方なく、鳥邊野にぞ送りける。我子ながらも主人の內君、政則も御供しつ、此方彼方の御送り、寺々よりは念佛の、僧ども多く集りて、廣き野に所なし、夜もすがら嚴しき儀式に罵り騷げども、果敢なき屍となりたる人を、思へばいとゞ光氏は、夢の如くに立歸る、曉深き道の邊の、草葉の露は先立ちて、もとの雫の後るゝも、終には消ゆる習なり、歎くまじとは觀ずれど、かの黃昏一人の外、かゝる事を見給はねば、類も無げに思ひ焦れ、駕籠にも乘らず行艱み、茫然として立止る。其日は八月廿餘日、打曇りたる有明の、空の景色も哀れさまさり、口に言はねど政則が、子故の闇に暮惑ふ、その有樣を道理ぞと、見るにいよ〳〵胸塞り、そゞろに空を打眺め、

　昇りぬる煙か曇る月の影

と呟きながら赤松の、館にやう〳〵歸り著き、枕は取れど眠られず。近頃心も解懸り、猶行末は睦ましく、語はんと思ひしが、夫も詮なくなりしかと、數珠取出して手を合せ、「法界三昧普賢大士」ト、經文を靜やかに、打誦して居給ふ樣、行ひ馴れたる法師より、猶尊くぞ見えたりける。夫よりも光氏は、此所に泊りて嵯峨へも歸らず、心深く思ひ焦れ、まめやかに跡を弔ひ、夕霧丸を見給ひて、かゝる絆のなかりせば、髮を切り衣を染め　菩提の道に入らばやと、打歎きつゝふと小玉の、言ひたる事を思ひ出で、嘸此頃は紫が、淋しくやあらんかと、思ひ亂るゝ折もあり。夜は屛風を立廻らし、只一人打臥しつ、宿直の人はその邊に、近々とありながら、何とやらん傍淋しく、佛間には念佛の聲、曉方は殊更に、秋の哀れも增り行く、風の音のみ身に染みて、寐覺勝に明しかね、西の窓の障子を開き、高欄に押懸り、霧深く立渡る、朝ぼらけの空の氣色を、打眺めて在するに、風荒らかに吹來り、村雨驟に降出でて、はら〳〵と袖に懸れば、「雨とやなりけん雲とやなりけん、今は知らじ」ト ひとりごち、面杖突きて居給ふ樣、見捨てて過ぎし女の魂、必ず止りなんかしと、打まもられて高直は、御前ににじり寄り、「誰と

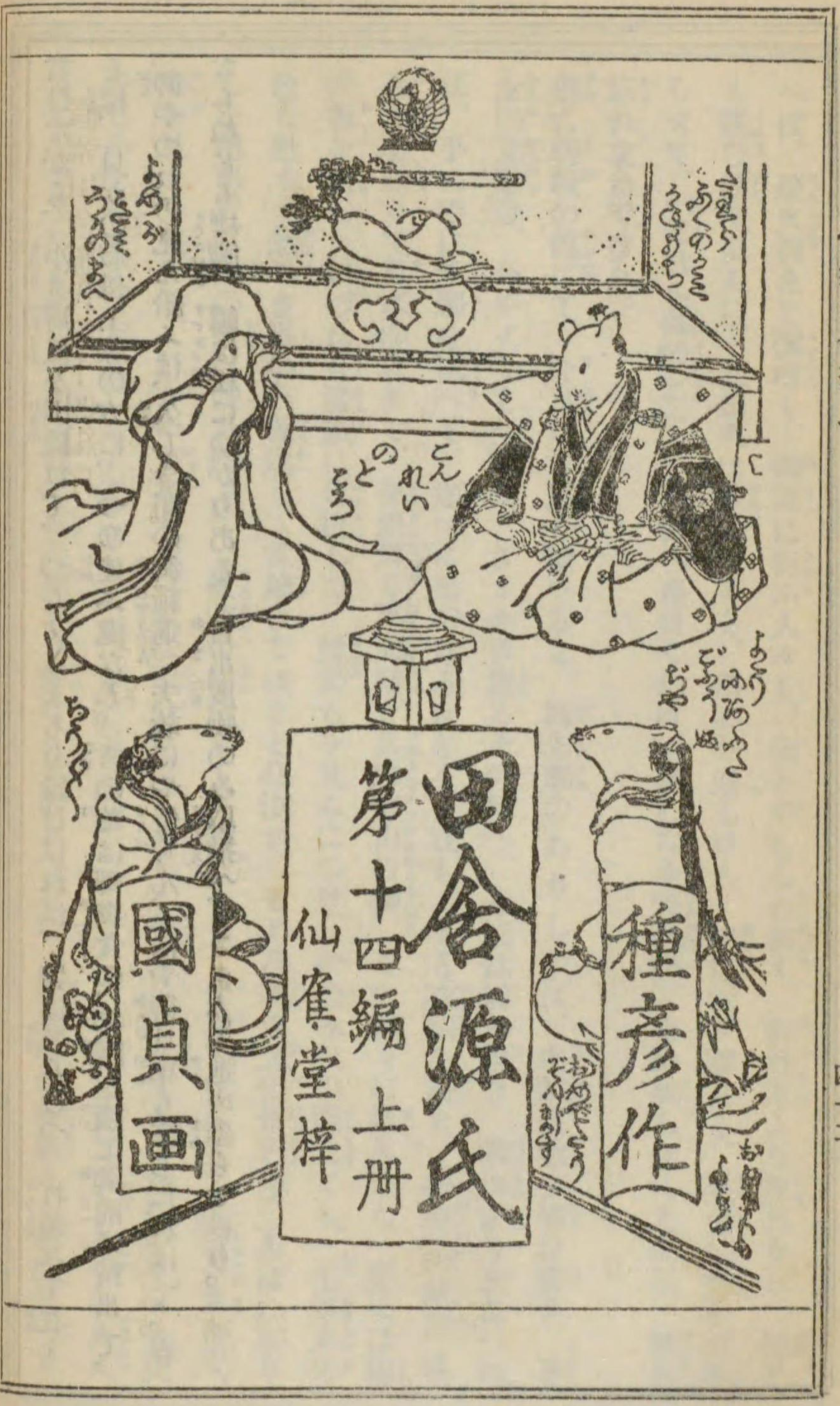
も名をば名乘らずして、只今是を持參り、其使は直樣に、立歸りて候」ト、差置くを見給へば、今や開かんとする菊の枝に、短冊を結付けたり。

　聞くもあはれ後るゝ人の袖の露

と、いと優に書なしゝは、疑ひもなき阿古木の筆なり。二葉の上は定まりし、命數なりとは言ひしかど、まざ〳〵と其靈の、移りしを見たりしかば、あなつれなのとぶらひや　心憂しとて傍に差置き、かの勅筆の短冊の、故を知らねば若々しき、振舞なりと人も言ひ、終に浮名を流さんかと、思ひ亂るゝ顏色を、見上げて苦しく高直が、常の如くにをかしき事、眞實なる事取交ぜて、物語に打紛らし、さま〴〵慰め聞ゆれども、兎に角に果々は、哀れに果敢なき世語に、移りては吐息をつき、「此頃風をやひきたりけん、頭痛く候」ト言紛らして立行きけり。兎角なす間に秋もたち、冬の初になりにけり。ある夕暮の事なりしが、光氏の言ひけるは、「わが忌は疾くに果てぬ。されども立日まではとて、この館に留りつ。夫を過ぎても七日々々の佛事の事に取紛れ、思はず日數を重ねたれば、父君兄上方々も、心元なく思されん。今宵は一まづ嵯峨へ歸り、衣服を改め明日は、室町へ出仕せん」ト、暇を乞はせ給ふにぞ、小毬は此頃の、風に誘ふ木の葉より、脆き涙に咽びつゝ、又悲しさの改まり、例の如くに沈み入り、御前に出でやらず、政則ひとり立廻り、「さあらば君のおいでの中に」ト、女どもを呼集め、二葉の上の衣服調度、形見に分與へければ、光氏は其心を察し、そゞろ悲しく其邊を見るに、當吉は親も無く、幼き時より仕へ馴れ、一入不便を受けたればと、髮を切りていと小く、締束ねしもあはれに見え、其外とても一樣の、島田に結びしばかりにて、櫛笄の飾もなく、皆一列の白小袖、人多き程猶淋しく、ありしに變る有樣を、打まもりて目をしばたゝき、「二葉の上は世を逝りぬ。是より幼なき人を見捨てず、心長く守立てて、くれるが二葉へ追善ぞ」ト、不圖燈火を眺れば、物淋しとて御身等まで、ちり〴〵に暇を乞ひ、別れ行きなば政則夫婦、我も力の無くならん。是より幼なき人を見捨てず、心長く守立てて、くれるが二葉へ追善ぞ」ト、不圖燈火を眺れば、目のうち濡れて見え給ふに、實の心顯れて、ありあふ人々皆打泣き、腰元どもは言葉を揃へ、「たとへ御暇賜るとも、此御館を退かん、心は更に侍らず。只是よりはあなた樣の、御出の間遠にならんかと、夫が悲しう侍る」ト、言はれて光氏打點き、「いよ〳〵絶えず訪はん、その印には夕霧丸、此所の夫婦に預け置く」ト言ひつゝ顧み給ひければ、障子は殘らず開通り、二葉の上の住馴れし、座敷までも能く見えつ、屏風脇息褥まで、むかしの儘にありながら、其人のみは空蟬の、空しき心地し給ひて、立煩ひて在せしが、氣を取直して立出でつ、駕籠に乘らんと爲す時しも、折知り顏なる村時雨、さら〳〵と打濺ぎ、木の葉を誘ふ風の音、あわたゞしく吹拂

へば、燈火消えて薄暗く、御前に侍ふ人々も、何とやらん心細く、野邊送より隙ありし、袖ども濡ひ渡りぬるに、光氏君は取分けてと、御心を察しけん、中垣が夕霧丸を、乳母に抱かせ參らせて、「父君へ御暇乞」ト、御側へ差付くれば、何心なき笑顔の、その美しきに光氏は、歎を忘れ立出でけり。

既に嵯峨の館にて、今日なん歸り給へると、御先觸のありしかば、書院座敷を拂ひ磨き、男女の立集ひ、今や〳〵と待聞え、ざゞめき渡るその所へ、光氏は歸り著き、乘物より立出づれば、手に手に手燭を携へて、迎へに出でたる女ども、我も〳〵と衣裝を飾り、櫛笄の玳瑁は、火影の映りて目ばゆきまで、金銀輝く平元結、兵庫勝山折柳、その程々に結あげし、髮には梅が香を散し、いづれも清氣に化粧しつ、竝居るを見るにつけ、かの赤松の腰元ども、毛卷束の色も無く、悲しき事のみ繰返し、言續けてはさと打泣き、そゞろ寒き夕の景色の、あはれなりしを思出で、西の亭へ渡り給ふに、更衣の晴にとて、皆新らしく仕立てけん、若き腰元童まで、姿を見よく整へて、鮮かに出立ちつ。紫は取分けて、美しう引繕ひ、在するを見給ひて、光氏少し心を慰め、「思ひもかけぬ事どもにて、久しう逢はざる其中に、思ひなしか丈も高く、大人らしうなりたるぞ。小袖の色は言の葉が、好にこそありつらめ、縫模樣の風流さ、心憎し」ト言ひながら、小き屛風を引除けて、つら〳〵まもり給ひければ、紫は恥らひつゝ、打萎みて在する樣、只かの叔母上﨟の方に、つゆ違ふ處なし。言の葉は御夜食の、御膳を頓て御前に持出で、「御やつれの見え給ふは、久しき間の御精進、夫故にや侍らん、はや御日柄も立ちたれば」ト、春ならねども櫻鯛、鱸は松にゆかりある、目出度物のみ取揃へ、さま〴〵進め參らせけり。



修紫田舍源氏第十四編序

十月の牡丹餅何に、板疊、意は、亥に喰ひ子に喰ひ、とは昔々の謎語なり。さて此編は彼子の子の餅、三箇の大事の一ッにて、楊名之介、宿直袋、赤本作者の知る事ならねど、略きては筋が解らず。かの謎から案じつき、亥の子の翌の子のこと晒落、宿直袋は深川の、名札のつきし麻風呂敷、さて吉原の仕舞札、身あがりしても誰樣と、當無き客の名を書くこそ、楊名之介ならめと、たしかにもうけ給はらで、物なれのさまには作れど、當れる說は三ッに一ッもなくて四冊に綴りしが、かう數々にところせきさまして既に十四編。予が面なきは露知らぬ、板元はあいぎやうの、初のこゝろに日擇して、賣出すも最をこがまし。

天保乙未春　　柳亭種彦

阿古木
あこぎ

空衣

十四編上

その次の日光氏は、室町へ出仕なし、東山へ赴きつ、父兄の機嫌を伺ひ又嵯峨に引籠り絶えて人にも對面せず。されば是まで忍び〳〵に、通ひ給ひし所より、恨めし氣に書續けし、文にて度々驚かし、聞ゆるも多かりけり。その中にはいとをしと、思し給ふも無きにはあらねど、あはれに果敢なき事を見て、心を痛めし故ならん、いと懶くて惱ましく、日數過ぎなば歎も忘れん、其後行きて見ゆべしと、いづれへも答へつゝ、過し給へば言の葉は、二葉の上の世を早く、去頃過行き給ひしを、悲しき事には思ふものから、是より後は紫を、内君よとて人の、册くならんと頼もしく、小辨にも言含め、ありしよりなほ紫へ、重々しげに仕へつゝ、「御鐵漿を含み給ひ、御髪の島田をも、丸髷にあげ直さば、猶愛らしく見え給はん。いつか吉日に侍らん」ト、氣色ばみたる事なんど、折々聞えて試みつ、鼠の嫁入の繪草紙を、御前に取寄せて、「三々九度の式作法、程なく此所は御腹帶、御座も輕く若樣を、擧けて末は宮參り、あなたも目出度〳〵に、早うおなり遊ばせ」ト、勸められても紫は、婚禮の事などは、見も知り給はぬ氣色にて、只光氏を親の如く、兄の如くに親しみ寄り、碁打偏つき貝覆ひ、元より果敢なき戲れ事の、その中にも卑しき事なく、續ぐ切る延るの法を守り、偏つきの字を見るに目早く、出し貝取り貝打亂さず、夫も是も美しき、筋を仕出で給ひければ、光氏も只初めの程は、あどなき事を愛でたりしに、今はなか〳〵似合しからぬ、年の程いふにもあらねば、枯れし二葉に一本を、植代へて眺めんの、心面に顯れけるを、言の葉は早くも見て取り、嬉しき中にも紫が、只遊にのみ日を暮し、夜は他愛なく宵より眠り、物淋しとて光氏の、例の忍びて出で給ひ、二葉の上に立代る、人の又もや出來んかと、更に心の安からず、夜は御足などまゐりながら、浮世語に笑を催し、兎角して光氏を、館に暫時留置きけり。

かくて或日、光氏は早く起出で、跡に紫打臥して、更に音せぬ朝あり。言の葉小辨其外の、腰元どもも心得ぬ、事に思ひて打囁き、もし御心地や常ならぬと、案じつゝも紫の、閨を密に窺へど、させる樣子も更に見えず。光氏は何やらん、筆早く書いたる文を、硯の箱の内に入れ、かの紫が起出でぬ、屏風の内へ差入れて、常の住居へ立歸りつ。兎角なす間に冬の日の、はや晝頃となりしかば、言の葉はそろ〳〵と、枕の邊へ差寄りて、紫を差覗き、「お目は疾から覺めて居て、御氣合の惡いといふ、御顏持にも見えぬのに、なぜおひるなりなされませぬ。光氏様

が御氣に障る、事でも何ぞおつしやつてか。さうならさうと其譯を、お話しなさると私が、あなたのかはりに光氏樣を、屹度叱つて上げます」ト　寄れば寄る程衣引被き、打臥し給ふ手を取りて、「是は又怪しからぬ、何した事かと皆の者が、怪しんで居ります」ト夜著引除けて抱起せば、身うちは汗に押浸し、額髪も甚う濡れたり。言の葉猶も打微笑み「御巨燵の今日は開初、目出度日ぢやにいみ〳〵しい、おむづかりでもなさつた樣な。お手水を召しまして、御膳が濟んだらお好な碁で、小辨を又いつもの樣に、負してお遣り遊ばしませ。其中お髮はあげませう」ト、さま〴〵こしらへ聞ゆれど、紫は只うつとりと、心に染まぬ中ならねど、親とも兄とも此年月、頼みしものを今更に、改まりたる心地して、人は知らじと思へども、顔見らるゝも恥かしく　憂くも辛くも種々に、思ひ亂れし秋萩の、露の答もし給はねば、言の葉わざと角角しく、「曲るとやら拗るとやら、其樣に御氣むづかしい、所を御覽なされたら、光氏樣がチヽよし〳〵、夫ならもう逢ふまいとて、此所へは御出なさるまい。御機嫌お直し遊ばせ」ト、多くの女打集り、其日はひと日　紫を、とり〴〵に慰めつ。日くれて後に光氏も、又此方へ渡り來て、まだ解け難く打側む、紫が體を悟り、常より親しく言葉を懸け、硯の箱を開き見るに、返しと思しき物は無し。されども書いて入置きたる、發句は披きて見たりけん、結びし文は解きてあり。

まだ若々しき振舞やと、思ふも更に憎からず、打まもり居る其折から、亥の子の餅を美しき、割籠に盛りて恭しく、小辨が捧げ出でたりけり。光氏夫と差圖して、紫の前に据ゑさせ、「今日は十月亥の日にて、定まれる儀式ながら、二葉に別れて某は、まだ服の内といひ、且赤松への聞えもあれば、其事は無くて止みぬ。夫は只御身ばかりの、祝に設けさせたるなれば、きこしめして女どもへ、分ちて取らせ給ふべし」ト、言ひつゝ南の縁に立出で、「惟吉々々」ト呼び給へば、はつと答へて立出づるを、膝元へ近く招き、「汝手づから餅を造り、明日の夜密に持て參れ、今宵の如く數々を、盛るには及ばぬ心得て、人に知らする事なかれ。今日は一日まだ早い」ト、打微笑みて宣ふ御氣色、惟吉は心とく、推したりけん手をつかへ、「まだ御服の内なれば、表立ちての御祝儀ならず、密に持ての仰の趣、委細承知仕る。今日は亥の子明日は子の子、御婚禮の三日目には、ゆきあひの餅を送るが、今の世の習慣なれば、古き禮にもある事ならん。さては内々日を選み、ゆかりの君とねの子の餅の、數は何程奉らん」ト、まめだち申せば光氏點き、「三ツか一ツかにてもあらん」ト聞いて惟吉小首を傾け、「三ツか一ツ」三分一の事にもあるまじ、チヽそれ〳〵、片田舍の者なんどが、七日と云ふ事を忌みて、六日一日といふに等しく、三ツと五ツの其間の、數を忌みて三ツに一ツ、添へて持てよと宣ふならんと、

心得果てて立出でぬ。光氏は跡を見遣り、「此頃までも辨へなき、童にてありけるが、いつの程にか浮世に交り、物馴れたる言ひざまや」ト、ひとり言してまた元の、座敷へ戻れば紫は、つと脇へ立退きつ、昨日に變りてむれもつれ、親しみ寄らねば光氏も、機嫌を取兼ねこしらへわび、初めて盜み來りし時の、心地するのもいとをかしく、此所に泊りて次の日も、東の住居へ立歸らず。其夜甚う更けて後、惟吉は宣ひし、餅を造りて夫となく、古き禮を人に問ひ、銀箔押したる土器に、盛りて携へ來りしが、杉折割籠は俄ゆゑ、調ひ難くて其邊を見れば、御厨子に香合の箱のあり。手を懸けんは憚あり、さはさりながら羞しとて、若し言の葉には今宵の事を、包み給へる事もやと、妹の小辨を喚出でて、「御厨子の棚に重ねたる、その箱取りて給はれ」ト、件の餅を内に納め、「是は密に御枕元へ、參らすべき祝の物、人には沙汰し給ふな」ト言へども小辨はまだ若く かゝる儀式も知らざれば、怪し氣に差覗き、「小な餅が四ッ五ッ、是がなぜ又夫程に、大事な物で御座ります。此御華足はぐら〳〵して、覆りさうな」ト立つのを押止め、「これ、かへるとは忌言葉、横に寐るとか御華足が、おしづまるとか言ふが好い」ト教へてもまだ氣のつかぬ、小辨は靜に御寢間の屏風、押開けて件の餅を、差入れたるを知る人なく、夜明けて後に言の葉は、はや御目覺の體なれば、まづ御機嫌を伺はんと、御枕近く摺寄る

に、誰がいつの間に爲出でけん、白銀の皿の中に、小き餅を盛りたるを、屏風の外へ押遣りて、華足の上に載せてあり。つく〳〵と打まもり、下樣の婚禮にも、三ッ日には里づかひ、餅を送るは世の習慣。一昨日昨日紫樣に、羞かし氣の添ひたるも、是にぞ思合さるゝ。かくと傳聞き給はゞ、遊佐の殿の御安心、わけては冥土に在します、小玉樣のお喜び、にこ〳〵お笑ひ遊ばす御顏が、見える樣なと吐息をつき、嬉しきにもまづ打泣かれぬ。後の心にくらぶれば、昔あはれと思ひたる、夫は數にもあらざりけり。光氏は斯くて後、室町の宿直だに、さぞ紫の待わびんと、思へば心も靜ならず、一夜隔つもわびしきは、宿世よりして定まりし、緣にやあらんと我ながら、あやしの心と思ふまで、離れがたなきのみならず、富徽の前は桂樹が、佛門に入つたるも、光氏が唆し、其事遂げざる故なりと、思ひ違へて日頃に倍し、憎しと思ひ聞え給ふ、その由を水原より、密に告越したりければ、忍び歩きもつゝましう、只懶しとて引籠りつ、今は憚る事にもあらねば、遊佐國助の娘なりと、世に知らせて紫に、鐵漿を含ませ披露せんと、その用意など爲給へど、紫は有難き、事ともさまで思ひとらず、父とも兄とも打賴み、戲れ遊びし頃よりは、心置かるゝ風情にて、顏もさやかに見合せず、打側み居る有樣を、實に若々しき心やと、をかしうもいとほしうも、思ひながらに心長く 言慰

めて解けかゝる、霜降月のすゑつかた、仁木君吉御目見を、願ふ由を取次の、腰元が申すにぞ、それ此方へと召寄せ給ひ、「川次郎は止りて、當地に居れども其方は、喜代之助と諸共に、先年伊豫へ下りし故、打絶えて對面せず、文を結びし村荻の、使に遣りし儘にてあり、前髪取りて男形、見違へる程成人せし。定めて姉と諸共に、上りてならん」ト宣へば、君吉は額を摺付け、「何か仔細は存ぜねど、仰に依りて喜代之助、伊勢路へ赴き候間、伊豫の住居を取片付け、殘り無く爲終りて、後より上り候樣、申すに任せ某は、當月なかばにやう〳〵到著、夫故御機嫌伺ひも、遲なはり候なり。是はあら〳〵しき絹ながら、本國の名產とて、「姉空衣より奉り候なり」ト卷絹を、臺に載せて恭しく、御前に差置けば、光氏は親しげに、過來し方の物語、酒賜りて君吉を、歸しゝ後にかの絹を、打開き給ひければ、御直覽と記したる、文を卷籠め置いたりけり。取上げて見給ふに、阿古木が心やう〳〵解け、磯菜もろとも野の宮へ、迎取り侍るに、空衣の手蹟にて、事短く書きてあり。光氏大きに安堵なし、是よりしては物語る、事も無くて年も返りぬ。元旦には例の如く、室町へ出仕なし、東山へ參り給ひて、戻り道には赤松の、館へ立寄り給ひければ、政則急ぎ出迎へ、新らしき年とも言はず、むかしの事ども聞え出で、「內君過行き給ひしかば、世は春ながらいと寂しく、館の內は春にも似ず、君の渡らせ給へるにて、賑はしくはなりつれど、また思出づる事のみ多しと、妻小毬は御目見に、罷出でず候」ト、目をしばたゝけば光氏も、何と言はん言葉も無く、そこ〳〵に立上り、二葉の上の住馴れし、座敷の方へ入り給へば、常吉中垣人々も、珍らしう見奉り、忍びあえず泣くもあり。光氏は夕霧丸を、膝に載せて打まもれば、はや智慧づきて笑ひ勝に、餘念なきのもあはれにて、屛風褥も二葉の上の、在りしに變らずしつらへて、衣桁には光氏に、參らすべき小袖羽織を、打懸けてはありながら、女のが竝ばぬが、とりわけて物淋しく、襖に畫きし鴛鴦も、思ひなしにや打しをたれ、初春ながら暖かに、池の氷の解渡り、水際の柳の靡くばかり、時を忘れぬ景色など、見る物每に哀れなれば、言少なに光氏は、立出でんと爲給へば、中垣は手をつかへ、「年每の例に習ひ、御服を仕立置きたれども、月頃の淚にて、色合も無く侍らんが、やつ〳〵しくとも今日ばかりは、召させ給へと小毬が、申しまする」ト取おろす、上著下著の織樣色合、世の常ならず爲盡したるを、引襲ねて著せ換へれば、若し今日此所へ立寄らずは、嘸小毬の怨むべきに能くこそ來つれと心に思ひ、衣紋正して光氏が、

降るは淚立つは霞か色衣

と吟じ給へば襖の此方に、

ふりぬるは年と涙ぞ春ながら

と答ふる聲は小毬なり。おほよその歎なるべき事にはあらじ。

葵の巻をはり。是より榊の巻の俤に綴り、花散里の巻もこのうちに籠る。

足らはぬ事なき身にさへも、世の憂き事は絶えやらず、阿古木を打捨て置かんには、かの凄まじき怨の增り、夕霧丸の身にや報ひん。さればとて今更に、對面せんも恐しき、心地せられて光氏は、いとあはれ氣に書きなしゝ、文にて時々音づれつゝ、籠り勝にて室町へも、たまさかならでは出仕せず。人の目よりは心に任せ、打遊ぶ樣にもてなし、例の山名の體を窺ひ、兄義尙の政治の事など、心を配りて春も過ぎ、夏もたちまち秋風と、吹替りつゝ薄散り、萩は飜れて菊の花、咲出づる頃とぞなりにける。空衣は朝夕に、阿古木が機嫌を能く取りつ、去年の秋には伊勢の國へ、下らんと言ひつるも、一月延び二月延び、兎にも角にも定まらぬ、心癖にて一年過ぎ、紅葉もやう〳〵色めく頃、時雨の先にふり捨てて、都を立たんに取極め、其由を告げしかば、光氏いよ〳〵心安く、ある朝霧のいと深きが、次第々々に霽れ行く景色、目馴れし庭も珍らしく、欄干に肱を凭せ、打眺めて在する處へ、杉生の文なりとて、言の葉が持來れり。あら珍らし、何事をか告越しゝと、まづ開きて見給ふに、藤の方此程より、御志の事ありとて、雲林院に籠らせ給ひ、今日結願の日にてあり、人少なる折なれば、密に逢はせ參らせん、秋の野も見給ひながら、彼所へ渡らせ給へとあり。光氏は眉を顰め、杉生が我許へ、直に文を送りしすら、怪しき事に思ひしに、此文體はいよ〳〵訝し。敵を欺る爲にもせよ、母とも賴む其人に、しげ〳〵近附き給ふなと、中をさけたる藤の方に、わざ〳〵おのれが導きして、逢はするには仔細ぞあらん。さいはひなるかな彼寺は、我も常に往通ひ、法文なんど問聞きし、親しき法師の多くあれば、二三日彼所に泊らん。言置くまでにはあらざれども、留守の間は紫を、言慰めよと言の葉に、聞え置きて例の如く、供人も多く連れず、雲林院に詣で給ひ、靜に案內を請はせければ、杉生は出迎ひ、人無き所へ誘ひ參らせ、「文にて申上げたる通り、お心ざしとか御祈願とか、御願ひなされて此所に三日、御籠りなされた御方の、御樣子をつく〴〵と、見上げ申すに泣々の、事ではどうか無ささうな。まづ一體此春から、御胸に障ると御肴へは、假にも御箸をお附けなさらず、數珠爪繰りて朝晩の、御看經が何よりの、御慰みの樣に見え、お好なお琴に手も觸れ給はず、世を憂きものと思ひ捨て、若しもの事でもあらうかと、人にも言はれぬ心遣ひ、此所の律師をお賴みなされ、御授戒ありしは昨日の夕暮。いよ〳〵合點がゆかぬ故、此所へ招き參らせしは、品に依つたら御方へ、御意見も願ひたさ。浮名の立ちしお中な

れば、うるさく思ひ給ふもあなた、又まへどからお子の様に、思召しておいでゆゑ、便に思すもやつぱりあなた。御思案なされて下さりませ。豫て知召す如く、音川の館にて、御誕生の若君は、室町御所にて御養育、御方は富徽の前と、顔合するが苦しいと、たま〳〵ならでは室町へ、渡り給へる事は無し。夫故に若君に、御逢ひなさるもほんの稀々。常々から春若丸と、どうぞひとつに住みたいと、被仰るのも御尤、御氣慰めにもならうかと、御迎を上げましたれば、押附御出で御座りませう。あなたをば私が、折を見合せ密やかに、御前へ御連れ申します。まづ餘所ながら物思はしき、御顔を御覽遊ばせ」ト、聞く度々に胸潰れ、事の仔細は知らねども、我より起りし事ならんと、光氏しば〳〵吐息をつき、杉生が案内にて、屛風の陰に立隠れ、藤の方の體を見るに、實に彼が言ひしに違はず、案じ姿に打低頭れし、額つきの淸らなるに、綠の髪の二筋三筋、態とならず飜れ懸り、簪、頭つき、衣紋の懸りに至るまで、かの紫の面影に、つゆ違ふ處なく、別の人とも思ほえず。常さへ氣高うつゝましきに、ましてや佛に念じ入り、用意深くとりなして、更に媚めく様は無し。御前の花案には、唐大和の錦を覆ひ、經卷の玉の軸は、御燈の光に輝き、いろ〳〵の旗天蓋は、香の烟に靡くが如し。總ての飾世に亡き様に、調へられしは眞の極樂おもひ遣られ、あないみじや尊やと、言はんとせしがわが口を、

我袖にて打覆ひ、猶身を潜めて光氏は、事の様を窺ふに、若君の御入ぞと、表の方ざゝめき渡り、腰元司を供に引連れ、春若丸は急しげに、此方のかたへ走り來れる、袴の著なし衣紋つき、いと美しうおとなびて、見ゆれど年の足らはねば、母と見るより珍しう、嬉しと覺えてひた〳〵と、むつれ寄り取縋り、舌は廻れど片言交り、何かあどなき物語、膝に上りて懐へ、手を差入れて微笑む顔、包むとすれど藤の方、我を忘れてほろ〳〵と、飜るゝ涙押拭ひ、「君の御側を離れかね、室町へ行かぬ故、其方の方から東山へ、御機嫌を伺ひに、來やつた時に逢ふばかり、顔見る事は今日までも、稀々なりしが是よりは、猶とりわけて遠避り、久しく逢はぬ其中に、妾が姿の醜く變り、そして若しも逢ふたなら、御身は如何思ふぞ」ト、問掛けられて母の顔、つれづれと打まもり、「水原の様に母様が、どうしておなりなされませう」ト打笑みて宣へば、言ひがひなくも哀にて、「なに言やるしども無い、あの水原は年寄りて、夫で醜うなつたのぢや。彼よりは此髪も短く、身には黒い物を著て、今玄關へ取次に、出た僧の様になると、もう打絶えて逢はれぬ」ト抱寄せて泣き給へば、若君はつと打驚き、「是からいくつ寢すると、東山へ行くのぢやと、指を折りては夫を樂み、久しく逢はぬと戀しいものを。そんな事は止めてたべ」ト涙落つれば武士の、様でも無いと言はれんかと、人見ぬ方へ背くる顔、髪ゆら〳〵と美しく、

口元目元是も亦、藤の實生は紫の、かの面ざしに其儘にて、喩はゞ蟬の脱殼と、實の蟬を見る如く、打笑む時は口の中、黒みて少し朽ちたる齒の、見ゆるもいとゞ愛らしく、女になさば宜からんと、思ほゆるまで淸らかなり。藤の方は氣を取直し、まだ辨も無き者に、詮無き事を言聞かせし、人も見つけば疑はんと、種々慰めこしらへつ「あの廣庭でこまどりして、今の子とろ〳〵を、中昔まではこまどりとも、雀の子取ともいふ。源氏の君、韻塞ぎを爲給ふ條に、左右にこまどりに、片わかせ給へりとあるは、此事にはあらざれど、左右に別れて、人の並ぶ事にて、其名の似通ひたり。遊んでおぢや」ト勸れば、機嫌直して春若丸、腰元どもを引連れて、表へ立出で給ひけり。

（十四編下冊表紙裏に）

上の巻に見えたる篇つきに、くさ〴〵の説あり。此ごとく字のつくりのみ出して、此篇いかにと問ふとき、亻にて修、氵にて源の字なりと、はやく答ふるを勝とする、たはぶれをいふとぞ。又一説、書を開きて、何篇の字にても、はやく見つけたる數の多少をもて、勝負とするともあり。篇突篇築など書けるは假字にて、篇繼なるべしといへり。

十四編下

藤の方は春若の、遊び相手に假托けて、邊の人を皆遠避け、文細々と書認め、花案の上に置き、念佛衆生攝取不捨と打のべて行ひつ、頓て懷劍取出し、さも美しく結揚げたる、髮振亂して根元より、押切らんと爲給へば、光氏つゝと走出で、「物に狂はせ給ふか」ト、懷劍持つ手をしつかと執る。杉生も一間にて、此場の體を窺ひしが、あなやとあわつるそのはづみ、倒るゝ障子と諸共に、轉び出でて縋りつき、「此頃は後の世の、事のみ思す御有樣、ものごと哀れの行を、おしめやかに爲給ふは、心ならずと光氏樣を、御招き申して置いたれば、事の樣子が私にも、おつしやりにくく思召さば、あなたへ御話しなされませ。斯樣に俄に思ひ立ち、尼におなりなされうとは、今若君の仰の通り、あなたは御氣が違うてか」ト言はれていよ〳〵涙に暮れ、「老衰へしといふにもあらず、ましてや夫のある此身、人にも言はず我儘に、髮を切るのは狂氣とも、言ふはさら〳〵無理ならねど、何の是が今始めて、思ひ立つた事であらうぞ。御佛に申して置いた、言葉が立たぬ此所離して、妾が願を叶へてたべ」「いえ〳〵左樣はなりませぬ」ト物に動

ぜぬ杉生も、心亂れて只うろ〳〵。光氏二人を押隔て、「御懐劍は某が、此所へ取つて置いたれば、もう立騷ぐ事はない。世を背き給ふには、深い樣子のある事ならん、御法體は愚の事、品によりなば御自害でも、お止め申さず御介錯に、罷立ち候べし。まづ母上の御胸の中、承はらん」ト進み寄る。藤の方はあはれなる、氣色に其邊を打見廻し、春若丸が捨置きたる、扇に屹と目をとゞめ、暫く物も言はざりしか、やう〳〵に顔を上げ、「過つる年御庭の、人丸の祠にて、命をくれよとあなたの御頼、その命を今此所に、捨てんと思ひ極めても、絆となるは此扇、世に怪しみを受くるのは、豫ての覺悟の事ながら、年頃よりして二心の、いちはやき富徽の前、取分けて此頃は、その景色いと怖ろしう、室町へ行く度々に、煩はしき事宣ひしが、猶夫にても慊らずや、かの宗全を忍ばせし、長櫃を持來りし、白糸といふ女を、君の御機嫌伺ひと、東山へ日毎の使、春若君のあてやかさ、光氏樣に其儘の、夫の是のと腰元の、女をとらへて高談、君の御耳へ入れがしに、二人の浮名が言募られ、その苦しさはいかばかり。元より曇の無い事は、杉生も知つてなれば、言譯するのは易けれど、夫では折角父上の、御憎しみを受けられて、あなたが都を立退かん、御企の妨と、口惜いやら悲しいやら、ぢつと辛抱したれども、もうどうも堪へかね、命をくれよのお頼は、此所ぞとふつと心づき、光氏と不義したる、其事今は人も知り、面目無さに斯くなる由、書置して自害せば、慭ひに生存へて、憂目を見んより亡人と、なつての後の惡名は、斯程につらくはあるまいと、覺悟極めて居たりしが」ト言ひつゝ件の扇を取上げ、「春若の顔見たら、ありし辛さも忘られて、妾は死なれぬ死なれませぬ。未練ながらも髮を切り、河内の國道明寺に、知邊のあれば彼所へ立越え、影を隱して生存ふる、程は憂けれど行廻り、又春若に逢ふ事も、ありなんものと愚なる、心に果敢なき賴み事。斯くなり行くもその昔、山名が妾へ言寄りし、文の返事に尼になる、此身の願と僞りし、佛の罸で御座りませう。只今も申した通り、此書置に光氏と、忍逢ひたる身の罪を、今更懺悔後悔して、雲林院の佛前にて、形を變へたと羞かしい、つゆ覺無き事までも、認めて置きましたれば、御望は叶ひませう。今切捨つる此髮と、その書置を杉生に、持たせて御歸し遊ばして、父上の御不興をお受け遊ばせ光氏樣」ト兩袖顔に押當てて、聲を忍んで居たりけり。杉生ほつと息をつき、「御心狹いも程がある、何の夫なら譯ない事、白糸は宗全へ、あなたの素性を告知らせ、既に奪取らせんと、巧し者といふ事は、彼が密書を私が、人丸の社にて、拾ひ取つて差上げて、義正君は能く御存じ、其事が叶はぬ故、あなたを種々惡ざまに、言なすと思召し、おつしやる通り白糸が、光氏樣の御噂を、大聲上げて言ふのは繁々、御耳へ入つたに違ひは無けれど、聞かぬ振

して其事は、御意遊ばさぬが御疑ひ、なされぬといふ確な證據。なア申し光氏樣」ト目まぜを心得進み寄り、「命を我に賜れと、願ひしは宗全に、不義の體を見せたる上、其座で切腹なさんがため。父の慈愛に其時は、惜しからざりし命を助かり、今つく〲と案ずれば、死すべき心更に無く、命が大事になりました。申さば臆病未練者と、御さげすみもあらんなれど、宗全がていたらく、いよ〲謀反に疑なし。其時こそは兄上の、力となるが人の道、能く〲道理を聞分け給へ。光氏は道に背き、父の愛妾藤の方に、忍び逢ひしといふ浮名の、誰言ふと無く聞えなば、夫を落度に我と我が、身を退きて敵を防ぐ、備も密に爲すべきが、母上此所にて御自害か、又髮を切り立退かれ、いよ〲不義に定まる時は、何とて某安閑と、命をながらへ居らるべきか。夫のみならず春若の、身の爲にも惡しからん。かの白糸をいぶせく思さば、追退けんはいと易し。富徽の前の姪に當る、桂樹といふ女、顏形は醜からず、心も賢き方ながら、いと蓮葉にて仇めく性、花の宴のその夜さり、我思はずも細殿にて、彼に逢見し事のあり。明行く空のあわたゞしく、扇を取換へ歸りし跡へ、富徽の前の來給ひて、彼扇をふつと見出し、忍び男は某と、いふ事を推量し、大方ならず打腹立ち、過つる年も政則が、娘二葉を義尚の、妻になさんと思ひしに、光氏樣に婚姻し、今又姪の桂樹を、その代にと思ふから、館へ引取置いたるに、唐戸を開けて膽太く、忍込んだるいたづら者と、言ひさま件のわが扇、兩手に摑んで要もばら〲、涙飜して顏色も、變るばかりにありける由、其座に親しき者ありて、告越したる故詳しく知れり。其後に桂樹は、髮は島田に結あげながら、振の袂に袈裟を懸け、拂子を離さず佛門に、入りしは故ある事なるを、我を慕へど忍び逢ふ、便なければ世を恨み、夫より發りし菩提心と、富徽の前は思ひ違へ、怒強くて某を、亡はんの心あり。さればいよ〲桂樹に、戀慕の樣にもてなさば、必定父へ讒言されん、其時を程好くはかり、我身都を立去るべし。かゝれば是まで母上に、仇し浮名を負せたれど、夫までもなく父上の、勘氣を受けんはいと易し。はや是までにて御顏を、我も見じ光氏よと、假にも言葉を懸け給ふな。氣色立ちたる中なりとも、隔つる上にも隔てなば、元より淸き心の顯れ、次第に浮名は言消さん」ト愚の筆には書取り難き、道理を正し理を責めて、説示し給ふにぞ、藤の方はやう〲に、思止まる氣色にて、亂れし衣紋を搔繕ひ、「女の愚痴なる心から、只一筋に思ひ詰め、恐しやあなたにまで、御難儀を懸くる處、仰に隨ひ春若の、爲を思ひて此上に、まだどの樣な憂き事の、我身の上に重るとも、今日の樣に我儘な、事は是ぎり愼しむ程に、御堪忍遊ばせや。人の見ぬ間に杉生は、此髮をあげてたも」ト聞いて胸を撫下し、「夫なら譯の無い事と、落付顏に申したは、御心を慰

めんため、どうなる事かと今までは、大體案じて居りました」ト言ひつゝ立つて櫛笥を取出し、「久しぶりにてあげますから、御心持がお惡からう。御氣を御揉み遊ばすで、御持病のお逆上が、一倍強く御髮が熱り、此まァお頭垢の出來た事は」ト髮結上ぐる其中に、光氏は藤の方の、かの書置を案より、取下して見給ふに、人目を忍び書き給へば、繕ひも無き走筆、常よりも猶あてやかに、氣高く思ひなさるゝは、父の手筋を受繼がれし、故にやあらんと稍しばし、打眺めて在せしが、恥かしき事悲しき事、人には包む事のみなれば、仇し浮名も斯く消えよと、燈明の火に打翳せば、灰となりてぞ飛散りける。かゝる處へ春若丸、遊びあきてや立戻り、「こは兄上」トおとなしく、手をつかふれば光氏も、いと懷かしげに言葉を懸け、人の聞えを憚れば、夫とは無しに藤の方を、いよ〳〵諫めこしらへて、春若丸を相輿に、乘するも過あらせじ爲と、心に言はせ目に教へ、「能く心得よ杉生」ト、猶さま〴〵に氣を配り、事なく治めて藤の方を、東山へぞ歸しける。

そも〳〵此雲林院に、久しく籠りて在する律師は、光氏が母花桐の、ゆかりの人にてありける間、既に先にも言ふ如く、光氏しば〳〵此寺へ、詣しはこの緣に依れり。今日も亦杉生が、文の知らせを幸ひに、此所に來りて藤の方と、諸共に經を讀み、御佛を拜まんと、思ひしとは事違ひ、この騷に打紛れ、其日は空しく暮れけるにぞ、供の人は大方歸し、心に任せぬ浮世ぞと、つく〴〵思ひ續くるに、歸らん事の懶くて、二三日留り居るに、哀れなる事いと多かり。庭に媚く女郎花、まだうつろふとも見えざるに、山の紅葉は氣色立ち、野分めきて落し來る、風身に染みてあわたゞしく、柳の葉の飜るゝさへ、所がらにや世の常無き、教も思ひ出でられつ。まだ明果てず月影の、白みて殘る頃よりして、法師ばらは皆起出で、佛に閼伽を奉らんと、花皿から〳〵と鳴しつゝ、菊の花の濃き薄き、紅葉など折散し、立廻るも餘所目には、果敢なく見ゆれど御佛に、仕ふまつるを營みと、思ひ入る身は朝夕に、馴れて此世も寂しからず、はた後の世は取分けて、賴もし氣なる有樣を、羨ましとは思へども、ゆかりの色の心に懸り、且世の亂の近からんと、捨果て難き身を悔みつ、思はず此所に留りて、夜を隔つれば紫の、心元なく思ひやせんと、陸奥紙に打解けて、書き給へる文の奥に、

　淺茅生の露は置きてか夜の嵐

いと烈しきに靜なる、心は無きなど細なるを、近習の武士に言付けて、密に嵯峨の館へ送り、さて學問に長けたる法師の、ある限り召出して、論義をせさせて聞き給ひ、自らも六十卷と、言慣したる天台の、書を披いて讀み給ひ、その覺束なき所々、說かせなどして在します、御姿

の婀娜さは、此山寺に光を添へ、佛の面目ありなんどと、怪しの法師ばらまでも、喜び合うて其日もはや、西に傾く七ツ下り、嵯峨よりの御返事と、使に來たるは早百合なり。まづ光氏は文箱を取上げ、打開いて見給ふに、白き色紙に、

風吹けばまづぞ亂れぬ蜘の糸

むかしは小玉の手蹟に似て、艶なく見えしが朝夕に、書かはしょかば我筆の、運を覺えて今少し、媚かしき處あり、「女には是も好からん、いと美し」トひとりごち、微笑みて居給ひしが、頓て袂に取隱し、「思ひがけなく何として、此所へは來りし」ト仰に早百合は手をつかへ、「申上げたき事ありて、御館へ上りし處、此程是に御渡りと、言の葉が物語り、その御返りを紫様が、御認め遊ばして、御使の出ると聞き、これさいはひと妾が、申し乞ひて御跡を慕ひ、參りましたは深い樣子、人無き所でひそやかに」「さあらば此方へ」ト内陣の、格子の内に早百合を伴ひ、「聞召して在するは、御厨子の内の本尊ばかり、元よりも慈悲深き、佛の心にあんなれば、外へは洩し給ふまじ、心おき無く言うたが宜い」ト打戯れて宣へば、早百合も少し笑を含み、閻魔の前ならみる目かぐ鼻、めつたに油斷はならねども、此所にはそんな物も無し、木魚の口が差出ても、ほく／＼と言ふばかり、人に告げても解るまい。一昨日の夕暮方、塒を急ぐ烏丸、通り懸つた其時に、夏野々々と昔の名を、呼懸けられて振返れば、前度勤めた奥方空衣、やれお久しやと私が、立戻ると密なる、茶屋の奥へ呼入れて、空衣の申されまするは、先頃途にて逢ひし時、今は糺の御館に、勤めて居ると其方の話、夫なら定めて光氏君に、度々おん目に懸るであらう、なんと嵯峨の御館へ、使に行てはたもらぬかと、初よりして六條の、阿古木の事を備に語り、野中の里の別莊より、野の宮へ迎取り、近々伊勢へ發足と、定めしまではさいつ頃、文にておしらせ申したれど、此上の詳しい事は、どうも筆には書取兼る、其方は知つて居る通り、御方達の其夜さり、村荻と詐つたで、妾の閨へ御忍び、人に疑ひ受けたる身が、空衣に侍ると、あからさまに名を名乘り、嵯峨へはどうも上りにくい、私に代つて直々に、申上げてくれよと賴。阿古木ぬしは伊勢路への、下りが近うなるにつけ、心細氣に物案じ、ときめき給ふを羨ましく、日頃思ひし二葉樣、失せ給ひたる其後に、我も君とは從弟どち、氏もさまでに劣ねば、ゆく／＼は御本妻にも、備る心にありしかど、夫よりはかきたえて、つれなき君が御待遇、扨は彼の我一念の、怪しき事ども見給ひて、實に憂しと思すかと、自らも思ひ諦め、かつは磯菜も見捨て難く、只管に出立ち給ふ、お心とはなりたれど、せめては別に今一度、物越しばかりの對面はと、人知れず待聞え、給はる樣もあはれなれば、御入を願はんにも、はや今日

明日とあわたゞしく、旅の用意の調度の類、そこら邊へ取散し、僅の中の假住なれば、修繕もせず間數もなし、さればとて立ちながらと、申すもあまり本意なさに、幸ひに明後日はと、一昨日の言葉なれば、今日夕方より喜代之助、君吉を誘うて、川次郎が家に招かれ、ふた夜さばかりの泊りがけ、されば今宵は御心を、置かせらるゝ者は無し、野の宮へ御參籠と、御供の者には觸流され、あれまで御出遊ばして、宵遊の琴の音の、止むを合圖に社より、西の南に離れたる、庭燎を焚く火焚家とか、申す宮の後の折戸を、音づれ給はゞ都にて、この頃抱へし岩根といふ、老女に豫て心得させ、妾は閨より辷り出で、畏れながらその跡へ、密に誘ひ申させなば、外へは洩れん樣も無し、阿古木の心の和ぐ樣、一夜はしめ〴〵語ひ給へと、申しました」ト空衣が、長物語を落もなく、言述れば光氏點き、「吹かふ風も程近き、嵯峨の館に在りながら、かの野の宮に今まで詣でず、彼が恨むも道理なり。直樣是より彼所へ行かん」ト仰に早百合は打喜ひ、「左樣なら御出の趣、空衣には文にて知らせ、稻舟樣も御待兼、私は直樣に、是より糺へ歸りませう。是はしたり何より先に、申上げねばならぬ密事、いよ〳〵包む事なれば」ト近々と摺寄るにぞ、さては山名の事なるかと、光氏も身を寄せて、聞けば早百合は聲を潛め、「綾汧が宜しう」ト、につこり笑うて歸りけり。光氏も微笑みつ、「中川で我を扇ぎ、氣詰りなやら顔を赧め、しとゝ汗に濡れて居た、其折と淸水で、逢うた時とは別の人、いよ〳〵世に馴れ何事も、能く言說くが姦ましく、言葉數の多い女、糺の事を杉生に、初告げしも彼が業、阿古木の事をもうか〳〵と、言はねば宜いが」ト座敷に戻り、「遁れぬ事の候」ト律師に頓て暇を乞ひ、上下の僧は更なり、米を炊ぎ柴を刈る、賤しき者に至るまで、それ〳〵に物を取らせ、尊き事の限を盡して、雲林院を出で給ひ、落つる日影と諸共に、西へ〳〵と遙なる、野邊を分入り給ひければ、猶物哀れの景色にて、秋の花は皆衰へ、淺茅が原も枯々なる、蟲の音の幽なるに、松風凄く吹合せて、その琴とも聞分け難き、糸の音色の絶え〴〵に、聞えたるもいと艶なり。彼こそ阿古木の爪音にて、仁木の隱家なるらめと、日は疾くに暮果てたれど、月影に透し見れば、實に荒果てたる小家にて、野の宮の西に隣り、北の方へ押廻し、茅もて葺ける門のあり。斯樣に哀れに面白き、所にてあんなる上、嵯峨より近き道なるを、など今までは來ざりしかと、過つる方の悔しうおもほえ、猶そこら打廻り、宮居の體を眺むるに、前には黑木の鳥居を立て、物はかな氣なる小柴を束ね、外の園の垣となし、彼方此方にかりそめなる、板屋を造り設けしは、飛驒の匠が手を盡しゝ、社よりは尊く見え、神々しくぞ拜まれける。禰宜巫の類ならん、おのがどち集りつゝ、其所此所に打咳き、物言交すも能く聞ゆ。光氏は歎息なし、阿古木は常さへ物思

はしく、憂身を歎つ生なるに、かゝる淋しき宮居に隣り、月日を隔てて我にも逢はず、嘸わびしくやありけんと、不圖はるか向ふを見るに、微に光のさしたるは、早百合が敎へし火焚家ならんと、彼所へ立寄り見給ふに、此所には更に人氣もなく、果して折戸の入口あり、是こそ仁木の忍び門、夫よ〱と打點き、なほ火焚家の片陰に、立隱れて窺ふに、遊は皆止めたりけん、かの松風の吹合せし、調もいつの程にか途絶え、心憎く女の笑ふ、けはひなんど聞えけるが、夫さへもはや寢たりけん、打しづまりて音も無し。折こそ好けれと光氏は、足音忍んで立寄りつ、扉に彳み試みに、ほと〱と音なひければ、答は無くて内より開き、手燭を持つて出迎ふは、かの今參りの女ならん、岩根を傳ふ瀧の糸、黑き筋なき九十九髮、何とやらん見知ある、面ざしの老女かなと、打まもるとも彼方は知らず、「立煩はせ給はんと、心急くほど御遊の、常より今宵は夜も更けし。此所は人目も見苦しゝ、此方へ渡らせ給へ」とて、蟬の脫の空衣が、閨へ誘ひ入りければ、かの中川にて見し夢の、はかなかりしを思ひいで、光氏は默然と、物をも言はず居たりしかば、岩根は御前を直に退き、此方の一間に臥したる阿古木の、枕近く摺寄つて、「人傳の御便ばかり、もう御目に懸らぬとは、あまり一圖のお心とて、空衣樣が光氏君を、あれまでお招きなされたれば、早う御出遊ばしませ。近頃は世を憚り、御忍び歩きもなされぬ

噂、夫を夜更けてわざ〱と、此所へ御出遊ばすは、等閑ならぬ御心、夫を仇になされたら、磯菜樣の御爲にも、惡しからうと空衣樣が、くれ〲も御言傳。お顏をお直しなされるなら、お鏡をあげませう」ト、兎角扱ひ聞こゆれば、阿古木は床しさ懷しさ、飛立つ程に思へども、今は遊女の身にてもなし、浮世を思ひ離れしと、朝夕口には言ひながら、いと若々しと娘の磯菜、若し聞付けなば笑ひやせん、さればとて情なう、もてなし申すも道ならずと、氣強き樣でも猛からぬ、女心にとつおいつ、吐息つく〲猶豫ひしが、人の見る目を羞かしと、只此儘にしほたれて、いせをの蜑となり行かば、又白浪の立かへる、時をいつとか定むべき、笑はゞ笑へ言はゞ言へと、思ひきつて炷しめたる、伏籠の小袖引懸けつ、此方の一間へいざり出で、簾を隔てて蹲居たる、そのけはひいと心憎し。光氏わざと身をへりくだり、「伊勢へ下らば内宮外宮、宮巡りも爲給ふべし、さあらば愼み深からんと、穩れし此身を憚りて疎々しく過行きしが、緣側の端ばかりは、許されんかと空衣が、言ひしにつきて來りしぞ」ト障子に凭れてしどけなう、衣紋も正さず居給へり。此時月は南に廻り、簾を漏れて華やかなる、影に姿の隈なく見え、にほひ更に似るもの無し。光氏はこの年月、打絕えたる事の由を、今更言はんも煩はしく、かの神垣の榊の枝を、いさゝか折りて持ちたりしを、簾の内へ差入れて、「時雨に濡れ雪に

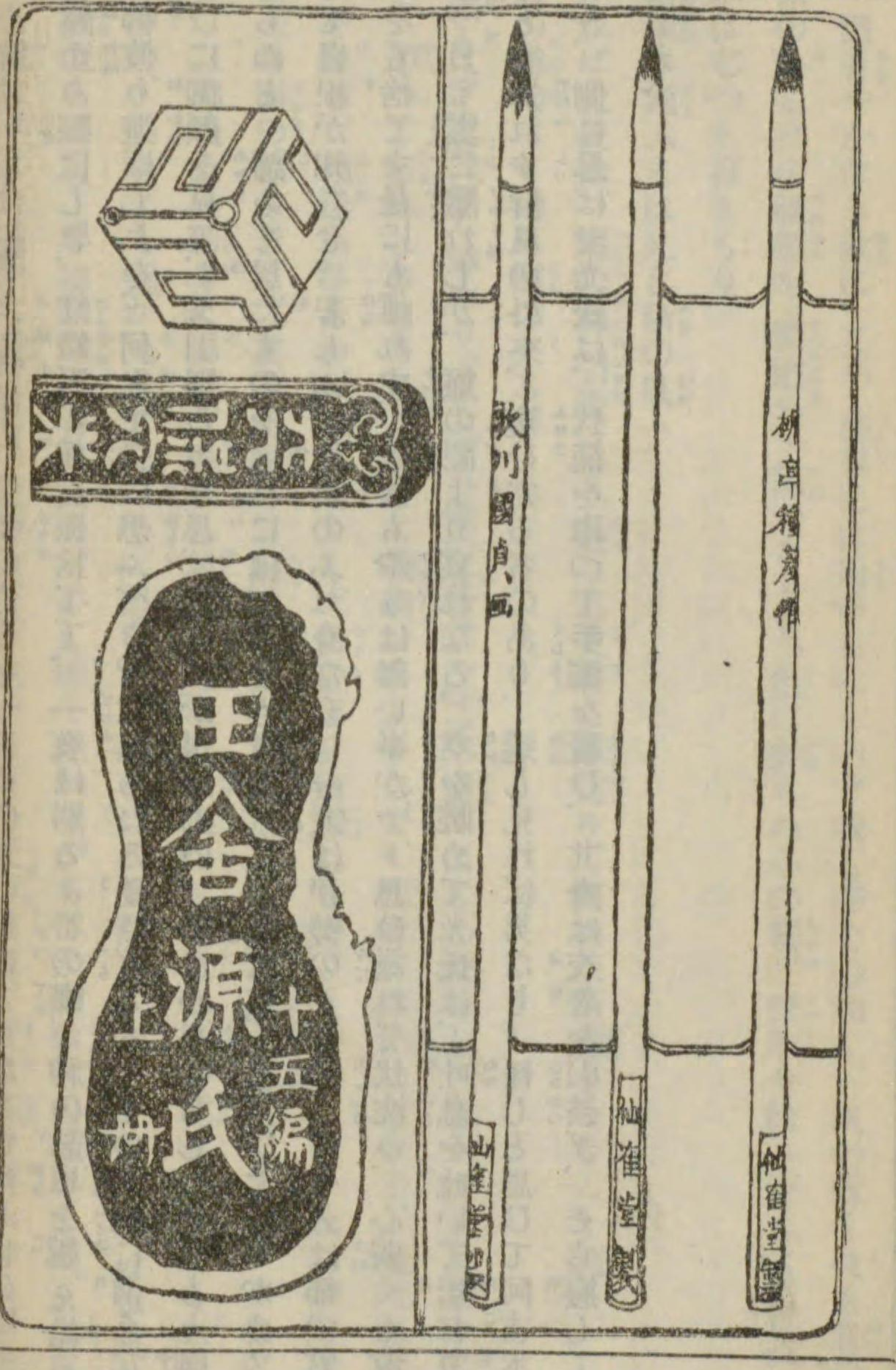
埋れ、猶青やかなる故にこそ、神事には用ゆるならめ。我も亦その如く、風の吹く夜も音づれず、雨の降る日の徒然を、問慰めず隔つるとも、色は變らぬ心の誓、受取り給へ」ト言ひければ、阿古木はじつと打まもり、

榊葉へ通ふとは見じ秋の風

と答ふれば光氏は、隔の簾引除けて、疊みし夜著に推凭り、阿古木の顏をつく〴〵眺め、

野の錦捨てて榊へ蝶の來る

「香を懐しみと歌にも詠めり。かの六條に在りし時は、通ふにも心安しと、思へばさまでに懐しからず、却つて忘れし事もあり。然るに磯菜が事よりして、此所へ移住まはせて、後は喜代之助の前を恥ぢ、相逢ふ事もわが儘ならずと、愼むほど猶戀しさの、まさりこそすれいかでか劣らん。夫を榊の色なきに、其身を喩へて隔てしは、秋風なりとの歎言、怨めしさよ」ト口には言へど、二葉の上の影身に添ひ、患まし氣なる樣には引換へ、脇息に肱を凭せ、結びも止めよしたがひの、つまよと我が見返りたるを、思ひ出せばあはれも醒め、年こそ少し老けたれど、顏形は猶清らにて、手は立竝ぶ者も無く、心も敏く生れながら、かの執念の深きこそ、上なき瑕瑾とも言ふべけれ。あな淺ましの女やと、打泣かるゝを此方には、實に慕ひ給ふかと、思ひ違へて心解け、「人に隱して御館に、愛妾の侍るを、二葉の上の代にと、思し定めし世の噂、さすれば常より賑はしき、嵯峨野の錦を振捨てて、一夜は別るゝ番の蝶、神の忌垣を越え給ひ、此所へ御渡り遊ばしたを、何とて仇に思ふべき。取集めたる憂さ苛さも、その御詞に消えながら、憖ひに御顏を見て、又引別るゝ物思、空衣樣が恨めしい。心に心をはぢしめて、もう御目には懸らぬと、諦めて居たものを、私には知らせもせず、いつの間にやら忍ばせ申し、かう〳〵ぢやとて岩根が知らせ。若しふた見屋のふた身なら、一人は伊勢の子に從ひ、一人は都の君の側、夫をも捨てず是にも離れず、仕樣もやうは無い事か」ト思ひ亂れて伏沈み、心弱くも泣きにけり。月も雲に隱れしか、簾の隙より哀れなる、空を眺めて光氏は、吐息を吐いて居たりしが、誰とも知れず屏風の外へ、窺ひ寄る者のあり、透し見れば男なり。怪しと思ひて阿古木にさゝやき、側に忍ばせ光氏は、伏籠を取つて手燭を覆ひ、其身は夜著を引被ぎ、そら寢してこそ在しけれ。



偐紫田舎源氏第十五編序

倦かぬ物は菜汁、月夜に黒小袖、忠臣藏に源氏なれども、玉味噌では菜汁も喰へず、忠臣藏も下手にかたると、猪よりさきへいつさんに、聞人が迯出す鐵炮場、定九郎の名がついては、黒羽二重も木綿に劣れり。この源氏も其類にて、偐紫の和かな、表にはうつりのわるい、應仁記の隱し裏、仕立あけしは七年前。新しい時だにも、詞の艶なき田舎織、ましてや趣向の古著となり、彼の紫の色もあせ、そろ〳〵筋のきれかゝるを、十五編まで繼發行、色紙に書いて發句の贈答、てには違ひに揃はぬつじ褄、艶なる文を片言に、解分衣は赤ばみたる、黒小袖にも及ばずながら、是からすこし季がかはり、いつも月夜に須磨の卷、明石縮の夏ものに、移らば輕く筆も走らん。ちつとの間ぢやと衿垢の、殕を落さずその儘おきつ。

柳亭種彦

足利
光氏

桂樹

十五編上

纈の衣を打懸けし、伏籠に手燭を覆ひしかば、朧々と人影の、ありとは知れてさだかにも、見分かねたる屏風の内、忍び男はそろ〳〵這寄り、「なう〳〵母上々々」と、光氏を揺覺せば、さては例の川次郎と、心づけどもをかしさを、堪へてやう〳〵目の覺めし、おもむきにもてなしつ、いよ〳〵夜著を引被ぐ、光氏が枕元、慄ふ膝節踏占めつゝ、川次郎近く寄り、「たとへ繼しき中なりとも、子として親に言寄るは、道に背くと知りながら、宿世に結びし縁ならん、去る年伊豫へ下られて、手に持つ玉を取られし心地、今一度の逢瀬もと、神に佛に頼みたる、心の通じて今度の上京、久しぶりにて御顏を、見るより募る煩惱の、犬とも譏れ猫にも喩へよ、あなた故なら惡名を、受けるが却つて此身の喜び。ねびまさり給へりと、かの昔物語に、書きしも斯くやいと若き、頃にも優りて一ッづつ、お年の增すほど嬋妍な、御顏には似ぬつれなさを、恨み言はんも邊に人目。されば親人、君吉を、近々伊勢へ下らるゝ、立饗應と我家へ招き、酒を盛りて盛つぶし、跡へ廻つた今宵の計略、あゝ我ながら近年の、楠とても及ぶまじ、

この城廓も千早振、神の宮居の搦手から、忍んで見れば案の如く、人らしいものとては、藁人形も邊に居ず。さて度々も申す通り、この川次郎はもと捨子、しかも此所の辨天の、祠の前で拾取り、養育はしたれども、血を分けた子でない故、己には似ざる不忠者と、親人の數度の意見。さて某が心にも、偏屈過ぎにお生付、あゝ血を分けぬ親なれば、是非が無いと思うて居る。夫に連添ふあなたは猶更、他人と他人で義理は無し、貞女兩夫に見えずとは、大昔の譬事、近い手本はかの光氏、親の愛妾藤の方と、忍びあひしといふ事は、今誰知らぬ者もない。その光氏は卽ち主人、上を見習ふ下とやら、して見れば某が、母人を慕ふのも、筋なき事には候まじ」ト、言ひつゝ摺寄り光氏が、手をとらへて撫さすり、「さて尋常に柔かさ、光氏が手も此樣に、きやしやであつたで先年は、母上と取違へ、面目を失ひしが、こゝらに居給ふ筈もなし。まづ〳〵此宵は夫は安堵。さて其夜さり村荻と、光氏は心得て、あなたの閨へ忍んだを、歸しもされず夜明まで、さすれば疵の付いたるお體、とても濡れたる袖とやら、露の情はかけ給へ。たとへ心に染まずとも、伊勢へ下るも纔の間。これ何故物は宣はぬ、頭振ふるのか點くのか、闇の烏の聲なくて、あゝとんとしやうどが無い」ト一人わくせく氣を揉みあせり、につこと笑つて打點き、風呂敷包取出し、「大事の事を忘れたり、いや〳〵妾は光氏と、不義した

覺は無いなどと、言張り給へばそれ此所に、暗うて確に見えまいが、あなたの帶と光氏の、帶を證據にかの明方、屛風に懸けしを奪取り、父に告げんと思ひしが、主人と義理ある母の事、折こそあらめと穩便に、心の中に治めしも、元はと言へば矢張あなたを、憎からず思ふから。この罪人は光氏ひとり、主人の威光で手込同然、是非なく操を破らせたに、違は無いも疾くより承知。兎に角憎いは光氏め。な、コレ申し、まア其樣に俯いて、御頭から夜著をすつぽり、美くしいその御髮が、亂れませう」ト取除る、とたんに光氏手を延べて、緋の衣をかなぐれば、伏籠を洩れてはつとさす、火影に驚く川次郎。光氏は悠然と、「方違に宿りし夜、わが帶の失せたるを、訝しくこそ思ひしが、汝が隱して置きたるか」ト仰に答へん言葉も無く、遁れぬ處と川次郎、忍びの鍔元くつろぐる。夫には更に目も懸け給はず、屛風の陰を差覗き、「阿古木は定めて此程より、此所にて逢ひつる事もあらん、川次郎の來りしなれば、すこしも憚る事はなし。まだ言殘せし事もあり、是へ〳〵」ト近く招き、問ひつ問はれつしみ〴〵と、物語してにこ〳〵と、笑うて在するその顏ばせ、睨まるゝより怖ろしく、川次郎は色蒼ざめ、膝わなわなと齒の根もあはず、茫然として居たりしが、何思ひけん裏口より、逃出して遠くも走らず、かの野の宮の傍なる、辨天の祠の前に、イみて邊を窺ひ、手水鉢の水汲上げ、一口飲で胸撫摩り、そろり〳〵と刀を拔き、側の石に押懸り、寐刃を合する後より、「なう殿、樣子は詳しく聞取りしが、かの諺に毒喰はゞ、皿を舐れと言ふ如く、今となつて光氏が、咎をうかうか待つよりも、忍び寄つて一打と、思召すのも御道理ながら、また御思案がお若い」ト聲懸けられて月影に、能く〳〵見れば名は知らねど、顏は確に覺ある、母が伊豫より上りし時、此所にて抱へし老女なり。わが胸中を悟りしれもの、助け置いては惡しかりなん、幸ひ刀の切味を、試みんとて切つくれば、身を開いて最前の、二筋の帶目先へ突付け、「光氏を不義者に、爲すべき證據の此帶を、今の騷のその紛れ、打忘れて置かれしを、持つて來たのが御力に、なるべき印に侍るぞ。急き給はずと御胸の中、斯く言ふ岩根に包みなく、明し給へ」ト言ひければ、打點いて刀を收め、「汝が推量なしたる如く、光氏の歸りを待受け、唯一刀に切つて捨て、妹が緣もあるなれば、山名を賴んで此身を隱し」ト半分聞きさし頭振をふり、「御思案がお若いと、申したは其所の事、宗全より〳〵謀反を企て、打つて出でんと思へども、光氏君にその手段を、挫かるゝ事度々なれば、人知れず光氏を、失はんと爲す處へ、其首提げ行かれなば、喜んで隱匿んと、思ひ給ふぞ愚なる、直に御身に繩打つて、まづ斯く〳〵と訴へ出で、表面はつくる忠臣顏に、諸侍の氣を弛ませ、底の心は手も濡さず、まづ邪魔は拂ひしと、二道懸くる

謀計に、命を落し給はんより、外に手段は種々あり。あなたは此所の捨子ぢやと、先程のお物語、若し夫が實なら、捨てゝあつたはあの邊、三月二日戊の、辰の日で巳待の夜、年强の二ツばかりと、お聞傳へはなされぬか」ト問はれてほく〱打點き、「しかありし由父の話。まづそれよりは差當る、光氏が憤、所詮我をば捨置くまじ。今言ふ處も理なきにあらねば、山名も迂濶に賴み難い。はてどうがな」ト思案の顔、岩根は月に透し見て、「後の印と其時に、添へて有つた其品は」ト又押返して尋ねられ、屈託さなかに最うるさく「物語には印籠が、二重なんどと書いてあれど、子を捨てる程無慈悲な親が、道具をかたはにしもせまい。己には守も帶もなく、生木綿の著物に、くるんだばかりで光氏が、今にも追人を懸けたなら、ほろ〱破れる菅笠の、中に捨てゝ有つたと話、其時こそは切死」ト夫と是とをひとつに言ひ、心も空にうろ〱眼。岩根は膝をはたと打ち、「チ、それ〱、證據なきこそ證據なれ。もうお案じ遊ばすな、是からあなたの身の上は」ト差寄つて耳に口、打さゝやけば川次郎、聞く度々に驚きつゝ、「扨はあなたが實の母人、富徽樣の前の腹心なる、白糸はわが姉なりとか」「さればよ今更語るのも、面目無けれど夫に別れ、育み兼たる二人の子、情なくも御身を捨て、姉は十をも越したれば、兎も角もして二三年、養ふた後あたりなる、泥藏といふ人を賴み、晝顔樣へ奉公に、差上げて置いたるが、近年はさいはひと、富徽樣の御氣に入り、初は小菊といひたれど、妾は岩根と呼ぶ故に、流れて落つる白糸と、瀧の緣にて名をかへし、その又末は川次郎と、お名乘なさるも奇遇とやら。是より御身の落著は」ト又さゝやけば又點き、「あなたが此所へ奉公も、光氏が樣子を探り、白糸まで知らせん爲とか。よし〱然らば此帶を、差上げてさいつ年、方違のその夜の事、又候今宵も喜代之助が、留守を窺ひ忍びしなんど、取繕ひて言上げなば、光氏は密夫の科。しかし夫まで此身を隱す」ト言ひかくれば岩根は打笑み、「富徽樣の御差圖にて、忍んで在する其時は、たとへ夫と知れたりとも、光氏の手ざしは叶はぬ。私は暫しの傭人、衣類とても多からねば、此儘退かんも心安し。いざ諸共に、はや〱」ト勸められて川次郎、「胸の動悸は治まれど、をさまり難きは其人と、知らずに主人を飽くまで惡口、探出され憂き恥を、見んより先にも言ふ如く、討捨てて其場で切腹。其所退き給へ」ト口には言へども、岩根が勸めをさいはひと、そこ〱其場を逃げ去りけり。

此時に天女廟の、唐戸を開き立出る空衣、思案に暮れつゝ吐息を吐き、茫然として打見やる、此方の小道を光氏が、戻りと思しく忍びの乘物、心せかれて人目も厭はず、すら〱と走り寄り、駕籠の前に手をつかへ、「申上げたき事のあり、ゆるさせ給へ」ト乘物の、戸を押明けて差

覗けば、思ひがけ無き君吉なり。こはそもいかにといそがはしく、問へば答もいと忙しく、「川次郎の宅に於いて、喜代之助殿某を、密に招いて宣ふは、忰が今宵の體たらく、心得ぬ事のあり、我は酒に醉ひたる樣にて、程宜き頃に打臥すべし、汝も眠りし體にもてなし、心をつけよとありし故、空寐なすとは知らずして、川次郎は只一人、小門口より忍出づるを、何所へゆくかとしりに跟き、この野の宮の瑞籬の、内に入りたる夫までは、確に知れども月影の、闇き木蔭に見失ひ、つく〴〵思ふに我々が、留守を窺ふものならんと、我も住居へ立戻り、磯菜が目覺めし體なる故、忍んで來りし者ありやと、尋ぬれば小聲になり、そは光氏君に侍るなり、母樣が恥かし氣に、見えさせ給ふが氣の毒さ、知らず顏つくりしと、賢し氣に答へし間、夫にはあらずと問返さんも、無益と思ひてあなたの常に、打臥し給ふ一間に身を寄せ、能く〳〵聞けば川次郎、姉上と思ひ違へ、光氏君を惡しざまに、罵りたるが事顯れ、逃出したる眼ざし、所詮我も是までと、思ひ詰めたる其樣子、捨置き難く御前に出で、面は人に似たれども、心は獸に劣りたる、川次郎にあんなれば、己に一味の者を語ひ、狼藉なさんも圖り難し、恐れながら御駕籠にて、まづ某が御先へ戻り、さある時には差違へ、後の憂を除かんと、申上げても我君は、更に耳にも入れ給はず、何か阿古木と書交し、打笑ひなど爲給ひつゝ、望みとあらば其方の、勝手次第に計らふべし、我は徒歩にて後より歸らん、大儀とばかり宣ひ捨て、其後何の仰もなし。申上げたき事ありと、今姉上の宣ひしも、其事にこそあらんずらめ、はや直々に言上あれ。乘物急げ」と空衣の、答も待たず過行きぬ。

やう〳〵明行く空の景色、繪に寫したる樣に思はれ、光氏は欄干に、打凭れて居給ふに、この住居は野の宮より、少し小高き所なれば、かの火焚家神樂殿、結廻らしたる柴垣の、内はさながら目の下にて、殘り止まる供人の、我庭顏に遊ぶも見ゆ。阿古木は言葉に出さねど、別れかねたる風情を悟り、さしも思はぬ事をさへ、情ありげに言續け、人の心を破らぬが、光氏の常なれば、世に隔なき中らひに、實を盡して語ひつゝ、別れんとし給ひしが、又立戻つて近く寄り、「言ふべき事聞く可き事、たまの逢瀨はいと多く、聞え洩しゝ事のあり、御身に仕へ馴れたれば、片貝をも根引して、共に伊勢へ下さんとて、其事既に整ひしが、片貝は播磨の生れ、國に老いたる母のあり、此頃甚く煩ふ由、さあらば一先古鄕へ、歸りて母の介抱なし、全快なしたる其後に、跡より伊勢へ送らんと、事急なれば御身にも、逢はせず暇を取せたり。磯菜々々」と呼出し、「我は是より引離れ、母の便は其方のみ、おとなしやかに仕へよや。頓て逢はん」ト手をとらへ、さも懷しげに又暫し、休らひ給へば明けぬとの、鐘も幽に告渡り、風冷やかに打

吹きて、折知り顔の松蟲の、聲さへ今は泣嗄し、物思ふ事なき身にも、哀は秋にあるものを、まして阿古木は種々に、心も惑ひ氣も惑ひ、浮世の中の悲しさを、我身ひとつに集めたる、心地せられて物さへ言はず、落つる涙を我子に恥ぢ、「秋の哀は知るものを、泣く音な添へそ松蟲」ト小唄謠うて紛らすは、聲打あげて泣くよりも、哀を添へて光氏も、聞きなしながらほのぼのと、明行く空もはしたなく、しをり出づれば野の宮の、注連の内なる細路にて、小笹茅萱のいと露けし。阿古木は心弱々と、名殘あはれと眺め遣る。植渡したる弱竹も、むら〳〵立ちし秋霧に、隔てて能くもわからねど、簾を漏れし月影に、隈なく見えし御姿は、まだ目に殘りて忘られず。實に若き人々の、君ゆゑ思はぬ身の過失、夫もさら〳〵無理ならず、かく嬋妍な御有樣、見捨てて別れ遙々と、伊勢路へ行くも娘のため、人の絆は子にまさる、物はあらじとよく〳〵と、心の中の口說事、そのまゝ閨へ立戻り、枕も上げず打臥しけり。

光氏は立戻る、風情にもてなし小戻して、かの野の宮の柴垣の、内を窺ひ透し見て、「其所に居るのは空衣か。いつの間にかはわが刀の、下緒に結び置きたる文、人には包む大事なれば、此所にて言はんと書きたるは、覺ある御身の手跡、夫ゆゑ道より歸りしが、川次郎が事ならば、聞くに及ばぬ捨置け」ト立行き給ふ袖をひかへ、「御歸るさを危しと、弟も申上げたれど、彼等ごときは物ならずと、仰ありしは御道理ゆゑ、其事にては侍らず。思ひがけぬは宵の程、君の導きさせ申せし、岩根といへるかの老女は、川次郎が實の母、斯樣々々の事どもにて、不思議に親子の名乘合ひ、早百合に申上げたる通り、妾は閨を辷り出で、間所も無き假住なれば、他に隱れん隈も無く、屏風の後に身を寄せて、まどろまんとする處へ、忍んで來たる男あり、川次郎とは知らざれども、しどけなき寢姿を、見らるゝがいとうるさく、此上著を引掛けながら、裏口より逃出し、帶引締めて立戻れば、枝折の門のはつたりと、たちたるはづみに掛金の、内より懸りて押せども開かず、人を呼ばんも敲かんも、君を忍ばせ參らせたれば、聞えを憚りうつかりと、彳む中に夜は更ける、たとへ神でも佛でも、女は女だちとやら、明日まで此所を貸し給へと、辨財天の祠へ入り、唐戸を締めて置いたれば、人のありとは氣もつかず、富徽樣に仕へて居る、白糸は其方の姊、是からは斯く〳〵と、諜し合せて親子は出奔。帶を證據に言立てられ、さがなき御名を立つるのが、空怖しい」ト言ひさして、泣くか恥づるか顔に袖、打覆へば光氏も、あはれと思へどわざと打笑み、「さな思ひそよ讒言は、泥と砂との如くにて、一度は濁すとも、元より淸き水なれば、潔き名の終には流れん。さらば」ト言捨て二足三足、又立戻つて聲を低くし、「岩根とやらんが殘したる、箱なんどの其内に、若し白糸より送りたる、文のあら

ば取集め、密に我に與へよ」ト是よりも亦彼方此方、千ぐさの花を眺めつゝ、嵯峨へ歸らせ給ひければ、かの西の亭の方、人多く立集ひ、常よりもいと賑はし。是は此頃紫に、かねを含ませ髪を直し、遊佐河原之進國助が、娘なるよし表立ち、室町へ披露に及び、國助初めて當館へ、來りし故のざゝめきなり。我子といへるは私にて、今は主人の内君なれば、國助殊に行儀を正し、御目見えにとて恐る〳〵、末坐へ出でてかしこまる。紫の上しとやかに、「國助近う」と宣ふも、自然と其威備つて、はつとばかりに蹲り、やう〳〵少し頭を擡げ、打見上ぐればむかしに變り、はや大人びてその氣高さ、更に娘と思はれず。彼方も父の床しさに、瞼濡るれば此方は猶、膝に涙の玉なして、久しぶりなる對面に、心の中の嬉しさは、筆に盡さん樣もなし。實に紫の幸は、世の人々もめで聞え、取分けて言の葉は、小玉のぬしが數珠を放たず、御佛を祈られたる、その驗ならんとて、喜ぶ中に國助の、本妻はひと目だに、まだ紫を見ざれども、妬しと思ひし澤菊の、子と聞くからにいとをしとも、思はず過ぎしが光氏の、内君よとて人々に、傅かるゝ身と彼はなりぬ、己が腹に擧けし子の、夫には劣るを口惜しと、思へば心の安からず。夫は喜び妻は恨む、繪草紙にわざと設け、作りし樣なる有樣なり。

斯く此殿のときめくに、引かへて赤松の、館は兎角物寂し。二葉の上の在りしに變らず、光氏は行通ひ、腰元女に至るまで、むかしより猶濃やかに、言葉を懸け情をかけ、夕霧丸を勞りつつ、信やかに見え給ふを、世に有難き御心と、政則夫婦は打喜び、光氏に仕ふる事、今も同じ樣ながら、その初娘二葉を、義尙の內君にと、富徽の前の催しありしを、聞入れずして光氏に、參らせたれば其頃より、富徽の前は政則を、宜しうも聞え給はず、その二葉は失せ義正は、東山に移りしかば、室町へ出仕の度々、心に染まぬ事のみ多く、病と言立て此程は、籠り勝にて居たりけり。

阿古木の許へ光氏より、常より文もこまやかに、衣類は更なり旅の調度、何くれと珍らしき、さまなるを贈れども、阿古木は何とも夫をば思はず、只心憂き名を流し、淺ましき身の有樣を、今始めたらん樣に、下りの近くなる儘に、起臥歎くかたはらに、磯菜は心いと若く、音にのみ聞く間の山、お杉お玉の小唄節、天照神の宮廻り、いつ行く事かと思ひしに、その出立の定まるを、嬉しと思ふも哀れなり。既に其日になりければ、喜代之助君吉等は、霧を拂つて朝疾く立ち、空衣は阿古木と打連れ、日の高く昇りて後、心靜に出立つ折、光氏より例の文あり、磯菜が樣も床しければ、參らまほしう思へども、若し御身との中らひを、知る人ありて彼方には、思ひ離れて旅立つを、打捨てられし身も恥ぢず、見送に出でたるなど、笑はれんかとやゝ、

に、思止り侍るなど、盡せぬ事ども書續けつ、見るもなか〳〵涙なれば、そのまゝ袖に隱しけり。

十五編下

阿古木の母の渦浪の、亡骸を納めしは、桂川の邊なる、何某院にてありければ、空衣に其由語り、道を廻りて彼所に詣で、麗はしう仕立てたる、磯菜を墓の前に誘ひ、「是はあなたの孫なれど、身の儘ならざる住居ゆゑ、今まで顏をも見せ申さず、お言葉かけて給はれ」ト打泣けば磯菜も共に、手を合せつゝしほたれぬ。光氏より送の者ども、出立ち給ふを待付けて、門前にみち〳〵たれば、往來の人も何事ぞと、立止まる樣子を見遣り、空衣は種々に、二人を勸め言ひこしらへ、やう〳〵にして三條の、橋まで來りし其頃は、日もはや旣に暮れんとす。又惟吉を使として、光氏よりの音信あり、阿古木は取つて披き見れば、

　夕霧に振捨てゆくか鈴鹿川八十瀨の波を越行かば、流石につれなき袖も濡れん。

別の印に磯菜へとて、小き櫛の文箱にあり。空もいと暗うなり、物騷がしき程なれば、其儘に過行きつ。又の日にあふ坂の、關の彼方の宿より、返あるを光氏は、振拔きて見給ふに、

　伊勢までは誰音づれん秋の風

繕ひもなく書きたれど、手はよしありて媚めきたり。夫に引かへ執念の深きに倦じて磯菜の父は、わが兄なりとの根無事、取繕ひて下しゝが、思へば不便の身の末や」ト獨ごちつゝ紫を、住ませし西の亭へも行かず、物淋し氣に眺め居たり。ましてや旅の空はいかに、心づくしなる事多かりなん。

紫は光氏の、雲林院に留まりて、文の便のあるばかり、又御心の亂れかと、いと覺束なく思ひしに、父國助の來りし其日、光氏やう〳〵館に歸り、常より殊にしめやかに、語り聞え給ひければ、やう〳〵心も解けたるが、又かの阿古木の出立の、事に紛れて昨日今日、音信も絕えければ、御心惡うは在せぬかと、東の住居へ言の葉を、使に走らせ紫は、心も靜ならざれば、琵琶琴なんどの遊もせず、つく〴〵眺めて居給ふ處へ、言の葉は紅葉の枝、携へ持ちて立歸り、「我君樣の仰には、尋ねの如く昨日より、風邪の心地か肌寒う、引籠りては居るなれど、案ずる程な事はない。雲林院へ逗留して、少し見ぬ間に思ひなしか、紫は成人して、打鎭りて重々しく、猶婀娜になつた樣な。風に亂るゝ蜘の糸と、返しの發句の心憎さ、何事を敎へても、覺の宜い性ぢやと、お噂を遊ばして、夫は〳〵殊ない御機嫌。又この紅葉は先つ方、雲林院より山づとゝて、贈られたるが行きて見し、折とは變りて僅の中に、猶美しうなつたのは、誰やらに似て居れば、闇の錦に我ひとり、眺めんよりはあなたにも、御目に掛けよと御意遊ばし、そして何やら此枝に」ト差出すを取上ぐる、手もさながらに焦るゝばかり、實にいみじき枝どもなれば、庭の紅葉を手折らせて、押競べて見給ふに、山のは殊に染增しける、露の心も見過し難う、不圖目のとまるに又例の、いさゝかなる文のあり、いま言の葉が此枝にと、敎へしは是ならんと、紫は手づからとき、夫婦の中は隱すべき、事にもあらねばそれ讀めと、指圖に小辨は押披き、つく〴〵と打見るに、筆の運も言葉の續も、子供の樣に拾ひ書、「此程は父上に御逢ひなされ、御喜はかぎりもあるまじ。御土產には人形か、若し犬張子に侍ると、手荒には打投げ給ひそ。雀の子なら逃さぬ樣、犬吉に言付け給へ。おむづかるのが笑止に候。目出度ゝし。

は續かぬ樣な」ト聞くよりはつと紅葉の色、顏にうつりて紫は、「何事も思遣、深く渡らせ給ひながら、折々は此樣な、人の嫌がるおいたづら、いつまでも子供ぢやと、思召す御心の、絕え給はぬのが恥かしい。召使ふ女子どもの、思ふ手前もあるものを」ト紅葉の枝を取上げて、うちやらんと爲たりしが、はしたなしとや思ひけん、瓶に插させて緣側の、柱の下へ押遣らせつ、

其事は何とも言はず、父國助の身の上を、打頼める樣に聞え、只すぐよかなる返ばかり、光氏へ送りけり。

富徽の前は桂樹が、佛門に入りたるを、いと憂き事に思ひ給ひ、「青葉の館に居る故に、さる我儘の事もすなる、我許に引取り置かば、似合はぬ數珠を持たせはせじ。」此方へ呼べと宣ひて、富徽の前の此頃住む、梅の局と名附けたる、座敷の奧に是も亦、その薰にて名を呼ぶか匂の局と言慣はし、久しく人も住まざれば、塵に埋れし部屋のあり、此所をしらつはせ、桂樹を招迎へ、腰元婢數知らず、附置かせ給ひつゝ、手道具衣類に至るまで、自らのを分ち與へ、やんごとなく待なすにぞ、かの埋れたりつるも、晴々しき座敷となり、今めかしう華やぎて、見ゆれど兎角桂樹が、心の中にはさいつ年、花の宴にて散過ぎし、其人再び魂の、此世に通ひ君に添ひ、思ひの外なる事どもを、言ひたる事を忘れ難う、歎くと知らぬか光氏は、夫より度々文を送り、人傳に言寄るを、怖しくも悲しくも、此事を何卒して、思止らせ奉らんと、朝夕佛に願へども、富徽の前を憚りて、心の中に念ずるのみ、聲をあげて經をば讀まず。そも〳〵多くの女を集ひ、桂樹に冊かせ、人柄好くとりなして、富徽の前の慨むは、義尙既に去る年、一色郡領持廉の、娘立田を迎取り、内君は定まりけれども、その桂樹を側室となし、男の子を擧けなば、夫も是も血筋を以て、家を治めん爲にして、そのむかし石堂と、契りし事は知り給はず、朧月夜に只一度、かの光氏と立ちたる浮名を、言止ませんとて種々に、心を盡し給ふ中、その歲も暮果てぬ。春まだ若き頃よりして、桂樹は瘧に、久しう患みたりけるが、禁厭なんど心よく、せんとて暫し父の館へ、歸りたき由願ひければ、富徽の前はこれを許し、心知りたる腰元女を、多く添へて琵琶之助が、住居へある日送りけり。

光氏例の珍らしき、隙なるを聞付けて、さる年雨夜に石堂の、物語にて青葉の館の、忍門は能く知りつ、日暮れて後に嵯峨を立出で、駕籠は後より釣らせながら、其身は衣服も殊更窶し、忍びの徒路靜やかに、彼所へ行きて門をおとなひ、「此頃水原といふ老女、富徽の前より桂樹に、附けられて此所に在りとか、さあらば語ふ事のあり、對面せん」ト言入るれば、水原はその由傳聞き、訝しながら立出でつ、夫と見るより大に驚き、「何として當館の、忍門を知召し、是まで來らせ給ひし」ト、言ふに光氏につこと笑み、「まづ其事は後にて言はん。我も一年瘧に、患みたる事のあり、思ひの外に苦しきものぞ、身につまされて桂樹の、有樣の心元なく、密に今宵來りしなり。樣子はいかに」ト問ひ給へば、水原ははつと頭を下げ、「此程は御病氣も、すこし怠り給ひぬれば、富徽樣誰々も、嬉しと思召したるが、又一昨日より打返し、二度三度の

御患。只今は御機嫌能う、物語して在すれど、たとはゞ本をお讀みなされ、怖しとか悲しとか、御心が夫に移ると、御顏の色が忽ち變り、おさむけだちて幾重か夜著を、襲ねて召してもお慄の、止らぬのは只事ならずと、五壇とやらの御修法を、お始めなされて琵琶之助は、物忌して居られます」ト聞いて光氏打點き、「五壇といふは金剛夜叉、軍荼利、さては降三世、又大威德明王に、中央不動の法ならん、それ修するより某が逢ひだにすれば瘧は落ちる、氣遣すな」ト入らんとする、袖を水原は引止め、「花の宴のあくる朝、君の扇を桂樹さまが、持つておいで遊ばしたを、御目にとまつて富徽樣、竝々ならぬ御腹立、要もぬけてばら〱と、なつたる事は其砌、申上げたをあなたには、もう御忘れなされてか。是へ渡らせ給ひし事、富徽樣のお耳に入らば、御身の爲も惡しからん、御見舞の趣は、折を見合せ私が、桂樹樣へ申します。はや〱御還りなされませ」ト言へど光氏聞入れず、「母花桐には五歳で別れ、富徽の前の養ひにて、ひととなりたる某なれば、此方に隔は無けれども、彼方は兎につけ角につけ、妬しと思し詰めたる事ども、人も知れば我も知る、その報をせんとてなり。下樣の言葉に言はば、憎まるゝ意趣返し、娘の如く勞り給ふ、桂樹と忍び逢ひ、わざと御腹を立たするのぢや、此身の爲にならぬも承知。五壇の修法に琵琶之助、愼み居る隙こそさいはひ、案内をせよ」ト振切る袂、水原は縋りて猶放さず、「御心と御言葉とは、いつでもあなたは裏表、色に溺れて道を背く、御性で無い事は、能う存じて居ります。是にも何ぞ深い樣子の、御座つての事ならば、無理にお止めは申しませぬ。さりながら室町より、お附の女も多ければ、私一人の才覺では、どうもお逢はせ申しにくい。はて誰ぞを」ト打案じ、頓て一人の腰元女、まだいと若きを呼出し、「是は糸路と申しまして、君の御目を懸け給ひて、今宵も御供に連れられし、惟吉が妻の妹、この館に去年から、勤めて居るこそさいはひなれば、委細は是に申して」ト、打さゝやけばまだ年は、足らはぬながらいと賢しく、目立たぬ樣に築山の、燈籠を持て來り、この燈火をしるべにと、糸路は邊へ心を配り、やう〱にして光氏を、紛らはして入れたりけり。人目も繁く端近なるを、空怖ろしう思ひながら、襖の陰に光氏は、立隱れて桂樹が、體を密に窺ひ見るに、年は二十を越えたれど、目元すゞしく眉匂ひ、都雅なる生なれば、未だ盛りに賑はしき、化粧したりし其人の、少し惱みて瘦々に、なりたる程のいとをかしう、重々しき方にはあらねど、媚かしう若びたる、姿は我さへ見まほしきに、かの石堂か通馴れ、嫉妬深きはうるさけれど、その顏ばせは忘れ難しと、言ひたるも實に道理ぞと、心に思ひ居たりけり。水原はわざと光氏と、引別れて廓下を廻り、桂樹の側へ來り、お藥お粥それかれの、用に託

け傍の、腰元どもを遠避けて、「昨日には引かへて、お顔持の今日の宜さ、その御樣子ではすらく〳〵と、御本腹遊ばす」ト、力を添へれば機嫌能く、「怖しき事悲しき事、夫をさへ忘れて居ると、さまでせつない事は無い。兎角病は苦にせずに、紛れて居るが宜いと聞き、晝は木草を眺れど、まだ春寒き夜の風、身に當りては毒なりとて、垂籠めて居る故に、いつも〳〵日が暮れると、心細うなつて來る。今宵も月は出たであらう、秋の最中の冴えたより、霞籠めたが私は好。どうぞ風に當らぬ樣に、空を眺むる仕樣があらば、敎へてたべ」ト宣ふ此方に、打咳くは男の聲、「如く物は無き朧月、いざ見給へ」ト屛風の上へ、差翳しゝは楊弓の、弓もて去る年射返したる、月を描きしわが扇。思ひがけねば桂樹は、夢の樣にぞ打まもる。光氏屛風掻遣りて、懷しげに打まもり、「室町の細殿にて、思はず逢見し其時は、しかも盛りの夢見草、眠るとも無く打臥して、我は前後を更に知らず、只いたづらに起別れ、これ此扇とわが扇、取換へたるを見咎られ、覺無き名を流されて、今は言解く言葉も無し。いざ給へ寢て語らん、駕籠も釣らせて來りしぞ。木草の花を眺むるにも、此所より嵯峨は便能し。とく〳〵用意」ト宣へば、桂樹はいと悲しく「妾は浮世を捨果てて、口に稱名手には數珠、近きに尼になり侍る。免させ給へ」トばかりにて、其後言葉も涙にくれ、例の惱の胸苦しく其所へかつぱと臥轉ぶ。水原糸路は此所を、少じ退き居たりしが、斯くと見るよりあわて惑ひ、種々に介抱なし、兎角扱ひ聞ゆれど、光氏は此所を出でず、憂し辛しと思ひたる、事の限りを歎つにぞ、桂樹いよ〳〵惱まさり、其氣色著ければ、人々も打驚き、お湯よ藥と立騷ぐ、腰元どもに光氏を、見せじと糸路は襖を立切り、萬の道具を納め置く、塗籠の戸の開きしを幸ひ、これへと押入れまゐらすれば、我にもあらで光氏は、息を呑んで隱るゝにぞ、心安しとさりげなき、風情に糸路は桂樹の、傍へ立歸れば、脱置き給ひし羽織のあり、これ見られてはむづかしと、振の袖にてやうやう隱し、かの塗籠へ打込みつ、胸撫下して又元の、所へ戻りて「御心地は、いかに」ト問ひつゝ不圖見れば、火影にきらめく金作の、御差添は桂樹の、褥の側に猶殘れり。是を隱さん暇も無く、鼻紙臺の袱紗を取り、打覆ひなどする中に、腰元より此由聞き、琵琶之助も此方へ來り、桂樹が樣子を見、「こは此程の瘧にあらず、幼き時に蟲を患ひ、伽する者が心つかず、怖ろしき事悲しき事、言出づるを聞くと其儘、かくの如くにありけるが、又その病の發りしなるべし。何をか彼に言聞せし。それ醫師を喚出せ。加持の僧をも請待せん。早く人を走らせよ」ト、兎角罵り立騷ぐを、光氏は塗籠にて、いと〳〵わびしと聞き居たるが、辛うじて夜明くる程に、桂樹は惱の怠り、かく光氏が塗籠に、籠りて在すは思ひも懸けず、水原糸路も此事を、若し知り

給はど御惱の、妨ならんと包みしかば、桂樹は心安く、顔を洗ひ口を嗽ぎ、褥の上に直るにぞ、御心能きならんとて、腰元どもは其所此所の、物の陰に引退き、琵琶之助も此所よりは、隔てし居間に戻りつゝ、桂樹の傍は、人少なになりければ、いかに詐り此隙に、君を出し奉らん、御面影を見給ばど、又御惱の發らんかと、糸路水原は打さゝやき、心を配れど光氏は、猶言漏しゝ事あれば、歸る氣色は更に無く、かの塗籠の戸の細めに、開きたるをやをら押開け屏風の狹間に入り給ふ。とは知らずして琵琶之助、硯の蓋へ菓物を、盛りたるを自ら持ち、再び娘の閨へ來り「女房司はいつぞやより、御身の病を苦に病みて、加持よ祈禱と毎日々々、信心にのみ明し暮し、昨日も日暮に淸水へ、參籠なして家に在らず、この曉に歸りしが、又打返して惱みしと、語らばいよ〳〵苦や增さんと、包み隱して置きつれば、おしつけ是へ來るとも、腰元どもも心得て、必ず沙汰する事なかれ。未だ粥もまゐらぬ由、常より好むこの果物、せめては是を」ト差置きしが、不圖光氏が差添の、覆ひし袱紗を洩出でしに、目を止めて心に驚き、水原を初め室町より、桂樹に附置かるゝ、女を殘らず呼集め、「昨夜も既に言ひつる如く、胸を痛めて打惱むは、幼き時より彼が癖、物密になさゞれば、又その病の發するなり。是はあまりに人多し、御身等は暫しの間、司の方へ來るべし。糸路それかれ止りて、能く其間に座敷を拂ひ、塵無き樣にして置け」ト光氏君の此邊に、忍び給ふを推量し、歸し申せの言葉の謎、解けても水原は我一人、止らんとも言ひ難く、琵琶之助の後に跟き、皆打連れて行く樣子。光氏は聞すまし、我をば憎しと思はんが、我子に仇なる名を立てじと、胸を摩りてそしらぬ顔、親の慈悲ほど有難き、物はあらじと思ふにも、淚は落ちて桂樹を、屏風の際より打見れば、まだ苦しげなる風情にて、父の手づから据置きし、かの果物の硯蓋、いと懷しき樣なるには、心も止めず世の中を、思ひ惱めるその氣色、哀れと思へば心も惑ひ、暫し躊躇ひ居たりしが、いよいよ後悔懺悔して、實の貞女になりつるか、試さん爲にてありしかば、屏風の中に窺ひ寄り、上に端折りし桂樹の、小袖の褄を引ならせば、見かへらねども光氏が、常に好みて炷しめし、匂もそれと著じるく、まだ此所に在せしかと、その淺ましさ怖しさ、直に上著を辷らかし、ゐざり退かんとしたりしが、生憎に笄の、襟に纏ひて拔遣らず、是も宿世に定まりし、身の因果かと心憂く、只ひれふして居たりしかば、光氏猶も撓みなく、心亂れし樣にもてなし、「包むとすれど我此所へ、忍びし事は人も知る、只いたづらに歸りなば、何面目に人々と、重ねて面の合さるべき」ト、萬の事を泣く〳〵に、恨み給へる其中に、桂樹は身を搯拔け、「何を申すも此惱、本復なしたる其上では、御宮仕は此方より、願うてなりと」ト言ひながら、側にありし光

氏の、差添を取上げて、抜かんとせしが顔色變り、手より礑と取落し、身中慄うて齒の根も合はず。「えゝ潔く自害して、事の趣聞えんと、思ひの外に折惡しく、死ぬも死なれぬ此惱」ト、なかば絶入る有樣に、糸路其外腰元ども、「昨日は影もおさしなされず、御機嫌の能かりしが、一昨日よりも御樣子が、惡い樣な」ト立騒ぎ、夜著を打著せ脇息を、押直しなどするを、光氏は押止め、桂樹の顔屹度眺め、「我にわりなく言寄られ、せん方盡きて自害の覺悟、天晴貞女それにてこそ、琵琶之助が娘なれ。瘧の病は思ひも懸けず、襟元より水を注がれ、又耳近く矢響の、音なんどを聞く時は、忽ち落つる事のあり、これ打驚くそのはずみに、氣を轉ずるが故なるべし。さらば御身を驚かせ、試ん」とて表に向ひ、「其品是へ」ト宣へば、はつと答へて何かは知らず、錦の袋を捧げ持ち、しづ〴〵と入來るを、桂樹ふつと顔を上げ、見れば石堂馬之丞。こはそもいかにと我をも忘れ、立てば身中も健かに、「さむけも醒めて心さへ、淸しくなりしは此身の病、さては本復なしたるか。夫はともあれあなたはどうして、此世においで遊ばした。思ふ餘りの戀いさかひ、夫が高じて飽きもせず、飽かれもせぬに中絶えて、五年以前夕立の、晴間を待ちて思はずも、加茂の社家にて一夜さ明し、歸りは最早しのゝめ頃、糺河原を通りし折、誰とは知らず石堂を、討止めたりと言ふのを聞き、駕籠より飛んで出たれど、つひ其者も取逃し、敵の詮議の手懸も、ないて暮して其事を、忘るゝとにはあらねども、富徽樣にいろ〳〵と、勸められて恥かしい、花の宴の其夜が夢か、今日が夢か」ト口說き立て、只茫然となし居たり。光氏は打點き、「御身の瘧の落ちたるは、打驚きたるのみにもあらず、石堂に持せしは、勅筆の短冊にて、我も去る年瘧に、苦しみし時奇特を得たり」ト言懸けて此方を見返り、「糸路は皆の者を連れ、此所を遠ざけよ。桂樹近う」ト聲を潜め、「馬之丞が存命を、さぞ不審に思ふべし、その仔細を語りて聞かせん。我故ありて敵の密書を、多く得たりし事のあり、夫を見れば石堂が、其以前召抱へし、侍岸高頓五郎、草履取の馬刀助二人は、豫て謀反の萠ある、山名よりのまはし者、この光氏が近臣の、家來となして入込ませ、樣子を探らん爲にてあり、其夜直に馬之丞を、嵯峨の館へ呼迎へ、云々の由を語り、糺へ使の途中より、我文を忘れしとて、かの頓五郎馬刀助二人を、途中よりして嵯峨へ歸し、紅葉の賀宴ありし時、己を討たんとなしたる曲者、其座に一人斬つて捨て、一人獄に繫がせ置きし、猫山三毛藏が首を刎ね、馬之丞の衣服を著せ、乘物の内へ押入れ、供は殘らず遠ざけて、いかにかすると某が後より彼所へつけ行きて、小陰に窺ひ聞くとも知らず、二人も其所へ立戻り、元より大事に仕ふべき、主人にもあらざる故、死骸をとくと撿めねば、實と思ひて其場より出奔せんとなしたる

時、御身も圖らず彼所へ來かゝり、石堂が最朝と聞き、悲歎の涙に暮れたる樣子、是も亦腰元婢に、止められて死骸を見ず、乘物へ押入れられ、歸り行く其時は、某御身の面體を、まだ知らざれば何者かと、惟吉に跡をつけさせ、窺ひ見れば琵琶之助が、館の小門へ忍びやかに、舁入れたりと歸つて告げつ。その昔石堂と、睦しかりし中なりとは、雨の夜さりの徒然に、馬之丞が物語、眠れるふりして聞置きたれば、さてはかの桂樹ならんと、爰に初めて知つたるなり。又馬之丞が横死の樣に、もてなしたるは敵の間者、頓五郎馬刀助を、退けん爲ばかりにあらず、伊勢の國に板畠の、殘黨ある事聞及び、人に知らさず某が、腹心の家來を彼所へ、差向けん計策なれば、馬之丞にこれを命じ、去年の秋まで度會郡の、陣屋を守らせ置いたるが、是へは仁木喜代之助を、下して密に呼返しつ。夫は差置き御身の上、富徽の前の姪なれば、兄義尙の内君にと、心懸け給ひし事は、さいつ頃より噂を聞く。言交したる其男は、はや亡人となりたればと、もしや心に思ひとり、その言葉に隨ひなば、わが詐よりして桂樹が、操をや破らせん、家臣と一旦契りし女と、知る人あらば兄をも笑はん。是に始ど當惑し、水原を密にかたらひて、兄義尙の風情にもてなし、かの細殿にて忍び逢ひ、馬之丞が亡魂の、乘移りたる體に見せ、御身の心を引き見しに、後悔面に顯れて、既に自害もすべき體、猶も樣子を探らんと、いよいよ戀慕の有樣にて、つけつ廻しつ樣子を見るに、かの夜よりして只管に、馬之丞が後世を弔ひ、髮は艶よく結ひなせども、偏に心は尼法師、一休禪師の德を慕ひ、かの水中に一物ありの、言葉をかへて賛する人は、己が心の中を知らずと、此扇を楊弓の、弓にて我に射返したる、頓悟話則に感じながら、馬之丞は目に見ぬ事、人の噂を實と思ひ、我をさへ疑はんと、わが乘物にて連來り、昨夜より人知らず、小陰に忍ばせ置きつるなり。彼も目の前貞心を、見たる上は否とも言ふまじ、琵琶之助にも言聞かせ、光氏が媒妁せん。爪繰る珠數の水晶より、心は清くなつたる桂樹、魚肉をさへ斷ちたる由、是より酒を愼みて、行末長く添遂げよ」ト、仰に兩人いちどきに、はつと御請をしたりけり。めでたし〱〱。

［柳亭伏してまうす］この光氏塗籠に、隱るゝの一條は、藤の方にあらざれば、物語の趣ならねど、愚の筆には懲惡の、意を含みて書取り難く、桂樹にかへて綴れり。さて花散里の巻は、はづかにて終り、富徽の前の讒言にて、光氏須磨へ赴き、それより明石へ移るの條おしつけて出板、御もとめのほど奉希候。

修紫田舎源氏第十六編序

楚辭に梅なし、萬葉に菊なし、昔の草雙子に序なし、源氏に蚊屋なし男色なし。お湯といふのがそれかも知らねど、祈禱まじなひばかりにて、藥を呑みたる事もなし。それよりも無いものは、繪冊子の趣向にて、第二編の序に記しゝ如く、紅葉の賀までの梗槩を、初はまうけて綴りしが、思ひの外に須磨明石の、浦まで船は漕つけたれど、作者の用心こゝになければ、得手に帆もあげがたく、綱手の繩の最ながくて、繪樣もおなじ事になり、行燈屏風脇息の、形さへ案じ盡し、東山の時代には、夢にも知らぬ砧枕、比翼茣蓙まで畫きながら、夏の床にはうちはれて、蚊屋のなきのは淋しからんと、几帳にかへて源氏に無き、蚊帳をはじめて畫かせたる、そのことわりを昔々の、草雙紙には無き序らしきものに、書つけておくにこそ。

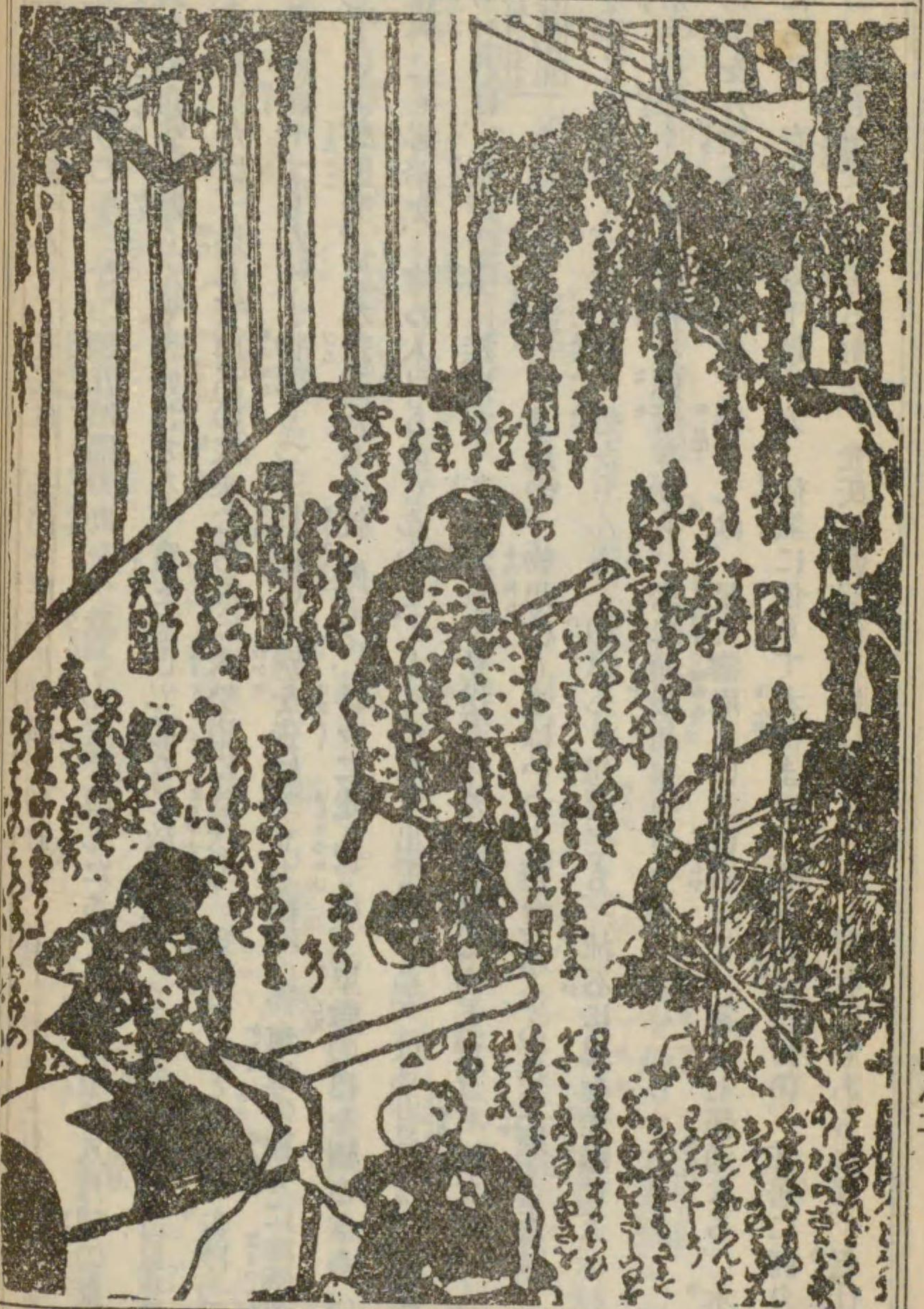
天保六年乙未春　　柳亭種彥

十六編上

暫くあつて桂樹は、面はゆげに顔を上げ、「御心配の無かりせば、操を破りて石堂殿に、何とて顔の合さるべき。仰なくとも此上は、酒をも飲まじ、悋氣もせじ、必ず見捨て給はるな」ト、人目も恥ぢず馬之丞に、取縋らんと爲したるが、何やらん不圖思ひいで、光氏の側に寄り、「これ此扇と取換へて、殘置き給ひたる、君の扇をそのあした、富徽様の見給ひて、なみ〳〵ならぬ御腹立、枕交して打解けし、中にはあらじとことわりを、言はんとすれど我身の恥、涙に暮れてあやも無く、つい其儘に過行きしが、夫より御名を立てたるが」ト言ふを光氏押止め、「仔細ありて其時の、事も詳しく聞いたるが、名を流すのは豫ての覺悟、御身心を改めて、石堂と添はんと思はゞ、この光氏を戀慕ひ、不義する體にもてなすべし。遠からず某は、都を他所に振捨てて、行方定めぬ身となれば、夫も僅の中にてあり。最前わりなく言寄られ、自害なさんとなしたる貞心、眼前見たれば石堂も、はや此上は疑ふまじ。まつ婚姻を暫く延し、我に任せよ馬之丞」ト仰にいよ〳〵恐入り、「只兎も角も宜き様に、尊意に隨ひ奉らん」ト、桂樹諸共言ひければ、いざ歸らんとて光氏は、糸路を呼びて羽織を引掛け、「事に紛れて石堂には、まだ言はざりしが去りし年、かの頓五郎馬刀助を、欺かんとて渡したる、手紙の中に八月望の夜、玉兎の鏡を稻舟へ、贈らんと書いたるを、實と思ひし體なる故、似つこらし氣の鏡を造らせ、其夜館を出しゝかば、果して山名の家來ならん、大勢道に待伏し、奪取りしと歸りて告げつ。實と思ひて祕藏やすらん」ト物語りつゝ桂樹に、別を告げて立ち給へば、垣根の彼方に棒突鳴し、火危しといふ聲聞ゆ。これ晝ながらも掟嚴しく、時々に走使の、屋敷の内を廻るなるべし。されば外にも忍路を、守る人目もあらんかと、しづ心なく出で給ひぬ。はや日のはなやかにさしたりければ、折戸の陰に桂樹が、甚う窶れて見送りたるは、似ぬ物もなき有樣なり。

以下花散里 人知れぬ心盡しに光氏の、物思はしさはいつと無き、事なめれど斯く足利の、寶には心を懸くる者多く、世の亂の近からんと、煩はしう思せども、流石に兄を差除けて、わが儘にも計らひ難く、世の成行を餘所ながら、密に窺ひ居たりけり。

千景の方を片攬より、貰受けて養ひしは、星月壽庵といふ醫者にて、家は七條通なる、木屋町の邊にあり。春の頃より千景の方、病氣に依りて本復まで、暇を賜り星月の、住居に歸りて父壽庵の、療治を受けて居る由を、光氏は傳聞き、世に知られたる醫者にもあらねば、召仕ふ人



田舎源氏
種彦作
國貞画
花散里
十六編
下冊
鶴屋壽梓

も少く、不自由にこそ在すらめ、幸ひなるかな綾泙は、かの方の妹なれば、絶えて對面あらずとも、心置はなかるべしと、看病に迯られしが、はや年も長けたる故、人の目立たん事を憚り、眉を落させ花鄕と、名をも呼換へさせ給ひぬ。然るに夏のはじめより、千景の方の惱も怠り、本復近きにあるべしと、花鄕より告越しければ、其樣の見まほしく、かつ花鄕も赤松の、館にありて中空と、呼びたる頃よりほのめきしを、あはれと思ひて糺へ迎へ、折節毎に戯れを、言交し給ひしかば、流石に忘れも果て給はず、彼家に行きて後、顏をも見せず見もせねば、恨みやせんと思ひいで、忍び難くて五月雨の、空珍らしう打はれたる、雲間に例の惟吉ばかり、供に連れてぞ出で給ひぬ。殊更に人目を包み、戸無駕籠にて道を急がせ、六條の程おはするに、葭簾垂籠めし、さゝやかなる二階の内に、能く鳴る琴を雲井に調べ、搔合せつゝ賑はしく、彈鳴す家のあり、耳止りて駕籠の垂、打揚げて見給へば、大なる柳の木の、追風に折靡くは、かの三筋町の廓にて、出口の柳の下蔭なり。又琴の音の聞えし方を、つく〴〵と見上ぐれば、これ荵屋の小座敷にて、むかしは宿りし揚屋なるを、思ひ出づれば夢の間に、程經にけりと歎息し、不圖振返るに遊女の、客を此所まできぬ〴〵に、送りて別るゝ故ならん、さらば垣と呼慣はす、垣は其儘ありながら、結ひも直さず竹も朽ちたり、ゆかりの人は無けれども、そゞろにむかし忍ばしく、打過ぎ難くて光氏は、しばし佇立む其折しも、時鳥の只一聲、啼きて渡るも此宿な、問へよと催し顏なれば、駕籠を出口に寄せさせて、墨斗の筆を取出し、

荵屋とは聞えしかど
忍ばれぬ宿の垣根やほとゝぎす

と疊紙へ走書、西の緣の端に居て、琴彈きたりしあの女に、渡して返事を取來れ」ト宣へば惟吉は、かしこまりて荵屋の、門差覗き窺ふに、若やかなる遊女の、物打語ひ居たりしが、むかしは君の御供にて、度々此所へ來りし故、聞知る聲もなしけるにぞ、衣紋直して氣色どり、打咳きて聲づくり、云々の由言入るれば、かの御文を遊女は、打披いて囁き合ひ、心得顏に入りけるが、暫くありて二階より、靜に下り來るけはいして、御かへりに侍る」ト、持出づる女あり、暖簾の陰に立隱れ、手をのみ此方へ差出せば、姿は能くも見え分ねど、遊女舞子の風俗ならず。惟吉は訝しく、思へど君には御覺の、有る事ならんと問ひもせず、其儘にて立歸り、件の返事を差上ぐれば、光氏は提灯の、火影に近く打披き、

言問ふを此所に待ちけりほとゝぎす

口の中にて吟じつゝ、「ウ、宜しく〳〵」ト卷收め、又もや夫より駕籠を早め、心ざしたる星月の

住居へ行きて案内を乞はせ、其邊をつく〴〵見廻すに、豫て推量したるが如く、人も少く閑なり。是も心の頑ましき、富徽の前をいぶせく思ひ、病に託け引籠り、居給ふならんと哀れさを、心に歎きて彳み居る。千景の方は斯くと聞き、勿體なくも何として、此所へ渡らせ給ひしかと、端近く光氏を、迎へ出でて座敷の塵、打拂はせて誘へば、此方は病の怠りし、喜びをまづ聞え、彼方は逢はで程經たる、妹を送り給はりたる、禮を述ぶるを初とし、過來し方の物語に、早くも夏の夜の更けて、廿日の月の差昇り、いとゞ木高き影どもの、其邊小暗う見え渡り、軒端に近き橘の、薫はさつと懷しく、匂ひ合ひたる千景の方の、有樣をつく〴〵見るに、年は三十路を早や越えぬ、嬋妍なりといふにはあらねど、行儀正しき立振舞、更に賤しき筋はなし。されば年頃華やかなる、御覺こそなかりしかど、既に四郎の君を擧け、懷しう語らひ給ひて、いまだに寵の衰へず、かく打揚りし人柄に、恥ぢてや兎角光氏も、口籠りつゝ花郷の、事を現に言ひかねて、まづ他事より語出で、「思ひしよりも窶れ給はず、肥立ち給ふも遠かるまじ。併し此所に在さんには、物寂しくて御惱の、障とならんされはとて、室町は騷がしゝ、住み給ふには東山に、上越す所はあるべからず。さぞ四郎正倘の、心許なく待侘びん」ト言ひつゝ扇を手まさぐり、「さて花郷に對面し、密に語らふ事のあり、いづれにもあれ人無き所を、貸し給はれ」ト聲を沈め、やう〳〵に言出づれば、千景の方はと息をつき、折惡しく花郷は、太秦の廣隆寺、藥師如來へ妾の病氣、早う本復する樣にと、立願したるが見給ふ如く、湯をひき髮をもあげたる故、その禮參に一昨日より、七日籠に行きたれば、戾るには間もあらん」ト聞いて光氏打點き、「其事豫て知つたる故、太秦の廣隆寺へ、迎の駕籠を遣りたれば、程なく是へ戾るべし。只密々の事なれば、人に知らさず打語ふ、所を才覺してたべ」ト、猶ひそめきて宣ふにぞ、千景の方は打笑ひ、「鐵漿をも含み眉をも拂ひ、いま花郷は押晴ての、御側室に在りながら、夫に逢ふをさほどまで、包み給ふぞ訝しき。夫も故ある事ならん。庭を隔てしあの湯殿は、もと茶座敷に設けしに、湯槽を造り添へたれば、おふたりは御寢なられる。それ御枕御搔卷」ト指圖をしつゝ運ばするを、光氏は押止め、「聞くべき事を聞き終れば、我も戾り花郷も、また太秦へ參る筈、燈火ばかりで餘の物は、無用なり」とて小座敷へ、移りて待てば程もなく、忍びの乘物戸口に舁寄せ、いと面はゆげに立出でしが、火影に背く光氏の、顏つれ〴〵と打まもり、むかしの事ども搔集め、思出して言葉も出でず、只さめ〴〵と打泣く時、さらば垣にて聞きたるが、此所へ慕ひて來りけん、同じ聲なる時鳥。啼きて過ぐるも哀れにて、

汝も訪ふか花散る里のほとゝぎすいかに知りてかふる聲のする

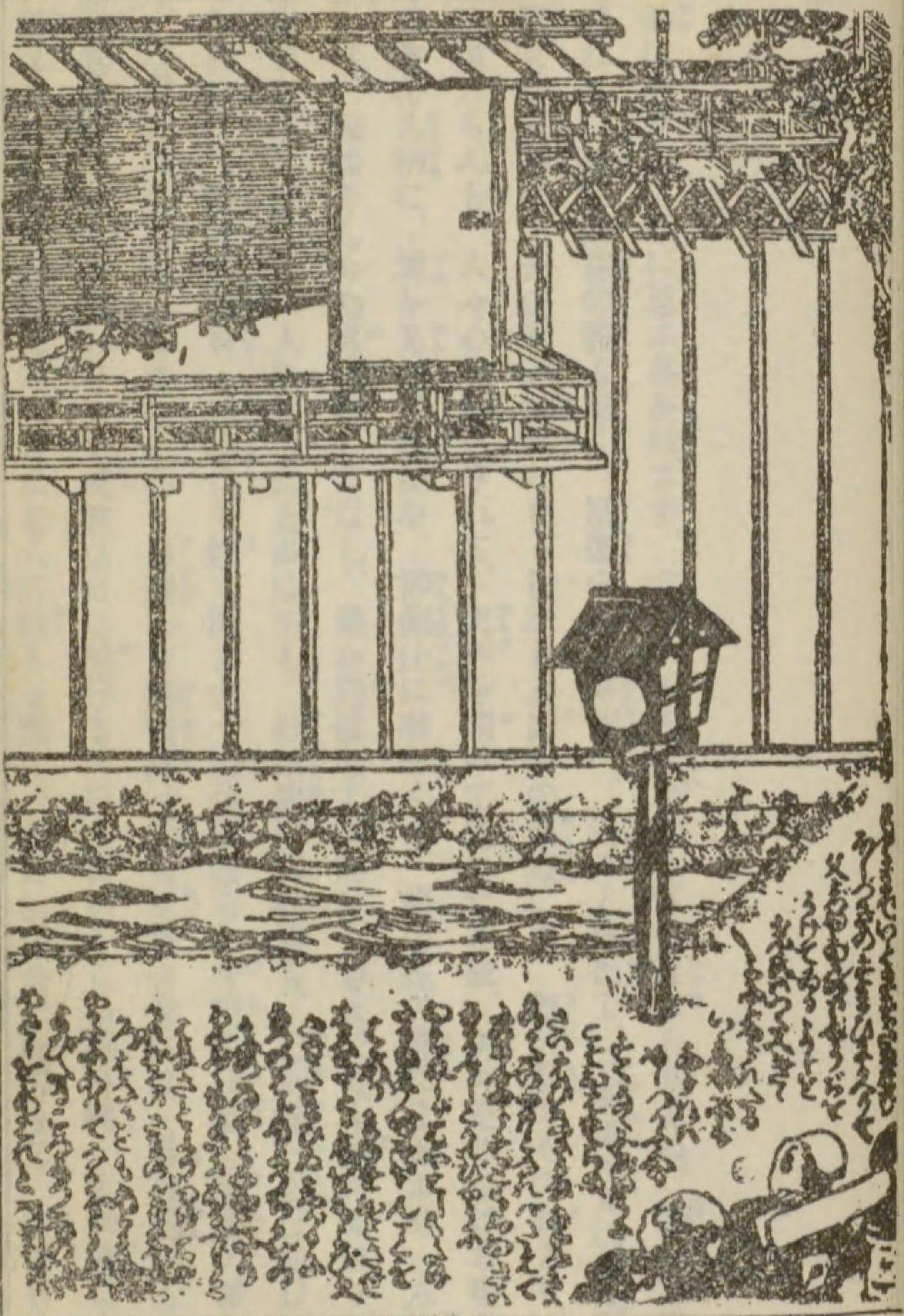
と忍びやかに光氏が、吟ずれば此方もやう／＼、袖に涙を押包み、

　橘の花とはいはじ軒のつま

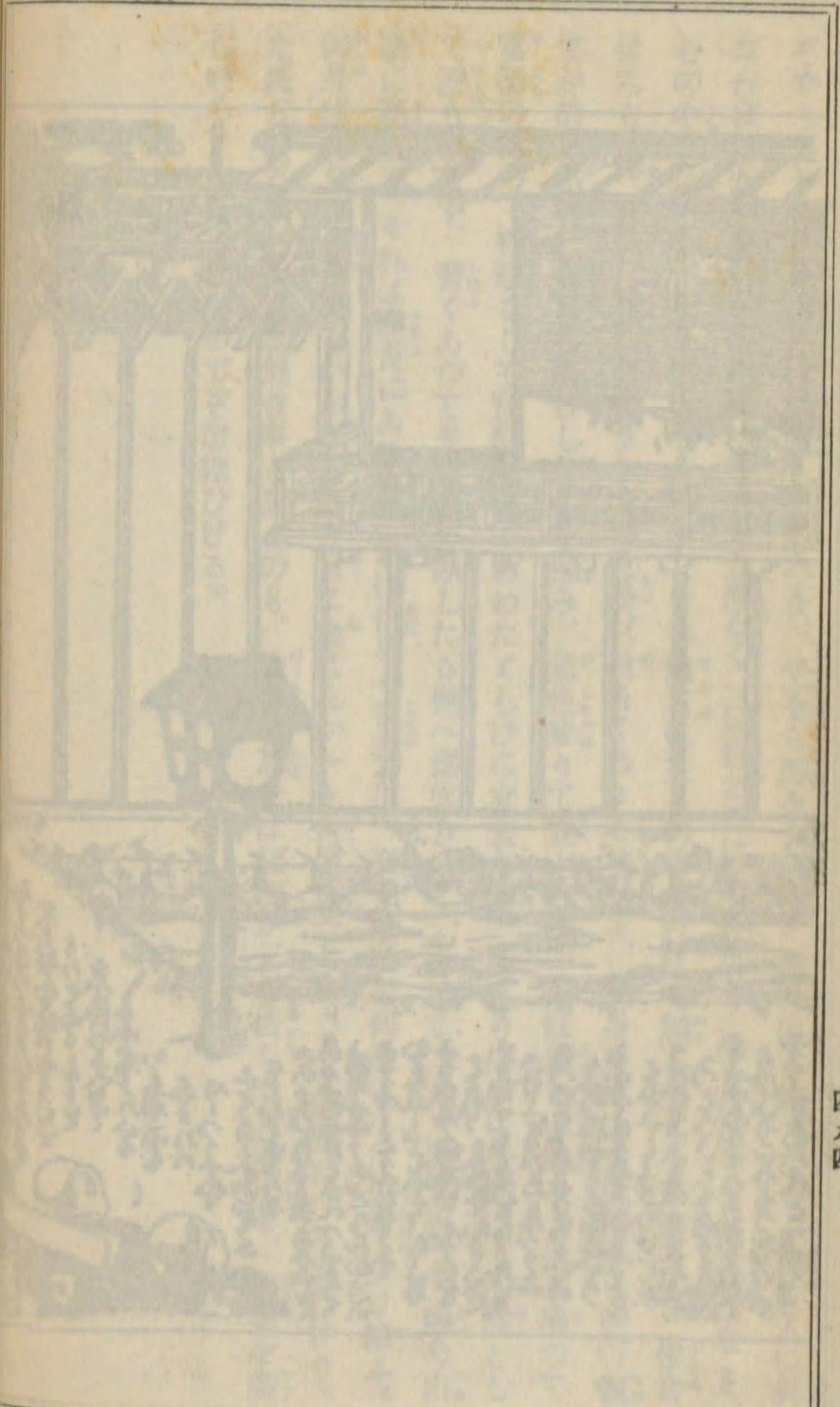
怨めし氣には聞ゆれど、いと珍らしき逢瀬には、ありし辛さも打忘れ、何やかやと光氏が、懐しく語ひ給ふも、思さぬ事にはあらざるべしと、思ひとりてかしめ／＼と、物語りつゝ夜深きに、女は又も太秦へ、男は嵯峨へと人目を憚り、別れ／＼に歸りけり。〔花散里の巻をはり〕

〔此一段は榊の巻なり〕桂樹は日に／＼肥立ち、心淸しくなりける由、富徽の前は聞き給ひ、また例の匂の局へ、呼迎へてぞ住ませける。光氏は夫も是も、心の儘に山名を謀り、都を出でん催しにや、なほ我儘に振舞ひつゝ、かの桂樹を忘れかね、わりなき樣にもてなして、心太くも匂の局へ、隙を求めて窮ひ寄り、夜もすがら歸らぬ事もあり。されども人無き其折は、戯言も宣はず、身にも覺えぬ仇し名を、何故わざと世に知らせ、給ふならんと桂樹は、怪しく思ひ且は又、富徽の前も一所に、在する座敷にありければ、夫とやしろし召さんかと、いと怖しく人知れず、心に安き間はなし。光氏は暫しの程、我に任せて置くべしと、石堂にも聞え置けば、更に憚る風情もなく、守る人多くてたはやすく、逢ひ難き女をば、いよ／＼思ひ止み難き、心癖にてあんなれと、忍び來ること度々なり。かの赤松の腰元女、糸路も共に隨ひて、此所に泊りて在りけるが、或時夜更けてほと／＼と、唐戸を音なふ者のあり、誰なるらんと押開けば、つと立入るは光氏なり。邊の人に知らさじと、心を配りてやう／＼と、奥の一間へ誘ひ參らせ、お次へそつと立戻れば、傍に立つ者のあり。さては樣子を見たりしかと、打驚きつゝつら／＼と、顔差覗くに去りし夜も、仲立したる水原なれば、胸撫下して側に寄り、「朝な夕なに御顔を見てさへ飽かぬ桂樹樣、ましてや人の目を忍び、いと珍らしき御對面、引手數多の光氏樣も、仇には思召すまい」ト、打さゝやくを水原は押止め、「お前は詳しく知るまいが、此頃御出は度々ゆゑ、その氣色を知る女中がた、無いでは無けれど斯う／＼と、富徽樣へ言上げなば、一方ならぬ御館の、騒にならうとそしらぬ顔、靑葉の殿は引離れ、御館においでなれば、光氏君が此局へ、渡らせ給ふといふ事は、思ひもかけぬ御樣子、壁に耳とかいふ諺、若き心にうか／＼と、口走り給ふな」ト、ひそめきあひて其外の、女は大方遠ざけつ、二人宿直をしたりしが、はや曉と思しき頃、雲恐しう立重り、雨俄に降出でて、軒に礫を打つが如く、電光は欄間に輝き、あなやと見る間に耳元へ、落つるばかりに神鳴騒ぎ、腰元どもは怖惑ひ、解けたる帶を結びもあへず、寢惚顔にて出づるもあり、耳を塞ぎ目を瞑り、或は觀音の御名を唱へ、或は天神の守を捧げ、敷居に躓き疊に辷り、此方彼方の人目も繁く、はて／＼はひとつに集り、皆桂樹の閨近く

押舉りて在りければ、光氏は出づるにも、出で難くて猶豫ふ間に、夜はほの〴〵と明果てぬ。なほ蚊帳のめぐりにも、人々繁く竝居たれば、さぞ我君は胸苦しく、思すならんと御心を、察しながらに糸路水原の、ふたりも更にせん術なし。かくてやう〳〵神鳴止み、雨も少し小歇みし折、琵琶之助は案内も乞はずに、つか〳〵入來れり。是は此所より廊下つゞき、富徽の前の住み給ふ、梅の局に最前より、罷出でてありけるを、かの村雨の音の紛れに、誰々も知らざるなり。容體も繕はず、輕らかに不圖唐紙を、開けたる儘にて差覗き、「さても強き神鳴よ。氷の交りて降りたりけん、雨の音の怖しさ。心地はいかに在するか。御身は元より物怖に、打惱むが癖なれば、さぞうたてくやありつらんと、思遣りては居たれども、梅の局の廊下の戸、其所此所風に吹放ち、横しぶきにて通り難く、心ならずも御前の、宿直所に明したり。糸路その外女ども、近う參りて居たるか」など言ふその氣色の、落付かず最舌早きを、光氏は物の陰より打まもり、まづ此一間へ入果てて、さて聞えても遲くもあるまじ、我子なりとて此所の局に、迎へ給ひし桂樹に、立ちながら言ふことかはと、不圖赤松正則が、打しづまりて用意深きに、琵琶之助が輕々しきを、思ひくらべて微笑まれ、猶近々と摺寄りしは、何をか言ふと口に袖、打覆ひてぞ聞き居たる。桂樹は思ひもかけぬ、父の來たるに胸轟き、氣色や見んと最わびしう、蚊帳をやをら膝行出でしが、其面の赧みたるを、琵琶之助つら〳〵眺め「さてこそ今の雷に怖れ、御身は上氣したりしな。わづかの事とて捨置く時は、それより病を引出し、物怪なんど言ふものさへ、加はる時には此春の、如くに又も患むべし、はや藥をも呑み給へ。家に歸りて祈禱を言付け、札守をば送るべし」ト言ふ中に不圖桂樹の、裳に纏り薄皂の、緞子の帶の蚊帳より、引出でたるを見つけつゝ、怪しと思へば又此方に、小菊の鼻紙引散し、手習むだ書したる反古ども、屏風の下に落ちたりけり。夫も是も心得ぬ、物にこそあんなれと、打驚かれて「やよ桂樹、夫は御身の手にあらず、我に取りて見せ給へ、誰が筆ずさみか讀みて見ん」ト氣色變りて言ひけるにぞ、はつと驚き桂樹は、振返り見て我も見つけ、「夫は」トばかりにうろ〳〵と、紛らはすべき方も無く、父の不審を立てしに違はず、光氏の筆なりければ、いかゞ答へ聞えんと、我にもあらぬ心地して、身は冷汗にしとゞ濡れ、差俯いて言葉なし。かゝる折には子ながらも、さぞ恥かしとや思はんと、思ひ量りて打しづめ、爲すべき樣もあるべきが、琵琶之助は性急の生と思しくのどやかに、事を濟さん氣色は無く、子をいとほしむその餘り、子に疵つくるといふ事は、思ひも廻さず桂樹を、押除けて彼の反古を、取上げながら蚊帳の内を、つら〳〵と見入れければ、しどけなき姿にて、つゝましき樣も無く、添臥したる男もあり、今



ぞやう〳〵琵琶之助が、差覗くに心づき、やをら顔を引隱し、紛らはし給へども、匂も人に異なれば、かの轟きし雷の、光よりも著るく、琵琶之助は夫と知り、あら目覺しき振舞かなと、心の中に憤り、いと淺ましとは思へども、流石に主人の事なれば、顔と顔とを差向けて、恨言はんも憚あり、いかにかせんと氣も惑ひ、目もくるゝ心地して、物をも言はず居たりしが、頓てかの鼻紙へ、書捨て給ひし反古を攫み、氣色變りて立上れば、娘は驚き取縋る、袖を拂つて富徽の前の、新殿さして琵琶之助、あわたゞしげに立去りぬ。あまりの事に桂樹は、茫然として涙も出でず、暫くあつて光氏の、臥したる側へ摺寄りつ、「やう〳〵人目の關を踰え、戀の山路に踏迷ふ、それは浮世にある習、君は仇めく言葉だに、交し給はで何故に、人に疑受け給ふ。御身ばかりか妾まで、いかなる憂き目に逢はんか」ト、口說立て〳〵、心地死ぬべく思ひけり。光氏もいとほしう、益無き事と思ふのも、道理と思せば桂樹が、心苦しき其氣色を、言葉を盡しいろ〳〵と、言慰めてぞ居給ひける。



十六編下

琵琶之助は何事も、心に思ふ事を殘さず、すら〳〵と言出づる、生付なる其上に、老いての僻の添ひければ、更に遠慮の體も無く、富徽の前の御側へ、近々と罷出で、「斯樣々々の事の候、これ御覽ぜよ此紙は、光氏君の御手なり、むかしも此所の南殿にて、櫻の宴のその夜さり、誰かは漫に這入らんと、人々心をゆるされて、唐戸を開けて置きたる故、ありそめにける事なれど、光氏君の人柄に、罪を犯して桂樹を、御側仕に奉らんと、藤の花の盛にことよせ、六條へ招き參らせ、我はそしらぬ風情にもてなし、娘を逢はせし其時は、さまで心も留め給はず、されば無き名を口さがなく、人の言ひたる事にやと、打捨置けば此春も、己が館へ忍び給ひ、病に苦しむ桂樹に、種々の戲言、物陰にて能く聞きつ、夫のみならず今朝の仕儀、家來の娘なればとて、なぐさみ物にせらるゝは、あゝ目覺しき御振舞。尤も主無き女には、忍び通ふも男の例、世に無き事にもあらざれど、光氏君は日に添ひて、いと怪しからぬ御身持、人の妻にも御文を、通はしなどして氣色ある、事など人の語るを聞く。是等は取分け先の女に、疵を付くる

のみにもあらず、わが御爲にも宜かるまじ。思遣無き業をのみ、爲出で給ふを捨置かるゝ、東山なる古御所の、思召こそ訝しけれ」ト、ゆる〳〵憂ひ聞えけれ。富徽の前は腹立たしき、氣色面に顯れて、「光氏の我儘は、今に初めぬ事にして、父君をさへ恐れねば、義尙をば猶更蔑り、さる年も赤松左衛門政則が娘の二葉、女は一人の子なる故、殊に寵愛したりしを、既に兄の室にもと、氣色ありしを知りながら、弟の身を持ちて、引除けて妻となし、又桂樹を義尙に、仕へさせんと思ひしも、細殿に紛入り、道ならぬ行は、光氏ばかりの罪にもあらじ。その仇心に誘れし、桂樹とてもいたづら者、親の役にてあるなれば、汝こそまづ咎むべけれ、夫を却つて光氏に、送らんなどと子の愛に、溺れし心の怠ゆゑ、その本意をも遂げずして、事の玆に及びしなり。朧月夜は只一夜、その穢のみならば、兎も角も言消して、義尙の側室にもと、あの如くに桂樹へ、多くの女を附置きて、人に劣らぬ樣にもてなし、身近く引付け置いたるに、浮れ心の光氏に、たらし込まれしいとほしさ。又光氏が人妻に、言寄るといふ世の噂、さもあらん〳〵」ト、頃て男女の帶二筋、腰元女に取出させ、「是はむかし光氏が、方違に託けて、忍び逢ひしと其時に、空衣が織子なる、川次郎が窺ひ寄り、その行を憎むの餘り、取隱しゝ帶にてあり。此頃もかの空衣を、伊豫の國より呼上せ、野の宮の邊に置き、折々通ふと川次郎が、密に妾へ物語。花の宴の後朝には、細殿に殘しゝ扇、この曙の村雨に、御身が見出しゝ此書捨。かゝる證のある上は、打捨て難き其上に、藤の方ともさる年より、わりなき中と言ふ事は、人も知れば我も知る。初の程は光氏を、憎める者の讒言ならんと、耳にも止めず居たりしが、春若の誕生は、如月十日餘なり、藤の方はその前年、病ありて彌生より、君の宿直をなさゞれば、噂に違はず光氏が、胤ならんも圖られず。繼子憎みと世の人に、譏るゝがうたてさに、今まで言葉に出さねど、道をも法をも辨へぬ、彼を何とて義正君は、いとほしうは思すか」ト、すぐやかにすら〳〵と、宣ひ續けたりければ、琵琶之助は恐入り、「さもあれ暫し此事は、人には洩し給ふなよ、東山への言上は、猶更の事にてあり。義尙君は御心、柔和に渡らせ給ふなれば、御言葉だに添へられなば、娘の罪は宥免ありて、召仕はるゝ事もありなん。まづ内々にて桂樹を、言懲し給へよかし。夫をも聞き侍らずは、某爲すべき樣こそあれ」ト、初の體に引換へて、さま〴〵宥め言ひなせど、富徽の前は御氣色直らず、かく桂樹と一所に、住ひて人目の隙も無きに、さまで憚る氣色見えず、入込みたるは光氏が、我を輕しめ侮るなり。さはさりながら此序に、是等の證據を御目に懸け、彼を罪に落さんには、能き便にこそあんなれと、心に思ひ廻

らすなるべし。**榊の巻をはり**

是より先に光氏は、彼所を忍出でたりしが、歸るふりして立戻り、唐戸の陰に身を潛め、待つ間程なく琵琶之助、夫とも知らずいそがしげに、走去るを光氏目早く、扇をあげて此所に〱と、打招かれて心づき、立寄つて聲を潛め、「娘の閨に忍ぶ間、まづ斯くなして富徽の前に、告げよと君の御仰、何の故かは存ぜねど、御口うつしを其儘に、申述べ候が、富徽の前の御腹立、以ての外にて御氣色の、怖しきまで見えたる故、よしなき事を聞えしと、義尙君の事を讃め、種々として御心の、和ぐ樣に言直し、罷立ちて候」ト、投首しつゝ物語れば、光氏は打笑ひ、「さもありつらん、夫にて宜し」ト、別れんとし給ひしが、又立戻りて、「桂樹にも、わが言付にて書捨の、反古を取りしといふ事は、必ず知らす事なかれ」ト、言敎へてぞ歸りける。

以下須磨の巻

富徽の前は光氏の、行みだらなりといふ、種々の證を持ち、東山へ赴きて、事の由を訴へければ、義正はその言葉を、半は疑ひ半は信じ、只何となく出仕を止め、是より館に引籠り、愼みて居るべき由、仰言のありけるにぞ、すは事成りぬと光氏は、心の中に喜びながら、只他所目には世の中を、いと煩はしくはしたなき、事のみ增るを打歎つ、樣にもてなし居たりしが　かく安閑と知らず顏、つくりて暮すその中に、猶も讒言する者ありて、もしもや遠き國の果へ、流されんも圖られず、さある時には年頃日頃、心を盡しゝ詮もなし、夫より先に我とわが、身を退かんに如くべからず。播磨の國なるかの須磨は、昔こそは人の住家も、立續きてありけれど、今は蜑の家だにも、稀々になりゆきて、里を離れ心凄ぎ、所なる由傳聞き、設けし事には在りながら、罪を犯しゝ身をもちて、人の繁くて賑はしき、住居は聞えも惡しかるべし、さればとて此都を、遠ざからんも覺束なし、明石の宗入はじめとして、西に聞えし國司、山名へ一味の者どもを、喰止めんには便宜の地、京より道も遠からず、近からずして是にます、所はあらじと心の中に、思ひ定めは定めながら、いと捨て難きは紫なり。一日二日他所に、明し暮して居る中さへ、いかにしてかと我も案じ、又紫も心細う、思ひし中を引離れ、かの宗全を討亡し、世は平かに治まりて、其後ならでは歸り來ず、さあれば是は幾年と、限りあるべき道にもあらねば、此世の別とならんも知らず、いつそ忍びて諸共にと、密に思ふ折もあれど、さる物寂しき海面の、浪風ならでは訪ふ人なき、浦曲に弱く育ちたる、女を引連れ行くとても、最つきほなくなか〳〵に　わが物思の種とやならんと、思ひ返して其事を、おろ〳〵語れば紫は、たとへ奈落の底にもあれ、後れじとこそ思ひしに、あら情なの御心やと、打出しては言はざれど、物によそへて歎ちつゝ、怨めし氣にぞ聞えける。兎角なす間に年も暮れ、又

來る春も引籠り、糺の館へ行通ふ、事も稀々なりければ、光氏をのみ打頼み、心細げに哀れなる、稲舟姫は取分けて、打歎くのも哀れにて、花鄕はじめ人知れぬ、心を碎くも多かりけり。藤の方も富徽の前の、もしや聞付け給ひなば、我身の爲も宜からじと、思へど心元なさに、忍びて文は度々あり。既に三月二十日あまり、都を離れ給はんの、催し頻りなりける時、太郎高直、光氏の御前に手をつかへ、「父正則申し候、去年より久しく籠らせ給ひ、御徒然に侍らん、罷出でてむかし今の、御物語も聞えたけれど、身の病の重きを言立て、室町へ出仕もせず、屈める腰を押伸べて、私の用事には、出歩くなど言はれんかと、差扣へて候なり。御館の守には、この高直を差置かれ、今日は空も打晴れたれば、密に御入を願ひたしと、申付けて候」ト、聞え上ぐれば點き給ひ、「我もさこそ思ひつれ」ト、其夜は隱れて赤松の、館へ渡り給ひけり。天鵞絨包の乘物の、古めきたるに女の樣にて、密に彼所へ入りたまへば、夕霧丸の乳母ども、暇も乞はずむかしより、仕へし者は取分けて、光氏君の御出を、珍らしがりて集ひ寄り、まづ御顏を見るにつけ、浮世の哀は心もとめぬ、若き人さへ世の常なきを、思ひ知られて涙に暮れ、夕霧丸は美しう、ざれ走りて光氏を、見るより頓て取縋れば、「久しく我は逢はざりしが、能くこそ忘れざりしよ」ト、膝に載せつ打ちまもり、是より猶も遠ざかる、事を思へば武士の、猛き心も失果てて、涙も忍びがたけなり。あるじ左衞門正則も、御前に罷出で、「近きに都を振捨てて、播磨へ下らせ給ふ由、たとへば天地をさかしまに、なしても思ひ懸けざる珍事、かかる歎を聞くにつけ、命長きは恥多しと、思ひ知りて候なり。あゝ世は末にも侍るかな」ト、打しほたるれば光氏は、わざと片頬に笑を含み、「夫も是も前世の、報と思へば人をも怨まじ、世に憎まるゝも我身の科、心に濁は無きなんどと、知らず顏に打過ぎて、是より多き恥を見ぬ、その先にと思立ち、世を遁れんに定めたり。言ふまでにはあらざれど、幼き者の養育を、よしなに賴入るなり」ト、事細やかに宣へば、正則猶も膝を進め、「二葉の上の御事のみ、今に悲しび候へども、たゞ此度の事に付き、若しながらへて居給はゞ、いかに歎かん夫よりも、命短く侍りし故、かゝる果敢なき夢を見ず、過往きたるもましならんと、思ひ慰む時もあり。幼き君の我々が、老いたる中に止り給ひ、月日の多く隔たらば、君を見忘れ馴睦み、給ふまじやと何よりも、夫が悲しう候」など、互に積る物語、果し無ければ光氏は、思ひ切りて暇を告げ、立上らんとし給ふを、正則は猶袂を控へ、「夜も更けぬれば逗り給ひ、二葉の上とも御別を、惜ませられて然るべし」ト、思ひこんで願ひければ、佛間へ誘ひ行くにかと、言ふに任せてそのむかし、二葉の上の住馴れし、一間へ入りて見給ふに、近頃は

いと寂しげに、打荒れたる心地して、哀れなりしが夫とは變り、銀燭を點しつれ、誰にかあらん二葉の上の、ありしに變らず粧ひし。女を多くの腰元ども、邊に居廻り傅きたり。遠目にしかと見極めねば、光氏は眉を顰め、「我もさる年言の葉と、いへる女を二葉に似せさせ、水原を一度欺きしが、その類にやあらんずらん」ト言ひつゝ立寄りかの女が　打羞らひて翳したる、袖を引除け見給へば、去年の春花郷と、名を呼換へし綾浒なり。是はと驚き正則を、かへり見給へば目をしばたゝき「彼中空とて我館に、勤めて居たる其時に、高直の側室にもと、言ひしを辭みて人知れず　君に心を懸けたるが　腹立たしさに追遣りつ、後にて人の語るを聞けば、千景の方の妹にて、夫より紀へ差置かれ、御不便を懸け給ふ由。二葉の上の世を早く、過させ給ひし其後は、かの中空がむかしの如く、せめて館に在るならば、夫に依りてとまり給ふ、事も稀にはあらんかと、むかし憎みし其者を、今は戀しく思へども、稲舟姫の御側に、置かるゝ中は呼戻さん、便も更に無かりしが、去年の春より星月の、住居へ折々行通ひ、彼所に泊る事もありと、聞いて嬉しく千景の方に、その由を申し乞ひ、今宵一夜さ借受けて、さてこそ御入を願ひしなり。今はや悴高直は、彼が名だにも打忘れ、心殘りはあるまじきが、暇を出しゝ女を呼寄せ、二葉の上と持囃すは、父正則は老に耄れ、物に狂ふと思はんかと、御留守の番を託けて、御迎に差上げつ。妻小毬は例の如く、歎に暮れて引籠り、此所へまゐらねば、御心を置かせられず、ありし二葉と思召し、一獻きこし召されて」ト、瓶子土器數々の、肴を捧げたりければ、光氏扇を顔に當て、「忍びて思ひし中なるを、いかにしてか知りたりけん、面目なし」ト言ひながら、實に親の子を思ふ、心を感じて打くつろぎ、「さあらば言葉に任せん」ト、當吉中垣そのほかの、女を多く前に集め、物語などせさせ給ひ、盃しば〳〵廻る中に、いよ〳〵夜の更けたりければ、正則はじめ人々は、皆退きてしづまりぬ。そも〳〵此花郷は、此所にてむかし光氏の、枕刀を盗取り、死なんとしたる其時に、切なる心を聞きてより、人に知らさず光氏も、あはれと思ひしものなれば、取分けて語ひ給ふを、書續けんもいとうるさし。程なく明けぬと告渡る、鐘の聲さへ打霞み、雞もしば〳〵鳴きけるにぞ、あら短夜の程やとて、光氏亂れし衣紋を正し、「播磨へ下るもはや近し、夫より前に一度は、行きて逢はんと思ひしが、正則の計ひにて、今宵對面なしたれば、心殘りの事も無し。千景の方へは其方より、よしなに傳へ候へ」ト、座を立上り給ひければ、花郷は飜れ落つる、涙見せじとゐざり出で、月を眺めて居たりしが、振返つて袂を控へ、「別は常さへ悲しきに、又の逢瀬も圖られぬ、國を隔てて山里へ、何故移らせ給ふのか。數にもあらぬ妾が身は、ともかうもならばなれ、たゞ君をのみ力草、日

陰に生出で給ひたる、稻舟樣のお歎を、想ひやられていとほし」ト、打泣く樣の哀れさに、光氏も聲曇り、「さう思ふも道理ながら、我に代りて糺の館を、みつぎなすべき其人も、心がまへをなし置きたり。あれ見よ朧に雲間より、月は出づれど影暗く、晝見し庭とも思はれず、池は廣く山は木深く、心細氣の有樣を、見るにつけてもわが移る、須磨の浦邊はいかばかり、寂しき所ならんかと、想ひやられて住馴れし、都を後に旅立たんは、心苦しゝさりながら、身の爲ばかりか世の爲に、なすとは後に顯れん。頓て目出たう對面せん」ト言ひ慰めて別れんと、し給ふ折から一人の侍、恐る〳〵御前に出で、「正則夫婦も御送に、罷出で候はんが、御門出もはや近きに、不吉の涙をこぼさんかと、差控へて御次に在り。あまり夜深き御歸り、若君樣はたわいもなく、打寢まりて在すれば、せめては御目のさむるまで」ト、聞え上ぐれば立やすらひ「さる年の秋鳥邊野に、燃えし烟を忘れかね、もしもや夫に擬ふかと、蜑の汐燒く浦見がてら、此度彼所へ下るなり。言ひたき事も數々なれど、心に餘りて言葉に盡きず、されば此儘歸りしと、小毬に申すべし。又たわい無く眠りたる、顏を熟ひ見るならば、浮世を離れがたからん、心強くも振捨てて、出行きたりと目覺めて後、言聞かせよ」ト言ひながら、かの侍をつく〴〵と、光氏は打まもり、「汝は嵯峨の館にありし、走使の名はたしか、兵藤太とか言ひし者、人

柄も卑しからねば、加茂の神事の其時に、近習の武士の足らざるゆゑ、汝を假に召加へ、手廻にて使ひしが、いよ〳〵怜しく見えたる間、とりあげて得させんと、思ひし中に暇を乞ひ、何地へか行きたるが、此館には何故」ト、問はせ給へば猶ひれふし、言葉は無くて懷中より、一通の文取出し、御手に渡せば光氏は、訝しながら讀了り、「此者は先非を悔い、心を改め候間、此度須磨の御供に、召加へ給はれと、汝に代り正則が、心を籠めたる願書、まづ其方の素性は」ト、問はれて少し面をあげ、「遊所通ひの身持惡しく、父の勘當受けたるは、まだ部屋住の中なれば、御見知はよもあらじ、某は喜代之助が、實子にて候」ト、聞いて光氏小膝を打ち、「仁木藏人良清は、汝にてありけるか。力量は人に勝れ、武藝に達し書の道にも、暗からざりしがたゞ色に、溺れし一事の過失にて、父の不興を請けたる由は、豫て噂に聞いたる故、喜代之助に夫となく、男子は幾人もてりやと、まづ試みに問ひつれども、川次郎のみなりと、すげなく答へて藏人とも、良清とも遂に一度、言出したる事も無し。一旦久離を切つたりと、義心を立拔く彼が性質、せん方無さに捨置きし」ト仰に有難涙に暮れ、「宣ふ如く言出せし、事は變ぜぬ父の氣質、夫故久しく西國に、身を隱して候ひしが、父は伊豫へ下りし由を、聞いて再び都へ出で、兵藤太と作名して、御館にやう〳〵と、走使の御奉公、折を見合せ身の上を、あからさ

まに申上げ、御側仕を願はんと、存ずる中に父の上京、顔合せては勘氣の詫の、妨ならんと思ひし故、御暇を申し乞ひ、縁を求めて當館に、潜み匿れて候」ト、事細やかに述べければ、機嫌能げに打笑みつゝ、「さいはひなるかな其方には、頼むべき用も有り。聞きもしつらん川次郎は野の宮より出奔し、山名へ身を寄せありと聞く。よしさなくとも彼奴めは、奸佞邪智のしれものにて、殊には筋目も知れざる捨子、仁木の家を續くべき者、汝ならで他になし。されば言葉に出さずとも、心の中には喜代之助も、其方の行方を尋ねて居ん。伊勢へは我より言遣るべし、直に供せよ良清」ト、立出で給ふに有明の、月いとをかしう花の木の、盛は過ぎてちらほらと、殘る梢も面白き、庭の隈々霧渡り、そこはかとなく霞みあひ、秋の哀に立まされり。御見送にと花郷も、妻戸押開け立出づるを、光氏は打まもり、前には頓てと言ひつれど、又逢ふ事はいと難しと、心に思へば顔にも顯れ、「無事で居やれ」ト只一言。物も得言はず花郷は、取縋りつゝわつと泣く。恐多しと隔つる良清。小毯はじめ女ども、はや行き給ふと他所ながら、御名殘にと端近く、障子の隙より差覗けば、霧打はれて入方の、月いと明きにきらめき合ふ、黄金作のさしぶりは、りゝしけれども淸らなる、姿に引かれて媚かしく、物思ひなる有樣は、虎狼も泣きぬべし。ましてや是は光氏が、まだ前髪の頃よりも、見初め逢馴れ睦しき、人々な

ればその歎、たとへて言はん方もなく、歸らせ給ひし其後は、皆打舉り泣合へり。

光氏は夫よりも、直に嵯峨へ歸りけるが、わが住む方の人々も、まどろまざりける氣色にて、仕へ馴れたる主君に別れ、行末いかにならんとて、世を淺ましと思へるにや、吐息つくあり泣くもあり、ところ〴〵に群居たり。御供に下るべき、近習の武士は夫々に、旅の仕度を整へんと、己が住居へ戻りしが、常よりも人目も無く、ときめき給へる御蔭を頼み、我身の出世を計りたる、國司郡司、それかれ多くありしかど、いかなる重き咎に依り、都を立退き給ふかと、怖れて此頃寄付かず馬乘物の所せく、今まで集ひし門前の、いと寂しきを見るにつけ、世は憂きものと思ひ知りぬ。此住居にも一人二人、心をとむる程にはあらねど、側近く召使ひし、女もありしが我命、もしながらへて又此世に、歸るを待たんと思ひなば、西の亭へ移住み、紫に仕へよと、言付置きて豫てより、此所には守る人をさへ、置き給はざる定なれば、はや掃淸むる者も無く、臺子の間を差覗けば、側は塵ばむ心地せられ、疊をもところ〴〵、引返して置きたりけり。わが見る中だに斯くの如し、年月たちなばいかばかり、荒れ行くならんと思ひつゝ、西の亭へ行き給へば、雨戸もさゝせず紫は、眺め明しゝ風情にて、若き女童ども、彼方此方に臥したるが、今ぞやう〳〵起出で騒ぐ、寝巻姿もをかしげなり。光氏は紫の、邊近く座に直

り、「昨夜はかの赤松の、暇乞に行きたるが、例の如く過行きし、二葉の事を繰返し、打歎かれて戻るにも、戻り難くて明したり。別も近くなりたるに、一夜にもあれ仇めきし、事の爲餘所に泊りしと、必ず怨み給ふな」ト、宣ふ顔を打まもり、「妾を此所へ振捨てて、須磨とやらんへ御下り、夫が何より怨めしい。父より前に逢馴れて、便とするは君ばかり。前將軍の御愛子を、婿に取りしと世の人に、ひけらす爲と聞えんかと、父國助は遠慮して、たまく\ならでは此方へ來らず。いつそ妾が御館に、居るといふ事知れぬなら、かくまで憂き目は見まじきに、今までは世に華やかに、幸ありし此身の上、繼母上の聞付けて、妬しと思し給ひし由。是よりは又打返し、母にも祖母にも別れし上、夫にまでも捨てられる、果報拙き娘ぞと、譏り給はん悲しや」ト、忍び涙に暮れたるは、實にぞ哀れの有樣なる。光氏ほつと息を吐き、「なほ播磨より戻り難く、年月を重ねなば、かの山里の憂き住居、巖の中にも迎取らん。人の思はく室町の、聞えもあれば只今は、倶に連れても下り難し。別れて居るも暫しのうち、思ひくづをれ給ひそ」ト、いとまめく\しく慰めけり。

第十七編はこゝに次ぎて見給ふべし。

○義尙公は内君を、既にさる年迎へ給ひ、側室も數多ありながら、未だ男子の無かりしかば、父の殊更祕藏なる、春若丸を養ひ取り、末々は足利の、嗣子と定め給ひけり。富徽の前は中惡き、藤の方の腹なる故、再三止め給ひしかど、義尙更に聞入れず、もしさる事よりして館の騷を、引出さんかと去年よりして、東山へ別殿を、又しつらはせて春若丸を、是へ住ませ給ひければ、藤の方は更にも言はず、義正も大いに喜び、かの杉生を乳母として、付置かせ給ひしが、或時義正言ひけるは、「光氏近きに都を開き、播磨へ下る由なれば、四郎正倘春若丸、それかれ子供をわが差圖と、知らさず嵯峨の彼が館へ、暇乞に遣すべし」ト、杉生に宣ひければ、かしこまりて夫々の、仕度を頓て整へけり。めでたしく\。

修紫田舎源氏第十七編序

海鼠と烏賊は形異やうなるものから、畫に寫したるは風雅なり。章魚と河豚の畫はをかしみあるうちに、西施乳はすこし惡き氣のそひて見ゆるは、毒ありといふ心からなるべし。丹魚はたじろの類は、佳肴ならざれども、畫くときは美麗しく、鮟鱇鰻鱺の美味なるも、形を畫しては其品くだれり。是その味ひは畫き難き故なり。されば須磨明石は、源氏最第一の卷ながら、是を悉く畫圖に寫さば、海邊の家に唯獨、淋し氣におはす處と、都の女は彼所よりの、文を見て歎くところの、最うるさきのみにもあらず文章さへもその味ひを、聞えよくは寫し難く、章魚と河豚とのをかしみに、川次郎と岩根の事を、この卷中へ交肴、はたじろ丹魚の表紙をかけ、かい敷にする隈篠の、二十葉を例の如く、一折をなすになん。

天保六年乙未正月四日　柳亭種彦記

光氏の年立源氏のごとくなれバ
須磨の巻ハ廿六歳なれどこの
さうしハ廿二歳の葵の巻と
廿一歳にひきあげさきの
巻ゆゑ又一年書つゞめれバ
今年廿四歳なり

山名持豊入道
宗入娘
朝霧
明石の上に比も

十七編上

なほ紫は光氏の、迎取らんと言ひしを疑ひ、返も無くてつと立退き、柱隠れに居隠れて、涙紛らし給へる様、庭の櫻も花ならず、なほたぐひ無く思はれて、振捨てんもいとほしけれど、世の爲には替へ難しと、吐息と共に袖を控へ、「罪を犯して主親に、不興を受くれば明かなる、月日の影をだにも見ず、下様の諺にも、日影者といふならずや。されば此身を安らかに、振舞ふ事も恐れあり。我に過失無けれども、富徽の前の憎みを受け、其上父の機嫌に違ひ、身を退くは罪人同然。夫に聞えを憚らず、思ふ人を誘引はゞ、是よりまさる憂き目を見て、恥に恥をや重ぬべき、なほ其事はゆる〳〵聞えん。宵より睡らず居給はゞ、御身も嘸かし疲れつらん、まづ打寢み給へかし」ト、腰元どもに言付けて、紫を閨の内へ、やう〳〵に誘はせ、日の闌るまで寢させけり。かゝる折から春若丸、正倫君の御出なりと、追々に知らすれば、まづ廣座敷へ入れ申せと、光氏は差圖なし、紫を呼覺し、言ふべき事を斯う〳〵と、敎へ給へば心得て、寢巻の褻衣脫更へる、繻珍唐織白綾の、上に襲ねて邊さへ、輝くばかりの裲襠姿、春若丸を通し

たる、かの廣座敷の次の間まで、しづ〳〵出でて邊を顧み、「若君の御乳母、杉生も來りしとか、是へ招いて逢はせて」ト、仰を受けて言の葉が、此由を通じければ、杉生急ぎ此方へ立出で、それと見るより座を下り、行儀正しく敬ふを、打見やりてにこやかに、「妾事は河原之進國助が娘の紫、思ひがけなきさいはひにて、光氏が宿の妻と、定まる上は東山、室町の兩御所へ、御目見にも出づべき筈、世の噪がしきに取紛れ、且押晴れていふ時は、正則夫婦の歎を増し、くづ折れゆかんと我君の、思ひはからせ給ふを憚り、引籠りて居たりし故、其方に逢ふは初てながら、光氏君の常々から、あの杉生といふ女子は、母花桐の侍女にて、己は御腹に居る中より、介抱になつた者と、御物語は度々ゆゑ、懷しう思うて居た。今日は能うこそまづ此方へ。座を隔てては話も爲にくい、妾に遠慮はつゆ入らぬ」ト、言ひつゝ立つて杉生が、手を執つて連來り、「光氏君は若君の、御出の趣聞かせられ、正倫は此館へ來るも今が初てならず、わが此部屋へ招き寄せ、面會せんもいと安し、幼少なれども春若は、兄義尙の養子にされ、行末は世を取らせんの、御心なりとは豫て聞く、然らば某先非を悔い、我とわが手に流され人、罪を受けたる身を持ちて、弟にもせよ甥にもせよ、ゆく〳〵は天が下を、領るべき者の目通へは、憚るべき事なりと、仰せられて妾を代。身は山賤の様になり、近きに都を離れ侍る、東山へも

參らぬは、この愼みに因りてなり。萬の事は推量り、申させ給へ」ト散過ぎし、櫻の枝につけたる短册、小辨に持たせ來りしを、渡し給へば杉生は、受取りながらつく〴〵見るに、實に血筋とて爭はれぬ、藤の若枝の小紫、その嬋妍さ愛らしさ、光氏君の寵しみ、給ふも道理と思ひつゝ猶も正しくかしこまり、「御懇の御意を受け、申上ぐべき言葉もなし。御上の事を藤の方、いと慕はしく思召し、光氏君へも常々に、仰言もありしかど、赤松へ憚りの、世の聞えのと御用意深く、おそれながら叔母姪の、御續きにはありながら、御對面は今になし、押晴れての御出より人に知らさず私が、御迎に上りませう、東山へ御忍にて、必ず御渡り遊ばしませ。さて此度は夢の樣に、君は都を御ひらき、一度見上し人さへも、惜み聞ゆるあなたの御德、ましてやたゞ今仰の通り、御誕生の其時に、父君へ初ての、御對顏にも私が、抱き申した御子樣なれば、その昔の事折々の、御有樣を思ひつゞけ、御名殘惜しさ悲しさは、なか〳〵言葉に盡されず。光氏君は御見知も、あるまじき下女はしためまで、見奉らで程經んと、思ひ歎くもいと多く、この御光に世を過す者は猶更富徽樣の、御身を誹りなんどして、忍び〳〵に泣合へり。さぞ御上にも」ト顏を揚げ、見れば哀れや紫は、翻るゝばかりに目に淚、受持ちながらに庭の面、打眺めつゝさもあらぬ、風情にもてなし居たりしかば、由なき事を言出でしと、心づきて引退き、「初ての御目見に、御心碎きの種となる、あぢきなき事申出し、嘸かし御氣の結ほれん、まづあなたへ」ト紫の、腰元女に立交り、共に侍き廣座敷へ立出でて光氏の、仰の趣述べければ、四郎正尙打聞きて、「遠慮深き兄上の、御言葉にはありながら、背くも道にあらざれば、春若殿にはまづ是に、我は彼方へ推參なし、直々御目に懸らん」ト、此所へも度々來りしかば、案内も能く知りつ、人をも連れず光氏が、居間の方へぞ立行きける。杉生はかの櫻の短册、若君に見せ參らせ、

いつか見ん我も散行く花の京

と打吟ずれば春若は、幼心地に聞分けしか、おとなしやかに在します。杉生はなほ差寄り、「この御返は如何樣に、申しませう」ト問ひければ、春若は頑是無く、「暫し見ぬさへ戀しきものを、ましてや遠く離れては、逢ひたからうと言へかし」ト、すら〳〵と宣へば、あら物はかなき御返やと、哀れに見上げて杉生は、紫に打向ひ、「御聞きの如くに御返は、申上ぐべき樣もなし、物の辨別なき御身にも、心細げに思召す、御氣色もいと哀れげに、見えさせ給ふと恐れながら、仰上げられ給はれ」ト吐息を襟の内に吐く心を察して紫が、まづ御果物御手遊、それ〳〵と差圖して、次第に座敷へ列べさせ、機嫌を取りつ待遇せば、幼き程は馴れ安く、「好き姉上の

居給ふに、今までは何として、此所へは連れて來ざりし」ト、紫にのみ縺れ寄り、餘念もなげに遊ぶ中、正尙は此方にて、ゆる〳〵と光氏に、對面なして哀れなる、御物語聞え給ひ、春若丸と打連立ち、暮るゝ程に歸り給ひぬ。

光氏は須磨への下り、いよ〳〵近うなる儘に、嵯峨の館を守るべき、その人々を定め置き、俱に隨ひ行かん者、誰彼と撰出し、かの山里の住家にて、取使ふべき調度の類、蒔繪留だみ金銀の、金具打つたる類は省き、粧ひも無き物のみ集め、白氏文集歌物語、古き書ども入れたる籠、さて琴ひとつぞ持たせ給ふ。數多の手道具華やかなる、飾のあるは身に添へず、只あやしの山賤めきて、浮世を遁るゝ設にとりなし、鎧腹卷太刀薙刀、總ての武具は豫てより、密に船にて下しゝなるべし。さて今まで召仕ひし、上下の男女は、殘らず西の亭に預け、人無き時に言の葉を、傍近く招き寄せ、「わが知行より貢の品々、取納めて此所の賄ひ、又は糺の後見して、是より己に代らん者、誰彼と思ひし處、琵琶之助は實明ながら、たゞ事無きを圖るのみ、萬を内ばに取計ひ、はか〴〵しき性にあらず、其上時折癎癖あり。かの御心のいち早き、富徽の前の緣者といひ、旁以て跡の大事を、打賴みては置き難し。赤松の正則は、二心無き者なるが、惜いかな年老いたり。夫のみならず二葉を先立て、その代たる紫の、力となるも何とやらん、快からず思ふべし。勝元は智勇兼備、是に上越す者は無けれど、宗全といふ敵を持てり。されば萬事は、河原之進國助に言付け置きぬ。たとへ隔てて住めばとて、紫には實の父、心遣ひはよもあるまじ。己と思ひて何事も、彼を賴まば此末に、事の足らざる事は無し。館の内は更にも言はず、外の藏町納殿、わが重寶を籠めたるまで、總て其方をはか〴〵しき、者と見極め置いたる間、預けて我は打立つなり。いよ〳〵心を用ひて仕へ、たとへ都に合戰の、起りたりとも驚かず、堅固に守つて居り候へ、忍び〳〵に防禦の軍勢、手配なして置きつれば、此所は素より糺へも、敵一人も入れはせじ」ト、事細やかに言付置き、稻舟姫を初とし、花鄕なんどゆかりの者へ、置土産とかなづけたる、品々を贈り給ひ、又桂樹の許へは文して、

御身まづ病と言立て、青葉の館へ一先歸り、琵琶之助にも其事を、聞え知らせて置きたれば、石堂へ輿入し、さて其後に富徽の前に、斯くと申出づべきなり。何程怒らせ給ふとも婚姻濟みて人妻と、定まる上はせん方無く、琵琶之助を叱り懲し、給ふのみにて事濟まん。憂さも辛さも類なく、今まで思ひし事どもを、馬之丞に物語り、是よりは氣を安く、睦しやかに暮せよ。

と書認め給ひしが、富徽の前の腰元ども、もし目やつけんと道の程も、危ければ女の文の、さ

まして彼所へ送りけり。
明日明後日となりける暮には、花桐の墓拜まんとて、光氏は嵯峨を立出で、鳥邊野に詣で給ふ。曉かけて月出づる、頃なりければ宵闇を、さいはひにまづ東山へ忍びて立寄り、司を密に呼出し、しか〳〵の由言入れけるに、藤の方も是より猶、打絶えんを歎かはしく、思し給ひし時なれば、義正には深く包み、それ此方へとて常に住む、奥の一間に招き入れぬ。光氏嬉しさ限りなく、邊近き簾屛風の、前にしづ〳〵進寄り、「まづ餘の事は差措きつ、心柄なる罪を犯し、都を離れんその爲に、十二月するつかた、御產の紐を解き給ひし、春若丸を如月まで、包み置かせ給はれと、わりなき願を御聞濟み。果して此度某が、罪をさま〴〵富徽の前、言上げ給ひし其中に、是第一の不審の由。豫て設けし事なれば、わがさいはひは春若の、不幸となりて御側を、遠ざけらるゝ事もやと、夫のみ心に懸りしが、思ひもかけぬ兄義尙、養ひ取りていつぞやより、此所に間近く置かるゝは、道の誠を氏神の、守り給へる故にこそ。是よります〳〵力を盡し、仇を平げ春若丸の、世は萬歲と謠はせん。今まで仇し御名を立てし、御恩報じと闞はし、御心休め給はれ」ト、恐入つて言ひければ、藤の方は懷しげに、打見遣りて聲を潛め、「心より著し濡衣の、このまゝ朽ちも果てなんと、豫ての覺悟に引替へて、むかしに變らず義正君、御不便加へて給はれば、人は何とも言はゞ言へ、と思ひ諦め世の噂、耳に懸けねば此頃は、辛苦も薄く身も安し。たゞ悲しきは御身の上、紫はじめ人々の、さぞ便なく思はん」ト、歎き給ふも道理と、思へどわざと打微笑み、「夫も山名を謀る爲、頓て目出たう立戻り、御目見致さん」ト、萬の事を取集め、物語りなば哀れも優り、互に名殘は盡きせじと、言葉短く打答へ、暇を乞うて立ち給へば、後の方に杉生が、いつの間にやら蹲居たり。光氏は振返り、「春若丸ははや寢たるか、夫故此所へ來りしなるべし。身は山賤となりくだり、須磨の浦邊にさまよへば、是今生の御別も、圖り難くて其方が意見、破りて今宵忍びしが、もう歸るから其樣に、顔を見詰る事は無い。今より母の御墓へ、詣るが何ぞ言傳が、あるなら言へ」ト宣へば、はつとは言へど暫くは、言葉も無くて猶豫ひつ、やう〳〵に顔をあげ、「見しはなく、あるは悲しき世の果を、御存じ無いもなか〳〵に、御心安う御座りませう。此頃中も春寒い、其折々に御廊下を、通ひながらに晝顔が、かういふ唐戸を紐にて括り、御下著ばかりで見すぼらしく、立つてお出で遊ばしたを、思ひ出して人知れず、今に涙を落しますと、左樣仰せ上げられて。其時あなたはまだお腹に。夫がかくまで嬋妍さ。今まで此世に在しなば、さぞ御寵愛遊ばして」ト後は涙に口籠れば、光氏も目をしばたゝき、「よし〳〵母に申すべし。是から久しく逢はれまい、無事で居

やれ」ト顔背け、月待出でて出で給ふ。御供にはたゞ五六人、睦ましき限りして、御馬にてぞおはしける。鳥邊野の蓮臺寺は、東山より遠くもあらねば、程無く彼所へ詣で給ふに、二十年ばかりの昔ながら、かの撫子の分れ道と、吟じ給ひし御有樣、たゞ眼の前の樣に思はれ、萬の事を泣く〳〵に、聞え給へど松吹く風の、聲より外に答も無し。御墓は道の草年々に繁くなりて、分入る程にいと露けし。折から月も雲隱れ、森の木立も木深さに、歸り出でん道も無き、心地せられて心細く、猶伏拜み居たりしが、在りしにかはらぬ花桐の、俤さやかに見え給へる、そゞろ寒き程なりけり。わづか五歳の其時に、別れしかども朝夕に、戀しと思ふ母の顏、光氏いかで見忘れべき、なう懷しと取縋れど、たゞ幻の如くにて、目に遮れども手に觸らず。花桐はつれ〴〵と、光氏の顏打まもり、「君まづ須磨へおはして後、程を圖りて宗入に、奇瑞を妾が見すべきなり、彼驚いて御身を迎へん。其時明石へ移らせ給はゞ、唯何事も御心の、儘になりなんなほ末々、目出度榮えゆき給へば、外には聞えん事もなし。妾が爲とて年忌月忌、世に有難き御弔、その功德にて天上に、果を受けたれば御心に、かけ給ふなと御所樣へも、申上げて給はれ」ト、言ふ聲ばかり雲霞、姿は消えて見えずなりぬ。母の慈愛の忝さに、光氏いよいよ涙に搔暮れ、思はず空を打眺め、

なき影やまだ目に殘る朧月

と宣ふ後に「我君」ト、聲打潛めて呼ぶ者あり。振返り見給へば、かの新參の良清なり。「仁木藏人待兼し、樣子はいかに」ト尋ねられ、一人の女を誘ひ出で、「仰に隨ひ山名の館へ、忍入つて妹の村荻、盜出して候」ト、御前に突遣られ、村荻は只羞らひて、顏をもあげず言葉なし。光氏彼には眼も懸けず、良清に打向ひ、「喜代之助に勘當の、悴ありとむかしより、名は聞及びて居たれども、汝が面體知らざる故、今宵の役を言付けしは、この村荻を證人にて、實否を糺さん爲にてあり。今まで敵の間者にて、正則までも欺きし、曲者ならんも知り難しと、疑ひしはわが誤なり。さて村荻は」ト良清の、耳に口寄せ打さゝやき、「忍ばせ置きて立歸れ、心得たるか」ト言捨てて、さて夫よりも二葉の上、かの黃昏が墓までも、暇乞ぞと打廻り、明果つる頃嵯峨の住居へ、立戾らせ給ひけり。

されば明日の曉に、いよ〳〵都を離れんと、惟吉はじめ側近く、使ひ馴れたる侍ども、新參ながら良清を、加へて供は七八人、いと微にて旅立の、「事ども密に觸流し、人には其日を確に知らさず、たゞ河原之進馬之丞、兩人のみ淀川の、小橋の邊に茶屋をしつらひ、我より前に彼所へ行き、相待ちて居るべしと、書狀を以て告遣りつ。其日は取分け紫と、物語のどかに聞え、

暮兼る日に引換へて、短夜早く更渡れば、忍び歩きに事かはり、甚く窶しょ旅裝、見すぼらしげに立出でて、後を顧み給へども、言の葉小辨そのほかの、女どもも涙に暮れ、はかぐ〵しくは物だに言はず。夜著引被いで起上らぬ、紫が閨の中、立戻つて差覗き、「我も出づれば月も出でたり、など見送には出で給はぬ。此事を言洩しょ、斯く聞えて置くべきものをと、後にて悔る事あらん。一日二日たまさかに、隔つる折だに物寂しと、言ひつるものを」ト屏風を引除け、緣の端に我も居て、「此所へ〳〵」ト宣へば、紫は泣沈み、暫しが程は打臥して、身動もせず居たりしが、やう〳〵膝行出で給ふ。髪も亂れ白粉は、涙に洗ひて繕はぬ、姿も月の朧氣に、見えて常より媚かし。後には父の國助が、殘りてはあらんなれど、我もし彼所に病を受け、空しくならば彼が身は、いかにならんと心には、思へど力を落させじと、

藤浪や春の別を知らで咲く

「その花房の延やかに、心を用ひて待ち給へ」ト、思ひたどらず淺はかに、言懸け給へば紫が、

命にもかへて止めたし行く春を

實に〳〵さこそ思はめと、見捨て難くて躊躇ひしが、夜も明果てなば人の目に、懸るも侘しと思ひ切り、館を急ぎ出で給ひぬ。

道すがらも紫が、俤のつと附添ひて、胸も塞り光氏は、忍び涙にくれ竹の、伏見の里は人目もあらんと、東寺を左に四塚より、さえだの橋を打渡り、左手に遠く秋の山、近く戀塚鳥羽畷、奈良大路とか行き〳〵て、淀川もはや近付きければ、暫く駕籠を立てさせて、向ふを屹度見給ふに、川に臨みてあやしげなる、茶店樣の物をしつらひ、遊佐の定紋染めたる幕を、打廻らして置きたるは、彼所に我を待つならんと、頓て其所へ乘物を、舁入れさせ給ふにぞ、河原之進國助は、斯くと見るより側近く、立寄りて手をつかへ、「仰の通り夜前より、此所に來りしが、俄の事ゆゑ御腰を、懸けらるべき假屋の營み、はか〴〵しくも出來かね、いかになさんと馬之丞と、申談ずる其時に、此邊に住む者の由、一人の老女是を聞き、さあらば船を造るため、掛けたる小屋の候が、まだ船木をも取入れねば、夫を貸して參らせんと、卽ち是へ同道せり。汚穢しくとも暫しは是へ」ト申上ぐれば乘物の、戸を開かせて立出で給ひ、「何かと心配過分の至。して馬之丞はいづれに居る」ト仰に國助膝を進め、「茲に怪しき事のあり、定めて是より御船にて、難波へ御越と存ぜしが、もと御忍の事なれば、室町御所の御船を、取出させて廻しなば、却つて御不興ならんかと、町人どもの持船を、借受けんと致せし處、御覽の如く今日に限り、只一艘の小舟も無し。馬之丞は彼方此方、その才覺に走り廻り、未だ歸り候はず」ト聞いて光

氏點き給ひ、「船なくば陸より行かん、心配りに及ぶべらず。さてかね〴〵も言ふ如く、心がかりは紫なり。是より便は御身のみ、しげ〳〵嵯峨を問慰め、心をつけて」ト言懸けて、差俯きて居給ふ折しも、陣鐘太鼓鬨の聲、あはやと見返る都の方、馬煙天に立昇るは、只事ならずと驚く人々。打しほたれし光氏が、頭をあげてにつこと打笑み、「山名宗全間者を以て、某都を去ると知り、折こそ宜けれと豫ての反逆、擊つて出でたるものなるべし。それ〴〵備なし置いたれば、必ず騷ぐ事なかれ」ト、言葉も終らぬ其處へ、馳戻つたる馬之丞、御前に大息吐き、「勝元此頃病氣につき、七條の下館に、引籠りてありける處へ、思ひがけ無き山名親子、手勢をもつて追取巻き、唯一揉にて攻懸る。内にも用意やしたりけん、物見門より防矢を、雨や霰と射懸けられ、寄手はかひなくひた崩れ。されども多勢の事なれば、又盛返して合戰の、眞最中と唯今家來が、馬を飛して罷越し、物語りて候」ト、申上ぐれば光氏は、床几に倚りて猶動ぜず。「勝元が所勞にて、彼所に居ると言ひしも皆、敵を欺る爲なれば、頓て音川勝利を得ん。夫よりはまづ言ふべき大事、かの桂樹を近々に、呼迎へなば睦ましう、又悋氣して飽かるゝなと、己が言ふたと傳へよ」ト、打戲れて在しけり。

十七編下

かゝる處へ水上より、矢を射る如きの早舟一艘、此方を目がけて漕來り、一反ばかり川中へ、舟を停めさせ舳の方に、突立上る川次郎、腹巻りゝしく身を堅め、光氏を遙に見遣り、大音上げて言ひけるやう、「某たび〳〵麁忽の振舞、面目なさに中川の、館も知行も差上げて、御暇をも乞はずに出奔、今では山名宗全が股肱の臣と罷成る。されども昔の主君なれば、御敵對は仕らず。元よりあなたの御生付、華奢風流に見え給ふ、夫に引かへ武道にまで、達せられしも承知ゆゑ、此所らの船を殘らず隱し、此舟とても浮々と、岸へ著けねば何ほう憎く、思召しても諺の、川向の喧嘩とやら、又御手差もなり難ければ、まづ御心を落付けて、宗全が申す趣、夫にて聞召さるべし。初め宗全心を掛けし、藤の方を義正公へ、奉られしも御計ひ、夫のみならず其方と、密通ありて皐けたる、春若殿を義尙公の、養君とせられたれば、己が胤にて光氏こそ、天下を奪ふ罪人なれ、猶此上にも何樣の、巧をなさんも測り難く、御家の寶小烏丸、玉兎の鏡の二品は、宗全密に隱し置く、先非を悔いて光氏君、只今切腹し給はゞ、寶は御所へ奉ら

ん、かひ無く命を惜まれなば、二品共に破却せん、さゝする時には春若殿の、御代とならざるのみならず、足利殿の御家にさへ、禁廷よりの御咎、かゝるは必定、否か應か、御返答こそ聞かまほし。いかに〳〵」ト呼はつたり。光氏は莞爾と笑ひ、「汝如きの畜生を、斬るべき刀は此所になし、安堵致してその舟を、岸へ近付けわが言ふ事、夫にて聞召さるべし。宗全が奪ひし寶は、二品共に贋物なり、勝手次第に破却なせ。斯うばかりでは愚鈍の族、疑ひ思はん初より、逐一に語るを聞け。頓五郎馬刀助を、石堂へ仕へさせ、間者となさん宗全が、手段を某能つく知り、稲舟姫へかの鏡を、贈らんといふわが文を、わざと彼等に見せたるは、是反間の計略とも、知らずに贋の鏡を奪はせ、今まで祕め置く愚さ」ト宣ふ間に馬刀助も、かの船中に在りけるが、此方を見遣りて吃驚し、川次郎が袖を引き、「あれ〳〵其時討たれしと、申上げたる馬之丞、いと健かにて彼所に在り。さては我々光氏に、謀られたるか」ト無念の切齒。川次郎は嘲笑ひ、「たとへ鏡は贋にもせよ、今一品の小烏丸、是は先年凌晨とて、忍びの上手の女を頼み、室町の寶藏に、納めありしを盗ませしと、宗全殿の物語。其夜の番は他人ならず、某が父喜代之助、詳しき様子は語られねど、忍び〳〵に劍の詮議、されたる事も知つて居る、夫を贋と宣ふは、いと心得ず」ト問ひければ、光氏はまたにつこと打笑み、「その凌晨といふ女は、惡人ながら義心

あり、娘が愛にひかされて、生害はしたれども、彼に劍を奪はせし、その頼人を明して言はず、是にて知召されよと、富士を透して簾を逆に、引上げて我に見せつ。富士は日本一の名山、夫を逆にする時は、山名が所爲と悟り知り、汝が妹村荻に、山名三郎統清が、戀慕したるをさひはひと、彼に仔細を言含め、嫁入せて置きたれども、小烏丸の在所、いづれと言へる事を知らず。年月累ねて去年の三月、宗全が居間近き、袋棚の其中に、隱しあるのをやう〳〵知り、似つこらしげなる懷劍と、すり換へし事の由は、密書を以て村荻より、告越しながらその劍を、我許へ送るべき、手段に又も當惑し、心願の事ありとて、太秦へ七日籠の、村荻が願を立て、彼所にて受取らんと、我も忍びて行きたるが、七日籠は女のみ、男たる身は内陣へ、漫には入り難く、手段を變へて側近く、召仕ふ花郷と、いへる女は村荻に、面影の似たる故に、眉を拂はせ遠目には、夫かと見まがふ姿に仕立て、是も彼所へ籠らせて、密計を諜し合させ、經文讀誦のその間、傍に人あるは、心散りて妨ぞと、村荻が腰元の、女どもを遠ざけて、其隙に花郷と、村荻は入代り、駕籠にて密に寺を出で、三筋町の忍屋にて、己がしらせを待つ間のつま琴。此所も人目の多ければ、千景の方の父壽庵が、離座敷をかりそめに、花郷なりと僞りて、逢ひたる女は村荻にて、其時劍は取返し、疾より元の寶藏へ、納置きしと宗全に、早く歸

つて語れよ」ト、いひ放ち給ふにぞ、川次郎大いに驚き、「夫にて思ひ當りし事あり、妹めはかの昔より、子供話に言傳へし、小町に等しき生付、男に逢はれぬ不具とて、婚禮なしたる其夜より、一度も枕は交さねども、思ひ焦れて迎へし女房、夫に彼奴は嫌はれしと、浮名の立つも悔しければ、離別もなさずと統淸が、密にいつぞや物語、實しからぬ事なりと、聞流して置きつるが、空衣のみか妹まで、いやはや君の早業には、某閉口仕る。統淸へのわが面晴、まづ村荻を引縛り、辛き目見せんはや舟を、返せ〳〵」ト氣を揉あせれば、藏人良淸つゝと出で、「汝と我とは義理ある中、されば某父の不興を、受けたる時に言葉を添へ、詫をこそなすべけれ、却つて讒言したる故、問答せんも無益ぞと、暫く影を隱しゝが、再び都へ立戻り、光氏君には新參、されども親しき御意を受け、村荻を一昨日の、夜に紛れて盜出し、影を匿して置きつれば、はや汝等の儘にはならぬ。よしや添臥なさずとも、一旦夫とよびたる統淸、命は助け給はれと、しほらしき村荻が、願を卽ち御聞濟、おしつけ搦めて三郎は、人無き島へ流しもの、其旨歸つて言はせんため、汝が命も今日は助くる。三拜なして歸れば宜し、猶も過言を吐出さば、眞ふたつにしてくれんず」ト、股立取あげ水中へ、跳入らんその有樣、恐れわなゝなき川次郎、言句も出ねば舟子ども、顏見合せて氣味わる〳〵、櫓を早めてぞ漕去りける。良淸

は形を正し、「君には嘸かし御退屈、御立もや」ト勸むる此方に、しづ〳〵立出る一人の老女、「私事は此小屋を、お貸し申した者なるが、音に聞くのみ光氏樣を、初て拜みし有難さ、御菓子にても捧げんと、思うたばかりで貧しい暮し、せめては御茶を一服」ト、差出せば光氏は、物をも言はず其茶碗、扇を以て打落すに、あら怪しむべし靑々と、萠立つ其所らの若草に、飜れたる茶の懸るとひとしく、色も變じて枯萎むを、見るより良淸飛懸り、老女の襟髮引摑み、「鴆毒を入れたる茶を、君にすゝむる己はしれもの、まづ何者に賴まれしか、夫より先に白狀せよ」ト責問ふを光氏押止め、「其奴めは川次郎が、實の母にて名はたしか、岩根とやらんいふ女、我に逢ひしは只一度、夜目の事にてあんなれば、よも見覺はあるまじと、近付寄つて害せんと、謀りしに疑無し。問ふに及ばす山名の味方」ト宣ふ隙に以前の早舟、再び葦間を漕來り、弓に矢番へて川次郎、窺ひ〳〵光氏を、目がけてへうと放つ矢の、楯に良淸突廻す、岩根が胸元篦深に貫き、あつとも言はず息絶ゆれば、流石に母を矢に懸けて、川次郎もはつとばかり、驚くはずみに縺るゝ足、舟の小舷を踏辷り、川へざんぶと遠近の、山の雪解に水勢も、殊更激しく腹卷に、身體自由ならざれば、浮きも揚らず其儘に、底の水屑と成行くを、見捨てて舟には馬刀助はじめ、雜兵どもはいよ〳〵あわて、力を戮せ漕立て〳〵、跡をも見ずして遁失せけ

り。光氏重ねて國助を、近く招きて、「わが側室花鄕の、父片攪調大夫は、かの宗全には仕へながら、我に心を寄する者、もし此後に勝元が　山名の館へ攻入るか、又は間者細作を以て、窺はんと計るとも、館の案内知るべからず、紫が手遊の、雛の家は調太夫が　造らせて贈りしにて　卽ち山名の館の圖、是を以て見る時は、案内逐一知るべきなり。其事はかの品に、添へて贈りし犬張子の、内に籠めたる片攪の、密書に詳しく記してあり」ト又　懷より一卷を、取出して渡し給ひ、「是こそは宗全が、徒黨一味の連判なれ。まづ斯く身方の揃ひし上は、この宗全に一味なし、早く都へ上れよと、彼が弟　明石に住む、宗入に見せんため　去年の睦月初つかた、岸高の頓五郎を、飛脚となして送る由、是もかの調太夫が、密に我に告げたる間、その日限頓五郎が　面體風俗委細に聞置き、琵琶之助を招寄せ、宗全が忍びの飛脚、頓五郎とてしかじかの、者を途にて斬つて捨て、連判狀を人知れず　我に渡せと言付しが、琵琶之助その後來り、仰に從ひ其所此所に、家來を忍ばせ頓五郎を、狐川の渡場にて、討止めては候へども、連判の一卷は、懷中にも荷物にも、これ無き由を我に告げつ。依りてつら〳〵案ずるに、琵琶之助は武に疎く、夫に居る馬之丞が、婦妻となすべき桂樹を、愛するのみにて一方の、敵を防がん器量は無し、されば密に連判を、拔き見たるに我緣者、富徵の前にゆかりの者、夫に加はりありし故、驚き恐れて祕め匿し、我に與へぬものならん。かゝる大事を言付けしは、あゝ某が粗忽なりと、後悔なして惟吉が、妻の妹の糸路といふもの、青葉に奉公なすを幸ひ、もしさる品は見ざるやと、惟吉より問はせし處　なか〳〵かゝる大事の品、女どもの見る前にて、取扱ひ給ふべき、いはれ無ければつゆ知らず、されどもお家の重寶の、類の物は御居間近き、塗籠に入れ給ふ樣子なれば、もしもや夫に籠めあらんかと、言ひつと告げぬ。夫故己が桂樹の、寢間へ忍びし其時に、糸路を賴みて導きさせ、かの塗籠に一夜隱れ、やう〳〵尋ね求めたり。琵琶之助だにこの連判、我手に入りしといふ事は、まだ氣のつかぬ趣なれば、其餘の者は猶知らず。汝これを熟覽して、忠義に見せても山名へ傾く、者の無きにもあらざれば、必ず油斷すべからず」ト、仰に國助頭を下げ、「恐れながら御用意深き、御計ひと感激せり。委細畏み奉る」ト、一卷確と懷中す。光氏床几を下立つて、「さて其事を言終れば、我父元のうかれ人。なう恐しの合戰や　はやく〳〵須磨へ遁下らん。石堂さらば國助よ、紫の事くれ〴〵も、賴む〳〵」ト言ひながら、岩根の死骸を打見やり、「わが五歲の時泥藏は、妹の桔梗に殺害され、是は現在我子の矢先、惡の報は目前なり。乘物遣れ」ト急がせて、川に沿うてぞおはしける。

光氏は駕籠を早めて、其夜は難波に宿を求め、朝とく立ちて大江の岸と、いふ渡に至りけり。

此所も昔は旅人を、迎むる宿の立續き、いと賑はしき所なりしが、近頃は甚く荒れ、家も毀ちて垣もせず、唯其庭に植置きし、松のみ印に殘りけり。かの唐國の屈原が、江潭に放たれしも我身の上に思ひ競べ、汀に寄する白波の、寄せては返るを打眺め、羨ましくもかへる浪哉と、打吟じ給へる樣、かの業平の歌ぞとは、誰々も知る事ながら、所柄にや珍らしく、御供に隨ふ人、皆々哀れと聞なしつ。さて此所より船に乘り、うちかへりみ給へるに、こし方の山々は、霞遙に隔りて、是や實に三千里の、外の心地もするからに、櫂の雫もわが涙も、

　古鄉を峯の霞ぞ隔てける

日の長き頃なるに、追風さへ添ひければ、まだ申時ばかりに、かの浦に著き給ひぬ。さて住み給ふべき其所は、かの行平の中納言が、藻汐垂れつゝ佗ぶと答へよと、詠みける家居の邊ならん、海面は稍入りて、哀れに心凄げなる、人氣だに無き山中なり。程なく其所へ到り著き、柴を束ね竹を撓ねし、まづ垣根の樣より始めて、いと珍らかに見給ふに、書院座敷といふべき廣間も、哀れに古びし茅屋にて、葦の葉をもて葺渡しゝ、廊下めきたる所など、をかしう造りなしてあり。此所はもと鄉侍の、住家にてありけるが、其者近頃他國へ移り、空家となりけるを、光氏先に家來を下し、購めさせて置きつるなり。山里には似合しき、荒れたる住居も都には、趣變りて世の中の、かく騷しき折ならずば、却つて面白かるべしと、かの佗好にて茶座敷を、田舍家めきて造らせたる、昔のすさびも思ひ出でつ。さてこの近き所々に、父より豫て賜りたる、領地も其所此所ありければ、夫を守らせ置き給ひし、莊屋代官などを呼出で、仁木良淸始めとし、親しく仕ふる家來より、それ〴〵の用向を、言渡させ給ふにぞ、彼者等この住居を打見、斯くては御座所も端近く、御寢間もあらはなるべしとて、木工塓工檜皮葺、大勢を招集め、次の日より破れし所を、取繕はんとなしければ、光氏はまづ庭の、草を掃はせ池を穿らせ、水深う遣流し、植木など數多取寄せ、荒れたる園も時の間に、見所ある樣に造らせ、今はと心の休まるまでは、只夢心地に現ならず。此所に近き國司、郡司はいふも更なり、總て足利の幕下の武士ども、光氏君の此所へ、渡らせ給ひし由を聞き、親しきは猶常々は、疎く過ぎたる者までも、古御所公のなたゝる御愛子、等閑にはなし難しと、亂れたる世の事なる故、忍び〴〵に心を寄せ、仕ふまつるもいと多く、旅の宿に似もつかず、人騷がしく集れども、はか〴〵しくは物語の、敵手となるべき者もなければ、知らぬ國の心地して、甚く心の結ぼれつ、斯くてはいかでか年月を、此所に過さん果敢なさやと、思ひ遣りつゝやう〳〵に、事靜まりて春もゆき、草の軒端に葺添ふる、菖蒲の根さへ霖雨の、頃にもなりて京の事、さま〴〵おもひやらるゝに

戀しき人のいと多し。まづ紫が言葉數、多からずしてくよ〳〵と、心に思ひて歎きし樣、春若丸の愛らしく、又夕霧が頑是なく、遊びし事をはじめとし、彼方此方のしのばしき、音信を聞えんと、嵯峨の館へは取分けて、玆にいはんはうるさきまで、文細々と書認め、夫に續では藤の方へ、

物思ふ身はいつといふ、分ちもあらねど此頃は、心も空も打亂れ、來し方行く先かき暮し、池の水際の增りしも、わが淚かと怪しむ。

など、哀れげに聞えあげ、さて例の桂樹は、はや石堂へ輿入の、其程も測り難く、且は心の頑ましき、富徽の前に憚あれば、糸路の許まで私の、用事ありけにもてなして、書いたる文の其中に、

汐たるゝ浦人おもへ五月雨

此頃の徒然に、過にし方を思ふにつけて、

こりずまの浦の見る目も青葉哉

又赤松の館へは、正則夫婦夕霧丸の、乳母にまでも心を添へ、幼きを能くいたはりて、成長させてくれよかしと、さま〴〵に書盡し、給ふ言の葉思ひ遣るべし。此時に良清を、机の邊へ招き寄せ、光氏の言ひける樣、「此度の京への人は、誰をか出し立てんと思ひ、心にそれかれ撰みしが、汝を除けて外になし。まづ此文をそれ〴〵の、所へ渡してさて其後、さいつ頃鳥邊野の、蓮臺寺にて汝にさゝやき、糺の館へしのばせ置きし、村荻を誘ひて、本國伊豫へ下るべし。彼は山名に憎しみを、受けたる者にてあるなれば、在所を知らば奪取に、軍兵を差向けん。尤も糺を防禦の用意、密に手配なし置けども、たゞ事無きを計るに如かじ。とはいへ都は合戰最中、必ず伊豫へ下向を急がず、秋にもなれ冬にもなれ、便宜を待つが肝要ぞ。所々の文の返事を、受取り歸る其者は、別に後より上すべし、汝は都に匿れ居て、妹と倶に船にて下れ」ト言敎へ給ひければ、良淸は「仰の趣、かしこまり奉る」ト、御文を取收め、直に出立したりけり。

京にてはこの御文、所々に見給ひつゝ、心の亂るゝ人々多かり。紫は取分けて、淚に能くも讀分け難く、そのまゝ顏に押當てて、只伏沈み泣入りて、起きも上らず只管に、思ひ焦れし有樣を、お道理なりと腰元ども、慰めんとはする者なく、みな〳〵其所へ寄集り、心細うぞ思ひける。光氏此所に在りける時、側を離さぬ手道具ども、彈鳴したるあづま琴、脫捨置きし小袖の匂、それかれにつけ今は世に、亡くなりたらん人の樣に、思し歎けば言の葉は、あらいま〳〵しと何某の、僧を賴みて加持祈禱。斯く紫が打歎く、心もしづまり且は又、もとの如くに光氏

君、都へ還らせ給へよと、苦しき時の神頼み、佛にさまぐ〜祈り申し、欺しつ賺しつ紫を、さまぐ〜に言勵まし、やうく〜と御文の、返事を書かせつゝ、君が旅寢の夜の衣、御羽織御袴、進らせ物を新に仕立て、積重ぬれど山里に、住む其中は世の聞え、東山へも憚りて、摺箔縫箔華やかなる、衣をば著じと豫てより、宣ひ置きし事なれば、皆色もなく寂しげなる、物のみにして此殿に、ときめき給ひし其時とは、樣變りたる心地せられ、悲しさ遣らん方もなく、朝夕出入り給ひし戸口、常に凭れて在したる、床の柱を見給ふにも、胸塞りて紫は、とかく言葉も涙のみ。鹽を踏むとか下樣の、諺などに今も言ふ、他人の中に立交り、世に鹽染みて年長し、人だにかゝる事あらば、歎かんものを是はなほ、いと若くして馴睦み、父になり母になりいたはり扱ひ生立てて、ならはし給ひし光氏の、俄に別れ給ひしなれば、戀しと思すは道理なり。死別れほど悲しきは、世に類無きものながら、夫は思うて返らねば、次第々々にわすれ草、生ひ行く事もありなんを、是は津の國播磨潟、國の境の須磨の浦、聞くには近き程なれど、逢見る便は絶えてなく、罪あるならば免しもあらん、自ら設けて自らの、御身を彼所へさすらへ人、さすれば是はいつまでと、限りあるべき別にも、あらぬを思へば紫の、歎は更に盡きざりけり。

藤の方にも春若丸の、力草とも後見とも、打頼みたる光氏の、隔り行きしを思ひ歎く、その樣いとゞ哀れなり。この年頃の憂き思、彼方は浮名を世に流す、夫が望にありながら、此方はさすが女氣の、物の聞えのつゝましく、少しなりともなさけある、氣色を見せなば夫につけ、人の咎の出來んかと、偏に思ひ忍びつゝ、光氏の哀れげに、言ひつる事をも心強く、聞流し見過して、つらうもてなし給ひしかば、事のあれかし世に觸れんと、耳を欹だて目を睜るが、さがなき人の常なれど、はや此方の噂をば、言出づる事も無く、止みぬる樣になりゆきしは、藤の方の愼深く、且一旦宗全に、見すべき手段のみにして、母とも頼むその人を、世に誹らするも本意ならずと、光氏も近頃は、思ひ返して人の目に、立つを憚り心に懸け、持隱しつる故ぞかしと、藤の方は其事此事、心に浮みて哀れにも、又戀しうもさまぐ〜に、思ひ亂れし折も折、須磨より來りし光氏の、御文を見給ひて、袖は涙の淵となる。

　五月雨や鹽木なげきをこゝもつむ

仇し浮名にありながら、胤まで宿しゝ中なりと、一旦人に唄はれしは、宿世よりして定めある、事かと思へば光氏と、淺き緣とはいかでか思はん、絶えて久しき返なれば、常より少し細やかに、心をとゞめて書けるなるべし。

さて須磨にては都の便を、待侘び給ふ程も無く、是等をはじめその外の、返事を取集め、良清が後追うて、のほせ給ひし近習の武士、もて歸りたりければ、光氏それかれ見給ふに、桂樹は病と言立て、父の許へは歸りながら、まだ石堂へは輿入せず、我身の上より事起り、君には都を去られしと、人のいはんが恥かしと、おもひ歎くもいとほしと、かの糸路よりいひ送りし、返の中に卷籠めたる、桂樹が其文に、

行方を青葉につゝめ戀の山

あわたゞしく下らせ給ひ、人々の御歎、はた御住居のこと足らで、はか無く過させ給はんと、推量り侍れど、夫も是も愚なる、筆には盡し難きなど、事短く書きてあり。光氏も其心を、哀れと思ふ事もあれば、人知らず歎かれぬ。紫よりの御文は、心殊に細やかなり、御返事なれば、

哀れなる事いと多くて

くらべ見よ汐汲む袖と夜の衣

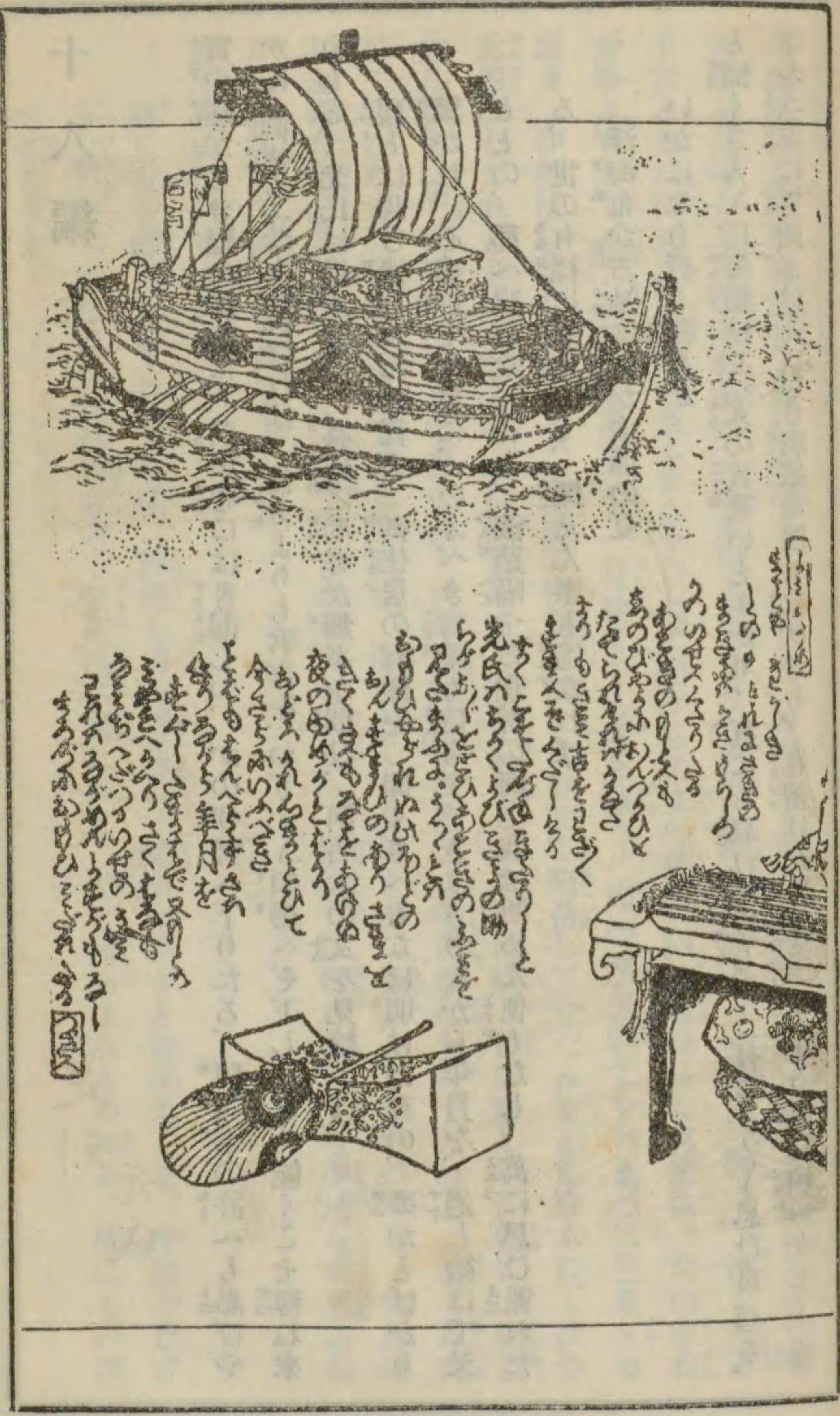
此文に取添へて、紫より送りたる、こよぎ掻卷蒲團さへ、色合紋柄淸らなり。何事もうちあがり、しとやかにして風流なるは、送りし物にもまず知れぬ。今は己もあわたゞしく、忍びて通ふ方もなし、世の騒だに無きならば、彼と二人しめやかに、在るべきものをと思ふにつけ、夜となく晝となく、その俤の身に添ひて、いと堪へ難く思ひ出で、なほ忍びてや此所に、迎取らんと思す事、度々なりしが打返し、しかする時は宗入を、都へ入れじとくひとむる、手段の障ならんかと、兎に角世界靜謐に、はや〳〵なさしめ給へとて、神に佛に祈誓を懸け、光氏ひとり精進にて、旦暮行ひ居たりけり。

修紫田舎源氏第十八編序

猿猴の手の長物語、およばぬ湖水の月を取らんと、山王の櫻木に、彫刻める事十八編、賣出すのも申の春、孫彦玄孫におしうつる、宇治十帖のすゐまでは、從弟端弟の系圖の混亂、書とり難く思へども、三間堂の佛より、御贔屓の光たのみ、三萬三千三百丁、續けるつもりで初年より、今まで恥を柿八年、是も猿には縁のある、當るといふは草紙の吉瑞、摑んで投けし蟹の甲、這ひわたる程といふ、須磨より明石の巻にうつれり。

天保丙申孟春　　柳亭種彦記

足利
光氏



十八編上

實や騷がしき程の紛れに、前の巻には書漏しつ、かの伊勢へ下りたる、阿古木の許へも忍びやかに、御使を立てられければ、彼方よりも君吉を、わざ〳〵須磨へぞ下しける。能くこそ尋ね來りしと、光氏は近く呼び、喜代之助等が無事を問ひ、阿古木の文を見給ふに、

現とは思ひ遣られぬ此程の、御住居の有樣を、聞くさへもなほ明けぬ夜の、夢かとばかり驚かれ、心惑ひて今更に、いふべき言葉も侍らず。さはさりながら年月を、過し給はで又もとの、都へ歸り咲く花も、浪路隔つる伊勢の海、我は眺めん便もなし。萬に思ひ亂れたる、世の有樣に又文して、聞えん事も遙なれば、

浮海布かる袖は乾かず浦の夏

いかになり行く我身か。

と猶くさ〴〵に書續けし、文の言葉いと多かり。實にも哀れと覺しが、打置き〳〵思ひ出づる、事を次第に書續ぎけん、白き唐紙を四五枚ばかり、巻續けたる筆遣、人より殊に媚めかしく、廓

に馴れたる言の葉墨付、いたり深う見所あり。されども黃昏二葉の上、一節ならず再び三度、憂き目を見せしもこの阿古木の、心あやまちなるに依り、疎んじ果てて磯菜に託け、遠く放遣りたるなれば、今は更に心もとまらず。たゞ折からの文の書振、いと哀れにて其使は、かの空衣が事よりして、睦しかりし君吉なり、打捨てても置き難く、旅の疲を晴せよと、まづ二三日止め置き、伊勢はいかなる所ぞと、彼國の物語、彼にせさせて聞召し、つく〴〵と見給ふに、はや元服はしたれども、未だ若やかに氣色ある、能き侍となりければ、昔の如くわが側に、据置かんかと懇の、仰を受けて君吉は、いと有難き事に思ひ、御前は辷り出でたれど、斯く田舍びて哀れなる、住居の事にてあるなれば、間所とても多からず、侍ふ人もおのづから、物思はしき御有樣、ほの見上げつゝ召使ふ、女は元より童さへ、御傍に侍らず、さぞ事足らず思さんかと、忍びて涙を落しけり。

さて光氏は阿古木の許へ、

斯く世を離るゝ事と知りなば、汐燒く浦を諸共に、眺めにいざと言はましを、今はかひなき蛤の、ふたみに別れ行方の、波路遙に隔たれど、同じ浦曲はみるめ刈る、袖にもいかかで劣るべき。

しほたれていつまで須磨の浦の夏
宣ふ如く又聞えん、便も覺束なき

なんど、書すさび給ひける、その言の葉は思ひ遣るべし。巻收めて君吉を、再び近く召呼ばれ、「七條通木屋町に、星月といふ醫師のあり、故ありて其家に、今假住する花郷と、いへる女は千景の方の、腹がはりの妹にて、我にもゆかりの者なる故に、此所に來て後彼が許へ、送りし文のその返事に、

軒荒れぬしのぶも繁き袖の露

と去頃書きておこしゝが、實に〳〵垣に這懸る、葎の外は力草と、なすべきもの無き彼が身は、悲しといふも愚なり。降續きたる霖雨に、塀も垣根も所々、頽れしなんど傳聞く、道の序にあるなれば、汝都を過ぐる時、遊佐國助が許へ立寄り、しか〴〵の由を語り、かの家を繕はせよ。花郷が實の父、調太夫は此國に、あれども山名へ憚りありて、今京地へは送り難し。くれ〴〵も河原之進へ、密に傳へさて國に、戻らば阿古木へ返事、渡して宜きに傳へよ」ト、文投遣りて君吉に、御暇を賜りつ。かく何所へもそれ〴〵に、覺束なからず聞えかはし、徒然なる折節は、都より送りたる、文どもをかき集め、心々を見給ふに、常にはさしも懐しく、思はぬまでも

目馴ざる、故にやあらん珍らしくて、思ひの外に氣を慰め、且は夫より物思ひを、催す種となるもあるべし。

誰言ふとなく桂樹に、光氏君の忍び〳〵、かたらひ給ひし噂の高く、剰さへ其君は、須磨へ下らせ給ひければ、捨てられ物になりしなど、さがなき人の笑ひ草、漏聞くからに桂樹は、憂くも辛くもさま〴〵に、思ひくづほれ居たりしかば、琵琶之助は取分けて、寵愛の娘ゆゑ、彼が兎に角引籠り、心も浮かぬ有様を、見るに忍びずさるにても、光氏君の御心に、入りなば直に召呼ばれ、御側に置かるべきを、さもし給はであるまじき、匂の局へ忍入り、夫だにあるを書捨の、反古を我に奪はせられ、富徽の前に見せよとある、主の仰は力なく、よからぬ事と知りながら、その如く計らひしに、夫より起りて都を開かれ、不便や娘は廢物、このまゝ屋敷に置く時は、いよ〳〵浮名を流さんかと、心の中に思ひ廻らし、富徽の前の御前へ出で、「桂樹が今までの、行の憎かりしも、誘へる人のあればなり、御側室にあらずんば、義尙公の御身近く、召使はれ候とも、今は憚る事にもあらず、まづ御館へ差出さん、宜しなに申し給はれ」ト、願へど御氣色宜しからず「光氏と事變り、義尙は心すなほに、強き程なき生ながら、斯くまで噂の高かりし、桂樹なれば側近く召呼ばんとは言ふべからず。腰元手近く使ふ女子

は、数の定まる事ならねば、餘の者ならば召抱へん、わが姪ながら此後は、たとへ局へ來るとも、對面はなし難し」ト言放ち給ひければ、琵琶之助は押返し、更に言ふべき言葉もなく、すご〳〵屋敷へ戻りければ、妻の司は出迎へ、「石堂殿より桂樹を、婦妻に申請ひたしと、御留守の程に使者到來、娘に其由語りし處、兎も角もとの答ゆゑ、返事は是より申入れんと、使者は先刻かへしよ」ト、聞いて大いに打喜び、「馬之丞とは似合の年頃、家柄といひ不足はあらじ、夫こそ宜けれ」ト早速に、結納それかれ取極め、此由披露に及びければ、例のさがなき浮世人、また是を聞付けて、昔の事ども知れる者、馬之丞と桂樹は、初はわりなき中なる故、光氏君とのいたづらを、知れども男は忘兼ね、人の譏もつゆ知らず、頓て朝夕側に置き、哀れに契るをかしさよ」ト、ひそ〳〵語合ひけるが、これらは更に耳にもとめず、文月になりて呼迎へ、三々九度の儀式も終り、作法亂さぬ床盃、二人並ぶを里付の、糸路は屏風の陰よりして、つら〳〵顔を打まもり、馬之丞の樣形、清らに見ゆれど及びなき、君の姿の花の宴、夕立つ雨の蚊帳の内、心に染みし事どもを、なほ思ひ出で給はんと、噂に聞きしを實とし、彼さへ實に桂樹は、光氏君と契りしと、思ひ定めて心根を、察し遣るとは知らざれど、馬之丞も光氏が、琵琶之助への仲立は、我言入れんと去りし年　言葉を固めて置きながら、物に紛れて其事なく、須磨へ下らせ給ひければ、疑ひ無きにもあらざるか、物思はしげに差俯向く、桂樹の顔差覗き、「二世の固めの盃は、今宵初めて汲みたれど、元より相識る中なるを、初々しげのもてなしは、いと心得ぬ事にこそ。言葉も無くて在するは、糺の橋にて某が、討たれし由に驚きたる、又敕筆の短册もて、再び御身に對面したる、それかれ思ひ出でられてか、そは忝なき心なり。兎にも角にも我君の、思ひがけ無く都を振捨て、須磨の浦邊へ下向の後、名のみは花の御所なれど、春も春とは思はれず、月の秋にも光なき、心地に歎くは幾人か、御身もさこそ思ふらめ。夫といふのも憚りあれど、富徽の前の御心の、頑ましきより起りし事、末々は御身に報ひ、いかなる罪をか受け給はん」ト、涙ぐめば桂樹は、おのれが心を引見んと、斯くは夫の言ふならんと、思へばいよ〳〵言葉もなく、苦しさ更に堪へかねたり。かゝる折から近習の武士、いとあわたゞしく走出で、「山名宗全反逆は、極りながら細川と、たゞ私の合戰のみ、御所へは弓をひかざりしが、今宵何とか思ひけん、室町近く陣押の、其體心得難きに依り、おの〳〵固めに出でられたり。君にも早く御出仕」ト、申し述べて退きければ、心得たりと馬之丞、肌著の上に袴を引掛け、「夫鎧櫃はや持て」ト、言ふに桂樹かひ〴〵しく、後に廻つて元結を切り、兜下地に取繕ひ、御胡簶よ御弓よと、立廻れば馬之丞、籠手差しながら此方に向ひ、「有るにつけても世の中ほど、實

にあぢき無きものはなし。戰場に望む時は、更に命は無きものなり、我身果散無く成行かば、御身はいかに思さるべき。近しき須磨の別ほど、悲しと思ひ給ふまじと、思へば夫が怨めし」ト、いと懷しき有樣にて、實に哀れと思ひ入る、顏色見えていふにつけ、ほろ〳〵飜れて桂樹が、涙に袖を絞るを見遣り、「そも須磨か此所か、夫はいづれに落つるにか」ト、くねり言葉の怨言、いふ中近づく陣鐘太鼓、「馬曳けやつ」ト桂樹が、差出す太刀を取るより疾く、表を指して馳出でけり。

須磨の浦にはいとゞ猶、心盡しの秋風に、海に少し遠けれど、かの行平の中納言が、旅人の袂涼しくなりにけり、關吹越ゆると詠じたる、浦波の音よる〳〵は、實にいと近く聞えつゝ、又なく哀れなるものは、かゝる所の秋なりけり。晝の程は何くれと、戲言など打宣ひ、徒然なるを慰めんと、いろ〳〵なる紙を繼がせ、手習なんどし給ひつ、又或時は珍らしき、唐綾の類の絹へ、さま〴〵の繪を書すさび、屛風の面に押し給ふを、近習の武士は打眺め、「都に渡らせ給ひし時は、たゞ人々の物語に、斯くもあらんと海山の、景色は想ひやり給ふ、のみにてありしが此程は、御目に近く御覽じて、さて御筆を下されたれば、あれ打寄する浪の勢、この荒磯のたゞずまひ、これに似し繪を今まで見ず。近頃上手ともてはやす、土佐にもあれ曾我にもあれ、召下されて試みに、これらの體を寫させ給へ、恐らくは皆つくり繪と、いふものになり行きて、斯くの如くの眞景は、心許無く候」ト、申せば君も笑はせ給ひ、「わが繪の好きにはあらざれど、海の面山の姿、朝な夕なの目に馴れて、繪のみを手本とせし時より、少しは見所あらんも知らず。都のさまで遠からぬ、名所にては須磨明石に、また越す眺は無しといふ、常々人の物語、聞きしに違はず目かれぬ絕景。さにてはなきか」ト機嫌能く、總て斯樣の遊にて、兎角紛らし居給へども、夜は御前の人も少く、皆打寢めばねながらに、物語する相手も無く、光氏一人目を覺し、やをら枕を欹てて、四方の嵐を聞き給ふに、浪はたゞ此許に、立來る心地にとげても寢難く、風に瞬く燈火の、影に透して彼方を見れば、流石に宿直の侍は、寢ぶたげながら袴も取らず、次の一間に凭り寄り、何やらん打さゝやき、忍びて鼻をかむもあり。あゝ我ゆゑに彼等まで、親と隔たり片時も、離れがたなき妻子に別れ、家をも捨てて見も知らぬ、かゝる浦邊に惑ひ來つ、賴みとするは我ばかり。夫さへ辛苦に浮立たぬ、顏をまもらばいとゞ猶、心細しと思ふらん。鷹狩漁獵の勇ましき、遊に暮して人々の、氣を引立てんと思へども、世の評議を祈りの立願、精進勝にて夫も叶はず。惟吉はじめ侍ども、さぞ便無く思はんと、心の底に打泣きて、涙落つとも覺えぬに、枕は浮きて流るゝばかり、床を浸せばせんなき愚痴

と、思ひ直して琴をすこし、掻鳴し給ひけるが、我ながらいと物凄う、聞ゆる音色に小首を傾け、「あな心得ぬ此調子、人を打たんと忍び寄る、曲者あるに疑なし」ト言ひも果てぬに屏風の陰より、面を包みし怪しの男、ずつと出でて言葉も無く、刀抜かんとする小手を、光氏すかさず左に押へ、右には琴の彈さしを、又引寄せて掻鳴す。かの曲者は氣を苛立ち、引外して打込むを、光氏開いて力も用ひず、扇の要にしんの當、うんと一聲倒るゝ音。惟吉驚き馳來るを、「密にせよ」ト光氏制し、「幸ひ宿直の者ども、は眠りこけて知る者なし、其奴は其儘縛めて、調太夫に預け置け。必ず人に沙汰するな」ト、再び琴を引寄せて、「戀侘びて、泣く音にまがふ浦浪は、思ふ方より吹く風か。身にしみ〴〵と汐木樵る、峯につれなきひとつ松」ト謠ひ給へる御聲の、いと目出度に近習の武士は、眠も覺めて聞とれながら、却つて此所へ曲者の、忍入りしを惟吉に、搦めさせ給ひたる、其事どもはまどろみし、夢の中にて知らざりけり。

斯くて日かずを經るまゝに、園の草花いろ〳〵に、咲亂れて面白ければ、光氏は近う馴れ、仕ふる者を四五名ばかり、引連れて海の面を、見やらるゝ廊下のわたりへ、白き綾のなよやかなるに、紫苑色の單を引懸け、帶しどけなく打亂れし、姿を更につくろはず、不圖立出で給ひけるが、ゆゝしう淸らなる樣の、常に優れて見え給ふは、所がらに依るにやあらん。袖の内に珠數を爪繰り、「南無釋迦牟尼佛」ト、ゆるやかに稱へ給ふ、御聲の尊さは、此世の人とは思はれず。其日は浪も靜にて、小さき鳥の浮べるを、見渡すも心細きに、雁の列ねて鳴く聲の、楫の音にまがへるを、打聞き給ひて都戀しく、御涙の飜るゝにや、かき拂ひ給ふ御手の、黑き珠數になほ榮えて、岩に碎くる浪より白し。沖の方には船歌を、謠ひのゝしり舟子どもの、漕行くなども能く聞ゆ。光氏は扇を翳し、細やかに目をとゞめ、近習の武士を顧み給ひ、「あれ磯端に漕寄せたるは、大船の通ひ船、商人の類かと、思ひの外に乘りしは女、その間遙に隔たれど、衣の色合姿形、たしかに都上﨟なり。櫻と共に都を散り、花を見るのは初めてぞ。そも〳〵何者なるべき」ト、仰に皆々高欄に、手を打懸けて伸上り、「此方に五人彼方に三人、しかも町の風俗ならず。あら訝し」トいふ折から、旅の姿を其儘に、「仁木良淸京地より、只今歸り候」ト、自ら名乘りて廊下口、入來るを見給ひて、「やれ珍らしや懷しや。忍び〳〵に合戰の、注進は來れども、いかなる事か兄君弟、其外ゆかりの者どもより、初の程は詩を作り、又句を吟じ哀れなる、文を書きて送りしが、此頃絶えて音信なし。世の風說は聞かざるや」ト仰に良淸聲を潜め、「都にては月と日の、立行くに隨ひて、いよ〳〵君を戀ひしと思す、方々多きその中に、夕霧君は御智惠の、つかせらるれば猶以て、常々思し出で給ひ、父君の御許へ、我を連れてと泣き

給ふを、見奉りて左衛門夫婦、乳母は更なり心無き、下司婢に至るまで、泣かぬ日とてはなしとの噂。藤の方は春若君の、御後見と頼みたる、君漂泊となり給へば、我よりはまづ若君の、行末心元なしと、夫にかこちて御歎、其故やらん御心地も、勝れさせ給はぬとか。御兄弟は申すに及ばず、御目に懸けられ睦ましき、夫も是も我君の、事のみを語出で、世の中擧りて戀慕ひ、參らするを又例の、富徽の前は聞召し、父君に勘當を、受けたる人は何事も、心に任せぬ住居して、身を愼むが道なるを、須磨とやらん景色ある、所を撰んで面白き、家を造らせ世の中を、誹りて人を人とせず、かの唐土の我儘者、鹿を指して馬と言へば、さなりと答ふる追從に、等しく彼に心を通はす、しれもの多しと世の取沙汰、これ世を亂す端ならんと、悪し樣に宣ふから、その聞えを煩はしと、人々の憚り給ひ、御音信の絕えたるなるべし。亂を起さん我君の、御企とのたとへ事、あまりと言へば」ト言ひ懸くるを、「これ」ト押止め聞かず顏、作りて光氏打微笑み、「言ふべき事を忘れたり、汝を都に上せしは、〔直ちに下の巻に接續す〕

十八編　下

村荻を密に伊豫へ、連下らせん爲なるが、彼をばいかゞなしたる」ト、仰に良淸猶摺寄り、「其事にて候なり、畠山靭負之丞重篤、此度義尙公の命に依りて、是も亦西國を押へのため、讃岐の豊田へ下り船、幸ひ彼も妻や娘を、伴ひ行くと承はり、彼を頼みて村荻をも、腰元女の姿につくり、召加へさせ候ふ間、難無く都を連れて立退き、かの磯端に待たせ候。御言葉をも下されなば、是へ誘ひ申さんや」ト言へば光氏頭振を振り、「富徽の前の宣う如く、父の勘當受けたる某、愼深き身を以て、いかでか女に面を合さん。直樣伊豫へ誘ひて、汝は再び立歸れ。はや〳〵行け」ト傍の、琴引寄せて掻鳴し、重ねて言葉も無かりければ、はつと答へて良淸は、立上らんとなす處へ、靭負之丞の一子、小六郎重員といへる若者、捧物を取持たせ、御前に手をつかへ、「父の申上候、拙者久しく病氣に依りて、本國讃岐に在りけるが、此度都の大亂を、承はつて上京致し、御所へ罷出でたる處、汝は此所に在らんより、取つて返して西國武士、山名へ一味の者あらば、討止めよとの御内意にて、豫て都に殘し置く、妻子をも引倶して、ま

た候讃岐へ赴き候。國より出でし其時は、君が此所まで御下りとは、ゆめ〳〵知らず罷過し、久しぶりにて御目見致し、まづは都の御物語も、承はらんと思ひの外、嵯峨の御殿は御留守と、初て聞いて驚入る。今さいはひに御宿の、間近く船は寄せながら、都よりは送りの者、本國よりは迎への人數、彼是混雜致すに依つて、まづ此儘に國へ引取り、御代靜謐になりて後、わざ〳〵是まで罷出で、尊顏拜し奉らんと、御目見の名代には、恐れながら汝參れと、拙者を差越し候」ト申上れば點き給ひ、「むかし親しき人々を、相見る事も難うのみ、成行きたるに斯くわざと、立寄りて音づれしは、嬉しと己が答へし段、重篤に能く傳へよ。良清はまだ行かずや、汝も父が待兼ん」ト、小六郎にも其儘に、御暇を賜りければ、直に御前を下りけり。そも〳〵此畠山靱負之丞重篤は、勢ある武士にて、家族多く親類廣く、男子は此小六郎、一人にてありながら、娘がちにて夫に隨ふ、女どもも數多なれば、徒路は混雜なるべしと、奥方は船にて下る。浦傳ひを彼方此方、遊びつゝ來る程に、須磨の邊は外よりも、面白き所なれば、心とまりて通ひ舟に、取乘り〳〵磯端近く、漕寄せさせて四方の景色を、打眺めて居たりけるが、光氏君のこの邊に、浮世を離れて在すると、聞けば媚いたる腰元はした、さては若き娘達は、彼所よりは見えもせぬ、船の中さへ恥かしう、懐鏡懐中紅、手に〳〵取出で濱風に、吹かれし髮の亂れを搔揚げ、汗に雲立つ仙女香、粧ひ直してばら〳〵と、打連れ濱邊に下立つて、此所より光る御姿の、見えもやすると伸上り、心もぬけの空衣、其夜の夢を思ひ出づる、村荻は取分けて、其方の方のみ打眺め、思ひ餘りてはら〳〵と、落つる涙に紅筆を、しめして延の鼻紙へ、

　月待ちて引止められつ綱手繩

　此方より聞ゆるは、差過したる樣なれど、哀れなる折からと、許して御覽ぜよかし。

と書認めて侍の、心安きを密に頼み、「是を君に捧げてたべ」ト、走らする程も無く、小六郎と打連立ち、良清も立歸り、村荻を小陰に呼び、「御身を同道なしたる段、言上に及びし處、御愼の中なれば、女に對面おもひも寄らず、直樣伊豫へ連下れと、嚴しき仰詮方なし。はや〳〵船へ」ト言ひければ、はつとばかりに雙袖を、顏に押當て言葉も無し。他所の歎は氣のつかぬ、かの若き娘ども、小六郎に打向ひ、「見上げ申した事は無けれど、世に隱れなき光る君、都においでの其中は、多くの女に侍かれ、何の不足も無い御身が、此所は男ばかりとやら、荒くれしうて御寢起も、さぞ事の足らぬがち、其上前は遙々海、後の方は山つゞき、御淋しうて堪へられまい。まあどの樣な御住居ぞ」ト、寄集ひて問ひければ、小六郎打點き、「光氏君には室町の、御所にて度々御目見、まだ嵯峨の御館へ、罷出でたる事はなけれど、御構の外から見ても、大方

は知れたる結構、夫に變りて此所は、唐畫に書きたる樣なる御住居、竹を編みて垣を爲渡し、階は石を組み、松の柱茅の軒、疎かには見ゆるものから、流石に風雅は捨て給はず、佗びたる體も珍らかに、いと面白き御座所の樣も、庭よりあらはに見入れられ、御手道具も白木にて、取繕はず雙六盤、碁盤の類は置かるれども、御厨子黑棚二重棚、螺鈿蒔繪に粧ひし、物とては更に無し。御有樣も山賤めき、紅の褪せて黃勝なる、袷のみにて打窶れ、まことの田舍人のごと、もてなし給へど淸らなる、御姿はなほ夫に榮え、見上げ申せば我知らず、打笑まれて御側を、離れがたなく思ふなり。そも〳〵何の故ありて、戀渡る方々を、都に殘し此浦に、移り住まはせ給ふならん」ト、御有樣を詳しく語るに、娘達を初めとして、ありあふ人々泣きみちたり。かゝる折から舟子ども、追風よきにはや船を、出さんなんどとざゝめくにぞ、「君の仰を父上に、申上げん」ト小六郎、前に進めば女ども、「此所にいつまで居たとても、御顏も拜めぬ光氏樣、楫を枕の假寢して、今宵の夢に見るより外、仕樣がない」ト打戲れ、通ひ舟に乘移り、漕戻させて磯端に、殘りし者は村荻一人。良淸これに心もとめず、續いて舳先へ片足を、踏懸けながら後をかへりみ、打驚いて立戻り、泣伏す妹の背打敲き、「御身の歎も道理ながら、乘遲れては便無きに、早く〳〵」ト急立てられ、村荻やう〳〵顏をあげ、「前に使を打賴み、君に拙き調の句、御覽に入れし御返しの、來るまで暫待たせて」ト、言ふに心は急きながら、せん方渚に良淸も、躊躇ふ中に兎角して、使の侍歸り來り、「君には何か打微笑み、御覽ありての御返」ト、文差出せば村荻は、恥かしげに押開き、

月ゆゑにたゆたふか須磨の浦の浪

と口の中にて吟ずる折、琴の調の風につれ、遙に此所へ聞えけり。さなきだに哀れなる、所の樣に物の音の、心細さを取集め、御面影も目の前に、浮むばかりに思はれて、村荻更に正體なく、恥も忘れて聲を揚げ、磯邊にかつぱと泣倒れ、起上らねば良淸も、あはれと思へど舟よりは、此方に向ひて扇をあげ、打招かれていよ〳〵急立ち、「押して御目見願ひなば、却つて御不興蒙らん、ひと先國に身を隱し、折を待つよりせん方無し。人に怪しみ受けぬ中、いざ來れ」ト、妹の手を取りさま〴〵に、おどしつ賺しつやう〳〵に、乘移らする通ひ舟、結びもとめず徒らに、切行く緣の綱手繩、引過るのも口惜き、村荻が心の中、思ひ遣るさへ哀れなり。

光氏は琴彈きさし、海の面を打見やれば、その船ならん追風にきほひ、さながら雲を凌ぐが如く、浪を分けつゝ遠ざかれば、何とやらん心細う、猶端近く立出でて、伸上り〳〵、「彼が父は伊勢

路に在り夫へと初は思ひしかど、山名へ一味の者どもの、彼所にあれば統清へ、洩れもやせんと身寄も無き、伊豫へ下すを情無き、計なりと村荻が、我を怨みて唐土の、王昭君が胡の國へ、送り遣らるゝ心地にて、歎き明さん不便やな。夫は馬是は船、夫は琵琶是は琴、胡角一聲霜後夢」ト、かの大江の朝綱が、昭君を作りたる、詩を打吟じて東の方を、振返りて見給へば、月いと華やかに差出でたり。「それよ今宵は八月十五夜、田舍の心安きに紛れ、夫さへも忘れたり。室町の御遊は、猿樂をや召されけん、嵯峨には何と眺むらん。二千里外故人心」ト、樂天が言ひたるも、思ひ出で給ふにつけ、月の顔のみ打まもられ、藤の方のしめ〴〵と、心より著し濡衣の、此儘朽ちも果てなんと、宣はせしも頻りに戀しく、浮む涙を振拂ひ、まづ式日の御禮を、申上げんと身を淸め、そのむかし菅相丞、天子よりの賜を、恩賜の御衣とて左遷の時、持ち下られし例に傚ひ、父の小袖を一襲、朝夕まことの身を放たず、傍に置きたるを、屛風に掛けて禮を述べ、

濡るゝかな尾花の袖の左右

いと懷しげに義正の、物語などし給ひし、その御形の目に浮み、鬱々として脇息に、打凭れつつ寢もやらず、月を眺めて在せしが、はや夜も更けぬと宿直の侍、聞ゆるに驚かれ、寢所へ入らせ給ひけり。

是よりは記すべき、事も無くて冬になりぬ。雪降りあれて空の景色、殊に凄く見えたるが、夕暮方より雲散りて、月いと明う差入りて、果敢なき旅の住所は、奥まで隈なく床の上に、夜深き空もいと能く見ゆ。入方の月物凄く、こし方の事行末を、思ひ續けて例の如く、まどろまれぬ曉の、空に千鳥の哀れに鳴く。

たのもしや寐覺の床の友千鳥

と返す〴〵獨ごちて、打寢み給ひけるが、明けぬと告ぐる須磨寺の、鐘の響に枕を欹て、次の一間を差覗けど、未だ起きたる人もなし、驚かさんも心無しと、自ら雨戸を押開き、手を淸めんとて手水鉢の、氷を碎き給ふを聞付け、「御看經に候はゞ、淸き水を奉らん」ト、庭の柴垣打廻り、水もて來るは浪内とて、此頃抱へし下部なり。「能くこそ心づきたれ」ト、光氏嗽手水して、「序に汝に用のあり、雪を厭はぬ寒椿、潔く咲いたるを、御佛に捧ぐべし、西に指したる一枝を、是にて切つて參れよ」ト、枕刀を浪内に、渡して其方へ背差向け、朝日を拜して居給ふ中、件の枝を切取つて、雪に手をつき差出せば、「ヲヽよし〳〵」ト瓶に插し、座敷へ戻りて經文を、靜に讀誦し給ふ御聲の、耳に入りて侍ども、驚き起きて御座所をつくろひ

御膳を進めなんどして、日も南に廻る頃、惟吉が罷出で、「思ひがけ無き太郎高直、罷下りて候」ト、言葉の中に續いて立出で、遙此方に平伏す。光氏は御覽じて、「常に戀しく覺えしが、父の不興を受けたる某、わざ〳〵此所へ呼下さば、汝が爲も宜からじと、思ひはかりて打過ぎつ」ト仰に高直打濕む、目をしばたゝきて面を上げ、「珍らしき尊顏を、拜して思はぬこの落涙、昔の歌に嬉しきにも、ひとつ涙ぞ翻れけるとは、かゝる事をや詠みつらん」ト　又差俯きて言葉も無し。光氏小首を打傾け、「案内もなく俄の下りは、合戰の有樣を、直に語らん爲なるべし、人には包む密事もあらん。惟吉は次へ立て。高直是へ」ト宣へば、御側へ近く摺寄り、「より〳〵密書に認めて、豫て御覽に入れたれば、君にも知召す如く、山吉音川　私の、合戰のみにて室町へは、未だ宗全馳向はず。されどいづれも油斷なく、御所を固めて候へば、まづ御心安かるべし。某此度下りしは、其事にては候はず、都に殘し置かれたる、方々の御有樣を、申上げん爲にてあり。夕霧君は日に添ひて、見かはすばかりの御成長、とはいへ幼く在ませば、御辨へは確に無く、まだ父上は御歸なきか、御迎に早う行けと、御むづかるのをさま〴〵に、賺し申せば又夫に、紛れて御遊び遊ばすを、老父老母は見上げ參らせ、御機嫌が能きにも泣き　惡い時には素より泣き、二葉の上の御事を、夫につけ是につけ、言出さぬ日とては無し。又取分

けていたはしきは、嵯峨の内君、紫の上にてあり。かの御館は西東と、ふたつに分けて置かれけるが、君の住ませ給ひたる、東の方に侍ひし、女中を殘らず紫の、上の渡らせ給ふなる、西の亭へ送り遣られ、其後是へ御下向。かの女中の其中には、折々毎に御不便を、懸けられし者もありとか、よしさなくとも今までは、御目見なしたる事も無き、内君に仕ふるは、快からず澁々に、初の程は移りしが、御年若に在しながら、思遣深う在まし、萬の事に行渡り、いと深切なる御心ばへ、見もせぬ中は陰言に、譏りし女中も懷しき、御有樣に惚々と、仕へ馴るゝに隨ひて、世にあり難き御情深さ、殊に優れて我君の、御寵愛なされしも、道理なりと褒めののめき、皆々傅き敬ひて、御暇願ふ者はなし。東山より杉生も、度々御文の御使、氣合の惡い其時は、内君を見上げ申すと、とんと病を忘るゝとて、御用のないにも行通ひ、はや内々にて藤の方に、御對面もありしとやらん。さて某も御機嫌を、窺はんため繁々參上、御有樣を見奉るに、君の御座所を在すが如く、しつらひ置かれて内君の、御手づから御配膳、御褥ばかりに打向ひ、御機嫌を窺はれ、行儀亂さず作法を崩さず　恐れながら又外に、類あらざる御發明。是へ下る由を申し、御文をとも存ぜしが、二葉の上にゆかりの者と、御心置もあらんかと、差扣へて申上げず。あの儘嵯峨に差置かれ、浮々と程經らば、御痛はしや内君の、思し慰む折も無

からん。此所へ迎へ給ふとも、押晴れての御本妻、誰かは誹り申すべき」ト、聲打潛めて言ひければ、頭痛きや光氏は、拳に額を打ちながら、「さればよ久しうなる儘に、此所へ呼ばんかと、思ひし事の無きにもあらねど、我だに宿世の淺ましき　報にかゝる目や見ると、覺ゆるばかの此住居、彼にはいよ／＼つきなからんと、思ひ返して其事は、言ひも出でずに打過ぎたり、まづ夫よりは差當り、急に言ふべき事のあり、此方へ來よ」トかの海を、見渡す廊下へ誘ひつ、「知つての如く此須磨より、あれ／＼明石のあの浦は、只這渡る程なれば、かの入道の娘の事、思ひ出でん」ト宣へば、高直暫し打案じ、「さて御覺の能き事かな。夫は山名宗入が、掌の中の珠と侍き、未に緣につかずと聞く、かの朝霧が事ならん。むかし雨夜の物語、よく無き事を御耳に觸れ、ほと／＼後悔仕る」ト、恐入れば笑はせ給ひ、「思ふ仔細の有る間、汝まづ試みに、朝霧に文を送れ。かの宗入は宗全が、弟ながらも邪に、與する者にあらざる由は、是へ來て後間者を以て、大概は探り知れり。されども肉身分けたる兄弟、迂濶に心は許されず、猶も樣子を探るべき、是もたくみのひとつなり。下書は我して取らせん。惟吉料紙硯を持て」ト、さらさらと書下し、渡し給へば高直は、押戴いて筆執上げ、「主君の仰は是非なけれど、既に先年承引かぬ、氣色を悟つて種々に、言觸つて歸りし某、夫と知りなば此文は、手にだに觸れず投返

さん」ト、手本の如く書終り、文箱に納めて差置けば、光氏再び惟吉を、近々と招き寄せ、「宗入方へ是を持行き、千鳥といへる腰元を、密に呼出し當館の、姫朝霧へ是を參らせ、御返事取りて給はれと、懇に頼むべし。何方よりと尋ねなば、去りし年宗入殿の、御目に懸りて龍王の、使なりと戲れしが、實は室町昵近の、武士の中にも隱れなき、赤松左衛門正則が嫡子、太郎高直が艷書にて候と、一番鎗の其時に、名乘るが如く立派に申せ。道は馬にてはや／＼行け。高直はさぞ疲れつらん、まづ引下つて休息せよ。日暮れて後にまた逢はん」ト、奥へ入らせ給ひけり。

かの山名宗入は、兄宗全とは事變り、邪智を廻し奸計を、企てべき器量も無く、榮華に耽り心高う、思へる生にありける故、初めの程は執權に、なるべき望もありけれど、其事叶はざりける間、都へ出でて腰を屈め、頭をさぐるも懶くなり、播磨は大概領地なれば、國の中の者どもは、入道殿／＼と、畏つて恐れ敬ふに、いよ／＼誇りて明石へ引込み、都にも恥ぢぬばかり、家居廣く造りなし、花より雨より朝霧を、眺むるを樂しみに、年月を經たりけるが、光氏かくて在すと聞きて、奥方眞柴に語らうやう、「花桐のおん腹の、光る君と世に名高き、東山の御愛子、御勘氣を蒙られしと、いふにもあらねど我とわが、御身を退き去る頃より、須磨の浦に御假住、

二十歳を越すまで朝霧を、嫁にも遂らず聟をも迎へず、末はいかにし給ふと、常々御身が歎をも、今まで聞捨置いたるが、待てば甘露も降るとやら、さても娘は果報者、かゝる序に光氏君に、奉りなば某が、兄宗全と合體せざる、事の由も詳しく知れ、我家は萬代不易。近きに彼所へ罷出で、まづ御目見をなすべし」ト、喜ぶ言葉を眞柴は打消し、「夫は思ひもかけぬ事、京の人の語るを聞けば、其君には内君初め、皆はでやかな女を撰び、愛妾の側室のと、いと多く持ち給うて、まだ其上に御兄上、義尙公に參らせんと、富徽の前の祕藏の姪御を、奧局まで忍び忍びに、過ち給うて御所を騷がせ、その御咎にあれへさすらへ。田舍育の朝霧に、何とて心をとめ給はん。お目見に出しなば、彼はあやしの山賤の、娘かなんどとお笑種、思はぬ恥を見せられん」ト言へば宗入腹立ちて、「御身の知らざる事のあり、夫故我とは心も違はん。去頃夢に美しき、御所風の上﨟一人、枕の邊に歩み寄り、宗全都に謀叛を企て、汝をも語ふべし、夫に與せば家は絶えなん、身を愼みて居る時は、好き孫數多まうくべしと、宣ふと見る其中に、兄より急の書狀なりと、近習の武士が搖覺し、差出すを披き見れば、果して此度叛逆に、一味せよとの事にてあり。心の中に驚き恐れ、夫より度々催促あれど、加勢の人數も今に上せず。はた好き孫を擧けんとの、告は正しく此君を、迎取れとの知らせならん。これ住吉を年頃信じ、朝霧をも年にふたゝび、住吉詣を必ずさせし、神の靈驗の正夢を、必ず疑ふ事なかれ。田舍育も人に依れ、眩きまでにしつらひ侍き、藝能もそれ〴〵に、躾置いたる娘朝霧、京上﨟にもいかでか劣らん。光氏君は言はずと知れし、東山殿の御胤、此上の聟やはある。序を求めて迎へ申さん、その用意したまへ」と、言放つもいとかたくなし。妻の眞柴は聞入れず、「宣ふ如く此上なき、貴き君には侍れど、罪に沈みて流されて、おはせし人を心懸け、給ふも快からねば、此事思ひ止りて、人も聞かんに戯れにも、言出し給ふな」ト、言へば宗入目に角立て、「そもそも罪に當る事、唐土にも我邦にも、その例いと多し。菅相丞を初めとして、近くは諸宗の祖師上人、遠き國遠き島へ、流し遣られ給ひしも、人に勝れし世猜、才智學問長けたる人に、必ず是はある事なり。光氏君を產み給ひし、花桐の御方は、わが母上の叔父なりし、間島知義の娘なり、美人の聞え高きに依つて、室町へ召呼ばれ、義正公の御不便深く、ときめかし給ふ事、更に類の無かりければ、人のそねみ人の怨、御身に罹りし故なるか、若くて失せられたりしかど、世に愛でらるゝ光氏君を、遺し置かれ給ひしは、長生をして諸侍の、妻となるよりいみじき果報。されば女は心を高く、君を撰んで仕ふべし。宗全は兄ながら、妾腹にて光氏君に、ゆかりは無けれど今言ふ如く、己は遠く緣を引けり。此事密に申しなば、田舍人とて某を、

君は見下し給ふまじ」ト、猶何やらんいと甚く、囁きてこそ居たりけれ。

此娘優れたる、形といふにはあらねども、懐しう嬋妍に、心ばせある樣などぞ、都に住みて勢ある、國司の姫君にも、をさ〳〵劣るまじかりける。今此所へ來かゝりしが、父と母との物語は、我身の上の事なれば、次の一間に立忍び、首尾を打聞きて、そのまゝ部屋へ立戻り、涙に暮るゝを乳母の立浪、腰元千鳥が打眺め、「見ては猶更見ぬ人さへ、戀渡る光氏君、夫をあなたの聟君にと、唯今のお話を、承はつてどうぞ早うと、私どもさへ喜んで、須磨へ是からお迎に、參りたい程氣が急くに、なぜにお泣き遊ばす」ト、問はれて朝霧目を押拭ひ、「身の有樣の口惜さ、思ひ知りての此涙。父上は當國には、御領地もいと廣く、これ此樣に都にも、劣らぬ館の構ながら、引籠りてのみおはすれば、妾は猶更都の風俗、いつ見習ひし事も無し。今母上の仰の通り、姿怪しき山賤の、娘を花の都人は、物の數ともし給ふまじ。さらばとて又身に應じ、程に從ふ田舍人を、夫よと呼びて世を送るも、生きたる詮は更に無し。もしもや命長うして、父にも母にも後れなば、尼にやならん海にや入らん」ト、聲を忍んで歎くにぞ、女どもは持餘し、「是は又あんまりな、さうさきの事ばかり、くよ〳〵御案じ遊ばさずと、便求めて光氏樣へ、御文を御上げ遊ばせ」ト、ざゝめき立つを押止め、千鳥は少し前へ出で、「新參の私が、差出

がましう申すのも、恐れながら朝霧樣は、何事も内端なお生、たとへ御勸め申したとて、夫は思ひも寄らぬ事、どうか斯う才覺して、その嬋妍な御姿を、御目に懸けたら自から、お髮を剃らうの海へ御身を、投げ樣のといふ御述懷は、止んで目出度御輿入、御顏を御直し遊ばせ」ト、鏡臺取出すその處へ、一人の腰元走り來り、「只今須磨より御使が」ト半分聞いて皆々が、「そりやこそ彼方から御文が來た」ト 又立騷ぐを又しづめ、乳母の立浪文箱を取上げ、「何方より何方への、御文といふ事聞いてか」ト、問はれて件の腰元が、「去りし年は宗入殿、御目を廻され、龍王湯は痞にきくとの御口上、御名は長くて覺えにくさ、書いて貰うて參りました」ト、取出せば訝しげに、朝霧が押披き、「足利昵近の侍、赤松左衞門正則の嫡子、同苗太郎高直とは、豫て聞いたる名なれども、妾へ文の來る筈は」ト暫し案じて膝を打ち、「こりや父君へ密の用、目立たぬ樣に女の文箱、彼方へ持て」ト言ひければ、はいと座敷を立浪の、跡に千鳥は引殘り、もしや夫はと思へども、聲立てかねてうつとりと、小首傾け居たりけり。

須磨にてはその夕暮、仁木良清歸り來り、「畠山重篤と、讃岐の國まで便船し、伊豫の領地へ村荻を、送り届けて候」ト、聞え上ぐれは光氏喜び、「今日はいと珍らしき、人の集る日にてあり」ト、再ひ赤松太郎を呼出し、盃を賜りて、例の琴を取出し、良清に唄はせ、高直は横笛吹き、

心をとゞめ哀れなる、手など彈いて遊び給ふに、惟吉やうく歸り來り、「明石へ赴き御文を、差出して候へども、娘よりは返事もせず　父の入道我を呼び、高直殿に對面し、聞ゆべき事のあり、是へと申させ給ふべしと、不興の體にて候」ト、聞いて高直頭を掻き「承引く心のなき故に、父に文を見せたるなるべし。其所へ迂濶に行懸り、空しく歸るは恥の恥。是へ尋ねて來りなば、頭痛に悩みて高直は、歸りし由を傳へ給へ」ト言へば君にも笑はせ給ひ、又盃を取上げて、月頃の物語に、夜もすがらまどろまず、曉近くなりし頃、高直の言ひける樣、「絶えて久しき御顏を、見上げたさに室町へ、願も立てず御咎も、顧みずして下りしが、心緩みし故やらん、今となりては世の聞えも、何とやらんつゝましゝ。春は父こそ參らめ」ト、座をさがらんとなしける時、光氏それと差圖して、いと美しき驪の駒、庭前へ牽出させ、「雪まだ解けず、道もぬからん、是に乘りて歸るべし。こはわが取分け祕藏ゆゑ、此所へ連れて下りしが、胡馬北風に嘶ふとやらん、東風吹く度に戀し氣なる、都を駒にも見すべきなり」ト、いと有難き仰に高直、又も涙にかきくれて、躊躇ふ中に日もやうく、あがれば心あわたゞしく　あまたたび禮をなし、かへりみがちに出行くを、いつ又對面なすべしと、思へばいとゞ光氏も、心細げに見送りけり。

修紫田舍源氏第十九編序

此編十葉稿なりし刻、予故ありて源氏の卷の、數に齊しく五十餘年、往なれし下谷を離れ、淺草に居をトす。須磨より明石に光氏の、移る條に當りしも、頗る奇遇といふべき歟。たゞ這ひわたる程なれど、上野のひときは隔りしも、彼越かたの山は遐遙にてと、書る詞を目前に、古郷ゆかしくは思ひながら、此所には樓めく物ありて、月を見るに宜しければ、池水に映る影を眺め、是あがための石山と、後十葉を綴り添しが、角ふりわけよ蝸牛の、舍には秋のたのみを納むる、藏町なんどもあらばこそ、たゞ年頃の住ひよりは、こよなく明なるばかりは　卷の詞に似通ひたり。まづ南は馬場へいづる、小路を隔て竹の林の、綠なるはつれより、富士の高根の彌白く、雨降山は青やかなり。湯島の宮居は右に遠く、榧寺の佛閣は左に近しと、いひつゞくれば樓上の、詠の自讚のやうなれど、修紫が紫の一本の茂睡が墓ある、金龍寺の門の竝び、森の下道南の方、丁字街へ乙未の、秋の末移りたる、所書のかはりに記す。

天保丙甲春發行

柳亭種彦

十九編上

年返りて日永く、徒然なるに植ゑし若木の、櫻ほのかに咲初めて、空の氣色うらゝかなるに、つけても心はうらゝかならず。去年の春京を別れ、出立つ時に紫はじめ、名殘を惜みて人々の、心苦しかりし樣など、戀しさ遣らん方も無く、あゝ今頃は室町の、櫻も盛になりぬらん、一年の花の宴に、東山の御景色、兄義尙に正則が、參らせしいと淸らなる、袴を我と一對に、引懸け給ひし其姿、萬の事を思ひ出でられ、吐息つく〴〵四方の景色を、打眺めて居たりけるが、風に煙のいと近く、時々に靡き來るを、是やかの須磨の浦に、蜑の汐燒くなるらんと、思ひ遣るにさにては無く、わが住む後の山の端に、柴を燻る煙なり。そのしば〳〵に見も知らぬ、下々の上の樣を、間近く見るも珍らしき、心地せられて緣の端へ、猶立出でて在すれば、前の海にて漁りし、折に逢ひたる櫻鯛、めじか鰹は夫を戀ふ、名に似たれども片思ひ、鮑榮螺や海松若布、さま〴〵の海の物、籠に提げて桶にて頂き、蜑ども大勢打連立ち、「丁度御膳の御支度頃、間に合ふ樣にと一走り。今日は三月お朔日、目出度日なれば取分けて、御召なされて下さりませ」ト

口々わめきて入來るを、「此方へ來よ」ト光氏は、近々と呼出でて、まづ怪しげなる姿を見渡し、「活るが如き海の魚を、料らせて喰ふ興は、都も此所には及び難し。網引潛ぎ漁なんど、常々歌には詠みつれど、蜑のさる手をうちつけに、其樣見たることはなし。此等の物はいかにして、おんみ等はとるものぞ」ト、問はせ給へば打笑ひ、「京の人は私等が、身の上を面白さうに、歌とやらに作れども、もう〳〵蜑の境界ほど、苦しい物は外になし。都の女中は姿形と、嗜むのに荒くれしい、繩を卷くやら蓑著るやら、衣紋が少し亂れても、肌の見ゆるが恥かしさ、繕ふが女の性、夫を素裸で海の底、腰に浮桶手には鎌、岩に吸付く此鮑を、獲る中鮹が餌と間違へ、乳を吸ふやら腋の下へ、烏賊が潛つてこそぐるやら、お臀をふつつり蟹が抓る、しやうども浪のうき沈み、風が荒くて舟休み、內に寢まつてゐる暇にも、網を綴くる繩をなふ、目ざしといへる此籠を、下げては濱に磯菜摘む、蜑のまでかた右左、汲取る桶の汐よりも、いとゞ辛き世渡に、侍るなり」トさま〴〵に、安き暇なき身の憂さを、そこはかとなく囀れば、光氏は傍の、筑紫琴を搔鳴し、「我ばかり、憂きを身に積む柴舟の、漕がれ〳〵て行末は、定めなき身と思ひしが、世の憂き事は白浪に、住むも心の行末は」ト琴彈さして、「あゝ同じ事なるかな、哀れの身や。それ惟吉、魚も貝も皆取入れ、何ぞ彼等が喜ぶべき、代を遣れ」ト宣へば、はつと立つて

惟吉が、反物卷物取出し、それ〴〵配り與ふる時、光氏は聲を懸け、「遙後に引下り、恥らふ樣に面も上らぬ、まだいと若きあの蜑には、別に取らする物あり」ト、自ら上にはおりたる、小袖を取つて投遣れば、かの蜑はつと押戴き、實に生ける詮ありと、喜べる色面に顯れ、皆打連れて行く影を、惟吉つく〴〵打眺め、「今御琴を遊ばしたる、其時に蜑どもは、只うつかりと口を開き、心にしめて聞入れる、者とては無かりしに、只御小袖を祿けさせ、給ひたる女一人、感にたへて膝を擊つ、その拍子更に違はず。差俯向いて居たりしかば、面は確に認めねども、爪はづれいと淸く、なか〴〵賤しき樣にあらず。御心つかれしや」ト申上ぐればほく〳〵と、打點きて居給ふ折、仁木良淸罷出で、「某はまだ見馴れぬ、浪内とか申す下部、申上げ候は、仰に任せ此國に、陰陽師の候にかと、さま〴〵尋ね探せども、さる者は絶えて無く、たゞ鬼得院と名乘る山伏、陰陽道に精しき由、承つて彼を召連れ、罷歸り候と、遙彼方に控へて在り、いかゞ計ひ申さん」ト、聞いて光氏心づき、「その浪内は當國にて、近頃抱へし者なるが、所の事は詳しからんと、豫て言付置きたるが、蜑の囀り珍らしく、聞とれて忘れたり。その山伏を是へ呼べ」ト仰に良淸心得て、誘出づる鬼得院の、有樣を見給ふに、兜巾を頂き鈴懸の、露を結んで肩に懸け、手に苛高の數珠を持ち、りゝし氣に出立ちて、まづ恭しく禮をなし、「遙むかし安倍道滿、播摩に居住なしたる時、拙僧が遠祖、かの法師より傳を請け、今の世に至りても、其法を守りて捨てず。御用の筋は何事か」ト、謹んで問ひければ、光氏はにつこと打笑み、「御禊の禊は押なべて、今は六月晦日なれども、古は三月の、初の巳の日を用ひしとか。今日は即ち其日なり。身に思ある者なんどは、必ず御禊爲給へと、生賢しき人の言へり。長閑に霞み渡りたる、海の面も床しくて、さらば禊に出立たんと、船の用意も整へさせ、人形も作りて置きつ。いざ諸共に」トありければ、畏まつて御供し、皆々浦邊へ立出づるに、さまで大きからざる船に、たゞ幕ばかりを引廻らし、雨覆ひの屋根もなく、疎かなる設けなるが、五六艘繫ぎてあり。三五人づつ引分れ、件の舟へ乘移り、鬼得院は光氏と、同船なして胴の間に、嚴しく座を構へ、笹に幣を切懸けて、珠數を鳴し禊を讀み、事々しき人形を、浪に打入れ流すを見つゝ、舷に肱を凭せ、悠然たる光氏の、顏ばせは凪渡る、海よりも猶うらゝかなり。されども心に人知らぬ、辛苦を疊めばすぎこし方、後先思ひ續けられて、

罪なきを神も憐れめわが巳の日

と吟じながらに殘りたる、かの人形を取上げて、はら〳〵と打流せば、不思議や俄に風吹き荒れ、空も見る〳〵かきくれて、袖笠雨のあわたゞしく、降出づるに驚かれ、まだ禊は仕果てね